
孤独な魔法少女は英雄になれるか？

烏口泣鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な魔法少女は英雄になれるか？

【Nコード】

N3687X

【作者名】

烏口泣鳴

【あらすじ】

内気で臆病で引つ込み思案で後向きな少女、法子はある日落ちていた日本刀の力で魔法少女となる。喜び勇んで魔物退治へ出かける法子だが……。

少女は人々に愛される事が出来るのか。

この小説はarcadiaにも掲載させていただいております。

魔法少女は物語る

朝は魔法の時間。爽やかな鳥の声と差しこむ朝日が心も体も綺麗にしてくれる。見るもの全てが新鮮で、聞くもの全てが心地良い。朝起きたらまずは愛しの彼にご挨拶。写真立の中に居る彼に私は微笑んで、

——その隣の置時計が目に入った。

「げ」

清々しさは一瞬で消え去って、私は飛び起きて、慌てて着替え、用意もそこそこに部屋を飛び出して、階下へと走り下りる。

「きゃー、遅刻遅刻ー」

リビングでは既に弟が朝食を摂っていて、駆け込んできた私を見ると呆れた様子で呟いた。

「本当に遅刻遅刻なんて言う奴初めて見た」

「うるさいなあ。て言うか、起きてたなら起こしてよ!」

弟は食パンを齧りゆつくりとした調子で口をもごもごとさせてから、ようやく口を開いた。

「だって先に行ってたと思ってたし」

「何で?」

「いや、だってさ、朝飯食いに出て来たら姉ちゃんも母さんも父さんも誰も居ないから、先に行ったと思うじゃん」

「お父さんとお母さんも?」

その時、リビングの外から大きな音と共に叫び声が聞こえた。

「ああ! もうこんな時間! ちょっとあなた!」

どすんばたんという音が鳴りやみ、しばらくしてまた叫び。

「寝ぼけた事言っていないで早く起きて! 遅刻するから!」

「何! ああ、本当だ!」

そうしてどたんばたんという音が響いてくる。多分、慌てて用意をしているのだ。先程の私と同じ様に。弟は激しい用意の音を聞き

ながら、ゆつくりとココアを飲み干して言った。

「似た者同士。俺以外ずばらずぎ」

反論したいが言い返せない。確かに余裕を持って起きたのは弟だけなのだ。

と、そこでふと気が付く。

「そういえば、在校生って今日一時間早いんじゃない？ 準備するとかで」

「え？ あ！」

「なんかもう時間過ぎてない？」

「やべ！」

弟が慌てて立ち上がると、鞆を拾い上げた。

「やーい、結局あんたが一番ずばらー」

「うつせえ！ 勘違いしただけだし！」

「でも、もう遅刻だよねえ。私達はぎりぎり間に合いそうだし、遅刻するのはあんただけじゃん」

「まだ間に合う！」

そう言つて、弟は飛び出していった。

「もう完全に遅刻だよー」

追い打ちを浴びせてみたが、聞こえているのかいないのか、玄関が猛烈な勢いで開いた音がして、窓の外から激しい靴音が聞こえてくる。

ちよつとすつきりしたのもつかの間、こちらも時間が迫っている事に気が付いて、私は早速朝の準備の続きに取り掛かった。そこに両親も加わって慌ただしい準備が繰り広げられた。

何とか準備を終えて、まだカメラをチェックしている両親を置いて、私は先に学校へと向かった。道中、どうにも身だしなみが気になって、思わずコンパクトミラーを覗いてしまう。なんたつて今日は卒業式。最後を飾るというのに、無精な姿では挑めない。

何度も何度も鏡の中の自分を確認していると、いつのまにか学校に着いていた。まだ五分ある。間に合った。

教室の中は卒業式だと言うのにいつもと変わらぬだらけた様子だった。たったそれだけ、いつも通りの光景を見ただけで、私の中に瞬く間に寂しい気持ち満ちた。今日で終わり。そう思うと、何だか教室に入り辛い。入り口でためらっている、頭を叩かれた。

「おい、こんな所で立ち止まってないでさっさと入れ」

担任に促されて私は慌てて席に着く。もうクラスの皆は整然と席に坐つて、一時前の喧騒は消えていた。それもまた授業中に見慣れた光景で、いつもは何とも思わなかったはずなのに、再び悲しみが湧いた。

面倒臭がりだった担任らしい小ざつぱりとした最後の言葉を経て、卒業式が行われた。卒業生、在校生、教師、家族、沢山の人が居る。完全無欠の静けさではない。所々でざわつきが起こる。でもそのざわつきも遠慮に遠慮を重ねてこそそと隠れる様に交わされていて、耳に届く度にこの場所は静かなんだと再確認させられた。多分、本当に音が無い空間よりも余程静かなのだろうと思う。

そんな空間の中で私達家族はばらばらに居た。でも時折意識を向けると、向こうもこちらを見ていたりして、繋がりが目に見える気がして、何だか恥ずかしかった。両親と私の目が合った。すると両親は大きく手を振って、その行為が注目された事に気が付いて赤面し、以後は大人しくしていた。それでも時折目が合うと、恥ずかしそうに微笑み合った。弟は在校生一同が唱和する所で何だか周りから小突かれていた。多分、言葉を間違えたのだろう。別に遅刻が直接の原因ではないだろうが、何となく朝に遅刻したのだろう事を思つて、ほら見た事かと呟いた。するとまるでその呟きが聞こえたみたいにこちらを睨んできて、何か豪い剣幕で口をパクつかせていた。私はと言うと始めの内こそ悲しくはあったけれど、隣の子が泣き出した瞬間から徐々に覚めていき、終わる時にはほとんど何も感じなくなっていた。ああ、これで終わりかだとか、泣いている人は偉いなあだとか、そんな淡泊な思いを微かに抱いただけだった。

卒業式が終わるとそのまま体育館の外に出て高校生という身分が

終わる。まだ大学生でも社会人でも無い宙づりの人々は高校生という地盤に縋ろうと、そのまま帰ろうとはせずに校庭に散らばって、最後の思い出づくりを始めた。

「へい！ 法子！」

「痛！」

お尻を叩かれた衝撃で前に飛びあがった。振り返ると親友の摩子がにやにやとした笑顔を浮かべていた。

「何すんの！」

「そんな事より良いの？」

摩子が離れた場所を指差す。

「ボタン取られちゃうかもよ？」

見れば女子の人だかりが出来ていた。その光景の意味を悟った私は一瞬で寒気だって、慌てて駆け付けた。人だかりに手を差しこみ、

「どいて！」

無理矢理その群れを押し退けて、中心に居る男子に手を伸ばす。

「将刀君！」

私が声を掛けると、

「お、法子」

将刀君はすぐにこちらを向いてくれた。

「ボタン頂戴！」

一斉に周りの女子に睨まれた。だがそんな事に構ってはいられない。むしろだからこそボタンを貰わなくてはならない。

将刀君はブレザーを摘まんでみせて、

「良いよ。第二ボタンだっけ？」

周囲の眼がきらりと光る。ブレザーには二つボタンが付いている。残りのボタンを貰う算段をしているに違いない。事実、中学校の卒業式では学生服の第二ボタン以外の全てを他の女に持って行かれた。かつての失敗を繰り返すつもりは無い。私は恥も外聞も捨てて周りに聞こえる様に大きく叫んだ。

「うっん、両方共」

驚愕と敵意と嫉妬と殺意が私に突き刺さった。そんな中で私はじっと耐えて将刀君の反応を待った。しばらくブレザーを見下ろしていた将刀君はやがてあっさりと頷いてブレザーのボタンを引きちぎった。

「良いよ、どうせもう着ないし」

あつという間に、ボタンは二つ共取れて、私の手に手渡された。私はそれをぎゅっと握りしめる。温かった。

「高校も終わりだな」

「そうだね。離れ離れになっちゃうね」

ちよつとしんみりとした会話だ。周りを囲む睨みつけてくる女子達が届かなければ。

「ま、遠くに行く訳でも無いし、すぐに会えるけどな」

「浮気しちゃ駄目だよ？」

信頼していない訳ではないけれど、私は半ば本気で心配してそう言った。

将刀君はこちらを力強く見つめて、

「安心しろよ。俺にはお前しか見えないから」

そう言つてふつと笑った。

思わずぶつ倒れそうになったのを何とかこらえた。頭の中の叫びと周囲の悲鳴が奇妙に共鳴する。嬉しすぎる。にやけていないかと心配になった。周りから「私もあんな事言われてみてえ」と言う声や「マジで、あの女殺す」という声が聞こえてくる。勝った。周囲の雑音全てを無視して、私は将刀君に笑いかけた。

「ありがとう。私も将刀しか見られない」

ありつたけの思いを込めてそう言った。

すると突然将刀君が笑い出した。何か変な事でも言っただろうか。私としては渾身の言葉だったのに。不安が一気に広がった。私がじつと将刀君を見つめると、すぐに笑いが止んで弁解する様な口調で――でもまだ言葉の端に笑いが覗いている――

「悪い。ただなんか漫画みたいなやり取りだなんて思ったら面白く

て」

確かにそうかもしれない。けれど幾らなんでもこの状況で笑うのは失礼だ。私が目と表情で思いつきり不快を告げると、将刀君は「悪い悪い」と半笑いの表情で、まるで反省した様子も無く、その上輪の外からの

「おい、将刀！ 写真撮ろうぜ！」

という言葉に、手を振って

「分かった、今行く！」

と言つてのけた。

私がいまますますしかめっ面を強くすると、将刀君はちょっと困った顔をしてからもう一度悪いと呟いて、それから私の耳元に口を近付けた。

「結構嬉しかった」

そう言つて、将刀君は私に手を振つて、その場を離れていった。

女子の群れもそれに釣られる様に付いていく。私は一人その場に残された。

言葉の内容には不満が残るものの、私は一瞬前のやり取りに顔を火照らせて、その場で硬直して立ち尽くした。嬉しさと恥ずかしさが緋い交ぜになって、心の中は荒れ狂っていた。

「良かったじゃん。ボタン貰えて」

背後から声を掛けられて振り返ると、摩子が笑っていた。

私はしばらくそのなじみ深い顔を見つめた後、猛る心に任せてチヨップした。

「ぐへ、何で？」

「いや、何となく。居ても立っても居られなくなって」

「相変わらず訳が分からない」

親友への攻撃で心を静めた私は気になった事を尋ねた。

「摩子ももうボタン貰ったの？」

「私はそんな風習には興味ないから」

「風習って……でも、他の人にとられるの嫌じゃない？」

「そつちと違つて、私の彼氏はそんなに人気じゃないからね」

摩子は笑つてそう言ったが、その後ろでは見知らぬ女子に話しかけられている摩子の彼氏が居る。私はそれをそつと指差した。

「良いの？」

摩子が振り返る。

次に瞬間には彼氏へ向かつて駆け出して行つた。

それを笑つて見送つてしていると別の友達が何人かで固まってやつて来た。

「卒業おめでとう」

「そつちこそおめでとう」

何となくずれた挨拶だ。それこそ今の時期は日本全国で執り行われている別れを惜しむ会話を交わしていると、次第にクラスのみんなが集まつて来て、摩子も戻つて来て、全員が集まつたところで集合写真を撮つた。後は校門を出たらクラスは離れ離れになる。みんなで何か食へに行こうという提案もあったけれど、結局用事のある人が多くて立ち消えになった。私も家族と食事に行く。もしもみんなで何処かへ行くのなら優先しようと思つたけれど、立ち消えになったのならしょうがない。もう会えないというのに、こんな事で良いのだろうかという思いも心の端にはあるけれど、でもこんなものかなという思いが強かつた。誰かが「うちのクラスらしいな」と言つた。みんな笑つて同意した。私もそうだと思つた。行き先の違うクラスメート達はそろそろと校門までの最後の旅路を楽しんだ。

摩子は他の友達と何処かへ食へに行くらしい。校門を出たら二人の道は違う。中学と高校を一緒に過ごしてきた親友ともお別れだ。隣に並ぶ摩子が何だか黄昏た様子で遠くを見ながらぼんやりと呟いた。

「ねえ、約束憶えてるよね？」

「勿論」

私もぼんやりとそれに応えた。何だか心がごちゃごちゃとしていて、しっかりと思いを抱けない。

「一緒にAランクに合格だからね」

「分かってるって」

「修行さぼっちゃ駄目だよ」

「そっちこそ」

摩子が急に笑って拳を突き出してきた。

私はその拳に自分の拳をかち合わせた。二人だけの合図。

校門を抜けた。

「じゃあね、法子」

「うん。じゃあね、摩子」

私達は分かれる。約束だけを結び付けて。いずれ約束の糸を辿って出会うのだろう。細い糸に引き合わされた未来の自分と親友を思い描きながら、私はそんな事を思って、校門の外で待っていた家族と合流した。

卒業祝いの食事も終えて、高校生でなくなった私は、布団に転がりながら明日からの日々を思い悩んだ。

携帯を無為にいじりながらしばらく考えて、ようやく私は決心する。

明日は摩子達と大学に着て行く為の服を買いに行こう。将刀君と遊びに行くのは明後日だ。

大学というのは不思議な所で、種々雑多な人々が過去と現在と未来を交差させて、驚く程多様な物語を織り成している。それらの物語は余りにもあっさりと余りにも無造作に、そこら中で語られ消えていく。

授業の無い教室でまた一つの物語が語り終えられた。

それに対して聞き手はその余りにも重い内容にどう答えて良い物かと迷って、

「大変だったんだね」

それだけ言った。

語り手は笑う。

「そんな大した事じゃないさ。これ位の経験、誰だっと思っているだろう？」

そんな訳が無い。家族を突然失うなんて、そんな事。そう聞き手は思うのだが、語り手が笑顔を浮かべているので、率直な意見は言い辛かった。

「まあ、私の話はもう良いだろう。それじゃあ、次は法子君、君の番」

話辛かった。今の話に比べたら自分の過去など無いに等しい。聞き手は躊躇するが、語り手はそれを許さない。

「君が話してくれないと不公平だろ。さあ、聞かせておくれよ」

「うーん、アイナさんの過去に比べたら、ホントに下らない話なんだけど」

「そんな事無いさ。さあ、お願いするよ」

「うん。じゃあ、私が魔法少女になった話なんだけど」

聞き手になった元語り手が手を叩く。語り手になった元聞き手は恥ずかしそうに俯いてから、空き教室に集まった出会ったばかりの知り合い達に向けて訥々と語り始めた。

ヒーロー参上

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と蔑まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

ここにもそんな変身願望を持つに至った者が居る。名を五月女摩子という。何処にでも居る中学生である。日常に不満は持っていない。ごくありきたりの世界に囲まれてごくありきたりの生活を送っている。名前が些か特殊だが、本人は余り気にしてない。名前によるいじめも無く、生活は順風満帆と言って良い。

では何故変身願望を持つに至ったか。勿論事前に述べた通り、変身願望なぞ誰でも持っている。だが彼女は実際に変身するに至る。そこに違いがある。では何故彼女は変身するに至ったか。一体どんな願いを持っていたのか。

幾人かの方は早とちりしてこう考えたであろう。はあ、これは恐らく恋愛絡みだなと。思春期といえば恋愛の事に違いないと。恐らく片思いでもしているのだらうと。だがはずれである。現時点で彼女に恋愛願望は無い。加えて前述したとおり、彼女は甚だ順風満帆である。それは人間関係も例外ではない。そもそもそれは誰もが持つ悩みの一つであり、実際に変身する者との差が生まれる程の願いではない。

では何故か。

と、酷く仰々しい書き方をさせていただいた。ところがほとんどは外連味である。彼女が願望を持つに至った経緯に何か凄い期待をした方も居るかも知れない。だが繰り返しになるが、彼女は至って

普通の中学生である。がっかりさせない様にあらかじめ言っておくが、彼女が変身動機は良くある心の動きであり、魔法少女を含む変身ヒーローの中にもこの動機で変身した者は少なくない。

願望の動機はとても単純でそして少し不純だ。

町に魔物が出現した。そうニュースで報じていた。

摩子は朝ごはんを食べながらそのよくあるニュースを聞き流していた。

魔物は魔女っ娘を名乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たという。

特に興味も無いので摩子はまるっきり別の事を考えながらご飯を口に運んでいる。

「良いなあ」

一方、姉は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられていた。

「なりたいの？」

聞くまでも無い。姉はいつも公言している。

「勿論なりたい」

「ふーん」

姉の言葉はそこまで珍しいものではない。変身ヒーローになりたいと言う者は多い。

「見てみなさい、あの楽しそうな表情」

特に小さい子供の憧れが強く、将来になりたい職業の上位に食い込んでいる。今、幼稚園や小学校では有名ヒーローの物まねが流行っていて、摩子が小学生だった時からそれは変わらない。姉が小学生だった頃から変わっていない。

「ああ、いいなあ。なりたいなあ」

けれど、大人が変身ヒーローを願うのは子供っぽいという風潮が何故だかある。特に高い年齢層程、変身ヒーローは馬鹿げたものであるという考えが蔓延している。魔法が認知していなかった頃の名

残なのか、あるいは衣装の所為なのか（一般に変身ヒーローの服装は普段着とかけ離れている）、あるいは生産性の少なさに起因しているのか。理由は現在でも様々に議論されているが、とにかく変身ヒーローを志す者は幼いという風潮が確かにある。

その言でいけば、姉は幼い。実際、中学生の摩子から見ても、大学生の姉は少し子供っぽいところがある。けれど一概に個人の成熟性にのみ原因を求める事は出来ない。何故なら高い年齢層と違って最近の若者の間では変身ヒーローを目指す事が容認され始めているからだ。

原因は単純で、ロンドンで開かれた第十五回技術革新の諸問題における世界的枠組み会議、通称第十五回魔術会議において、魔物の討伐に関する条約が見直され、民間の魔物討伐従事者の待遇が向上し、日本においても魔物討伐の国家資格、及び民間資格の所持者に対して特に金銭面の大幅な改善があった為である。

魔物討伐は儲かる。第十五回魔術会議以降急速に広まったその噂——金銭だけで計るならそれは確かに正しかった——によって、魔物討伐専門職の一つである変身ヒーローを目指す者が増えた。

今迄は変身ヒーローなどテレビの向こうで活躍している有名人位に思っていただけに、急に舞い込んだ儲かるという実益の衝撃は凄まじく、儲かるから派生した噂、曰く楽そう、曰く楽しそう、曰く人気者になれる、曰く一生安泰、曰く自慢出来る、曰く自由である、曰く税金がかからない、これらの安直なイメージが広がり過ぎた。その為、就職を嫌悪する大学生や会社から逃避したい社会人がその絵に描いた餅に憧れを抱く様になった。

「でもあたしには才能が無いからなあ」

そうして多くの者が挫折した。幾ら待遇が改善し多額の金銭が受け取れるようになったとはいえ、その為には資格を取得しなければならぬ。少なくとも民間資格の3級（町内の防衛相当）を持たなければはした金すらもらえない。まともに生活するのであれば、民

間資格の一級（広範囲の防衛相当）、あるいは国家資格のE＋ランク（レベル2以下の作戦従事）が最低条件である。

けれど未だに希望者は後を絶たない。まだ挫折を味わっていない者が後から後からやってくるのもそうだし、特に変身ヒーローの場合突発的な才能の開花が良く話題に上げられている為に、自分も何かの偶然でなれるんじゃないかと期待してしまうからだ。

だから才能が無いと嘆いている姉もいつか何かの偶然でなれるのではないかという希望に身を焦がしている。

「ホント楽そうだよね、魔法少女」

テレビの向こうでは丈の短いドレスの様な衣装を着た女の子が皆の喝采に頭を下げている。楽そうかどうかは分からないが、パツと見れば楽しそうには見える。実際は分からないが、その楽しそうな表面だけを見て志す者は殊の外多い。

「摩子はなりたくないの？」

「私はいあまり興味ないなあ」

「楽しそうじゃん。姉妹で魔法少女とか絶対に人気出るよ」

「アイドルじゃないんだから。それにあの衣装、お姉ちゃん着るの？」

テレビの画面には大人が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝采の中去っていく姿が映っている。

姉はしばらくテレビに目をやってから摩子に笑いかけた。

「いける！」

「無理だよ」

摩子はあるさりと言い放って、しょんぼりと頂垂れた姉を余所に、またご飯に集中し始めた。

学校へ行くと友達が盛り上がっていた。

「どうしたの？」

鞆を置いて友達の輪に入って行くと、目を輝かせた友達が一齐に摩子へと目を向けた。

「あのね、今度の日曜日にサッカー部の練習試合があるんだって。それでみんなで応援に行こうかなって」

「ホントに？ 私も行きたい！」

勿論、彼女達はサッカーを見たい訳じゃない。見たいのはサッカーに興じる部員達だ。サッカー部に気になる男子が居る。だから見に行く。応援に行く。摩子もその例に漏れず、サッカー部に居る気になる男子を見に行きたかった。

「何？ 応援に来てくれるの？」

女子だけの輪に闖入者がやって来た。サッカー部に在籍している男子だった。

「いや、あんたの応援に行く訳じゃないから」

一人が辛辣な言葉を吐いた。それに合わせて他也同意する。

「ちよつとで良いから応援してくれよ」

その男子の眼が摩子に向いた。

「摩子は応援してくれるよな！ なんだって幼馴染なんだし」

話を振られた摩子は考え込む様に指を口に当てて、

「良いよ。ついでに応援してあげる！」

「ついでかよ！」

「そりゃね」

男子が突っ込みに摩子は何を当たり前なという表情を返した。男子はぐっと言葉を詰まらせて何処かへと走り去っていった。

「応援してあげるって言ったのに」

摩子が不思議そうに首を傾げる。その様子を見て、周りの友達は気の毒そうに男子の消えた先を見送った。

「惚れた相手にああ言われたら心折れるわ」

「脈の一打ちも感じさせない切り捨て方だったね」

ひっそりと話す友達に気が付いて、摩子は口を尖らせた。

「何々？ 何で内緒話してるの？」

「何でもない」

尚も詰め寄る摩子を上手にいなしながら、話題はまた週末のサッ

カーの話題へ、そこから昨日のテレビへと移って、担任が来たところで中断された。

いつもの日常、いつもの友達。ともすれば飽きてしまいそうな程、満ち足りた生活こそが、摩子の日常だ。

時が過ぎるのは早く、授業は進み、お昼休みが終わり、下校の時刻を過ぎて、摩子は帰り道の途中で友達と別れた。さて、帰ったらどうしようかな、今からでも戻って別れた友達を誘って遊びに行きたいな、などと考えながら歩いていると、ふと道端に犬が集まって吠えているのが映った。

「犬だ！」

喜び勇んで駆け出して、すぐに犬の様子が荒れている事に気が付いた。何やら喧嘩をしているみたいだ。見れば真ん中に震える猫の様な生き物がいる。

困む犬達は何だか獰猛そうで危険な様子が漂っている。助けに行きたいが、危なそうだ。摩子は一瞬躊躇したが、すぐに使命感に燃えて駆け寄った。

「駄目だよー」

摩子が犬の集団に突っ込もうとすると犬達は驚いて逃げていった。一匹、頭を押さえる猫の様なのが残っている。

「大丈夫？」

それが頭を上げて摩子を見た。その顔に摩子は戸惑った。それは猫とハムスターのあいこの様な顔をしていて、猫の様で猫ではなかった。摩子の知らない種類の生き物だ。何処かにいそうな動物ではあるけれど、まだ見た事が無い。摩子是谁かのペットなのかなと動物をまじまじと見つめた。その時、動物が口を開いて、摩子を更に驚かせた。

「ありがとう。助かったわ」

頭を撫でてみようかと伸ばしていた摩子の手が止まる。摩子はしばらくの間、口を聞けない程驚いて固まった。

「ここらは治安が悪いのね。参ったわ」

「喋った！」

摩子の大声に今度はその生き物が驚く番だ。

「な、いきなり大声を出さないでよ」

「また喋った！」

「当たり前じゃない……あなた、もしかして魔術で生み出された生き物は初めて？」

「魔術の？」

そういえばと摩子は今日の授業を思い出した。社会の時間に魔法によって生物が初めて生み出されたという話をしていた気がする。確か、1999年のアメリカの……そこから先は思い出せなかった。テストに出そうだし帰ったら覚えようと心に決めた。

「ちよつと何黙り込んでるの？ まあいいわ。とにかくありがとう。お礼、をしたいんだけど」

「わあ、凄いなあ。本当に喋ってる」

摩子が近付いて頭を撫でようとすると、その生き物はひらりと避けた。

「ちよつと幾らなんでもいきなり撫でようとするなんて、無礼なんじゃない？」

「あ、ごめんなさい」

「まあ、今回は大目に見てあげるわ。で、お礼なんだけど」

その生き物は辺りを眺めまわして、それから耳をひくひくと震わせて、それから道の先に目をやった。

「あ、来た来た」

道の先に影が見える。影は少しずつ大きくなって、やがて黒いコートを着た男だと分かる。眼鏡を掛けた、理知的で、何だか冷たそうなその男は、摩子の前に立つといきなり頭を下げた。

「こいつを助けてくれたんだね。ありがとう」

「え、いえ。こちらこそありがとうございます」

いきなり現れた男に戸惑って、訳も分からず摩子も頭を下げた。

男は口の端を釣り上げて笑ってから、厳しい表情を作って生き物

を見た。

「マチエはもつと気を付けなさい。君自身はそんなに強くないんだから」

「外に出歩くくらい良いじゃない」

「それでこんな事になったんだろっ」

マチエと呼ばれた生き物はつんとそっぽを向いて、聞き流す体制に入る。男はしばらくそんなマチエを見つめてから、やがて摩子に向き直った。

「助けてくれたお礼をしたいんだが」

摩子は何だか浦島太郎みたいだなと思った。ついていったらおばあさんにされてしまうかもしれない。

「私は骨董品を扱っているんだ。もしも気に入った物があるなら一つあげよう。店に来るといい」

摩子は玉手箱を開けてよぼよぼになる自分を想像して首を振った。マチエの馬鹿にした様な声が男に浴びせられる。

「きんげんやは何にも分かってないね。女の子がそんな骨董なんて欲しがる訳ないでしょ」

「そういうものなのか？」

マチエが来馬鹿にした様に笑う。まるで人間みたいな仕種だ。

摩子の目がマチエに釘付けになった。今自分は凄い物を見ているんじゃないかと、何となく嬉しくなった。そんな摩子をちらりと見やった男はにやりと笑って、

「ああ、良い事を思いついた」

静かに言った。

「さつきからマチエ君が気になっているみたいだ。良かったらマチエ君をあげよう」

「は？」

マチエが素つ頓狂な声を上げる。摩子も同じ心境だった。

「何でいきなりそんな事になる訳？」

「何を言う。マチエ君にだって悪い話じゃないだろう。見た所素養

は十分だ」

マチエの目が摩子を射抜いた。何だか品定めをする様な目付きである。しばらく摩子の全身を子細に眺めてからアチエの首がゆっくりと縦に振られる。

「確かにそうみたいだけど。でも本人の意志も尊重しないと」

「なら聞いてみよう。君、えーっと名前は」

「摩子です」

言ってから、知らない人に名前を教えちゃまずかったかなと思った。出会ってからまだ少ししか経っていないのに摩子の中から警戒心が消え去っていた。

「そうか、摩子君、君は魔女を、あー、今の言葉で言えば、魔法少女をどう思う？」

魔法少女？ 摩子の頭に今朝のやり取りが浮かぶ。姉の言っていた言葉が思い出される。

「楽しそう」

「なら決まりだ。お礼としてマチエ君をあげよう」

「どういう事ですか？」

摩子の質問を無視して男は背を向けた。

「それでは第二の人生を楽しみたまえ」

高笑いを上げながら何処かへと去っていく。

後に残された摩子は訳が分からずに、同じく残されたマチエを見つめた。マチエも摩子の事を見上げていた。

「あなた本当に良いの？」

「何が？ ですか？」

「別に敬語なんか使わなくていいわよ。それで、魔法少女、本当に良いの？」

「え？」

「だからあたしを受け取るって事は魔法少女になるって事だけど本当に良いの？」

「え？ えーっ！」

摩子の悲鳴が町の中に響き渡った。

彼女は驚きの声を上げたが、それもつかの間の事だ。不思議な生き物と話をし、実際に魔法少女になれると気が付いた時、彼女は魔法少女になってもいいかなと思う様になる。流されるままに彼女は魔法少女となる。その場の雰囲気吞まれて自身の願望を形作る。

それはある一面を見れば不純で主体性の無い意志の現れだが、人間としては当たり前でとても単純で、そうして理由が無い分だけ壊れにくい。壊れても失うものが無い。この流されて作られる願望は復讐によって作られる願望と並んで説話、伝説に極めて多く見受けられ、悲劇につながりやすい復讐とは反対にとっても樂觀的で民衆の支持を受けやすい。英雄は時代の望む声によって生まれる。つまり流されて大事業の願望を抱く者は英雄たりうる資質を持っている。

はつきり言えば、彼女は主人公たりうる。もっと正確に言うならば、ヒーローの素養を持っている。彼女は明るく、快活で、人好きされ、才能に溢れ、善悪を知り、勇気を湧かせ、公正であり、固い意志を、愛すべき者を持ち、時に悩み、時に苛み、時に阻まれ、時に悲しみ、時に失い、最後には必ず勝ち、信念を全うし、世界を救う。まさしく説話の中の英雄である。

だからからこそ、この物語の主人公たりえない。この物語は卑屈で信念を信じ切れず勝つか負けるか分からない、そんな普通の人間が英雄と肩を並べようとする物語だからだ。

彼女は英雄であって主役ではない。よって彼女の話はここで途絶する。次からが本物の主人公が現れる本当の物語の始まりとなる。

主人公参上

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と蔑まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

ここにもそんな変身願望を持った者が居る。名を十八娘法子という。何処にでも居る中学生である。ごくありきたりの世界に囲まれてごくありきたりの生活を送っている。姓が些か特殊なのがコンプレックスの一つで、周囲の注目以上の注目を感じて小さくなり、いつも苗字を呼ばれる度に怯えている。名が地味なのも気にして常日頃からもっと良い名前にしたいと思っている。

彼女は常日頃から自分を変えたいと願っている。名前もそうであるし、性格ももっと明るくなりたいし、小学生に間違われる事の多いこの顔や体ももう少し大人びたていいんじゃないかと思っているし、もっと周囲と上手く付き合いたいと思っているし、そして何より何だか満たされない。常日頃から何か変わって欲しいと願っている。珍しくもない一クラスに一人はいる内気な少女だ。

前述した変身願望をこれでもかという位に持っている。それもまた珍しい事では無い。一つだけ違うのは、その変身願望を極端な形で叶える事になる、この一点に尽きる。

そう彼女は魔法少女となる。

町に魔物が出現した。そうニュースで報じていた。

法子は朝ごはんそっちのけてそのよくあるニュースに聞き入っていた。

魔物は魔女っ娘を名乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たという。

あまりにもテレビに集中しすぎて口に運ぼうとしたごはんが箸からこぼれて茶碗の中に落ちた。

「良いなあ」

一方、弟は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられている姉を見てうんざりと溜息を吐いた。

「そんなに魔法少女になりたい訳？」

聞くまでも無い。法子は常日頃から願っている。

「勿論なりたい」

「どうでも良いけどさあ。チャンネル変えない？ 俺、野球の結果知りたいんだけど」

法子はそんな言葉を見殺しして画面の中で丈の短いドレスの様な衣装を着て皆の喝采に頭を下げている女の子から目を離せずにいた。

「私もなりたくないなあ」

「止めてよマジで。ガキじゃないんだから」

「小学生のあんたに言われたくないんですけど」

「精神年齢の方。俺、来年から姉ちゃんと同じ中学校に行くんだからさ、変な事して俺に恥かかせないでよ」

「あんたはなりたくないの？」

「変身ヒーロー？ もう卒業したよ」

「楽しそうじゃん。姉弟で魔法少女とか絶対に人気出るよ」

「ちよつとやめろよ。何で俺が女の格好しなくちゃいけないんだよ」

テレビの画面には男性が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝采の中去っていくところ映っている。

法子はしばらくテレビと弟を交互に見てから真剣な表情でごはんを飲み込んだ。

「いける」

「絶対嫌だからな！」

憤慨する弟を余所に、法子は魔法少女を夢見たまま、学校へと向

かった。

学校へ行くと、教室の一角で女子達が盛り上がっていた。

法子はその様子に一瞥をくれてから、未練がましく耳だけは傍だたせて自分の席に坐った。昨日から読み始めた小説を開いて文字に目を滑らせながら、聞こえてくる会話に集中する。

どうやら週末にサッカー部の練習試合があるという話らしい。何だそんな事かと、法子は聞き耳を打ち切った。下らないなあと思うもう少しましな話は出来ないのだろうかと思う。けれど少しだけ羨ましく思う。あんなに他愛の無い話で盛り上がれて良いなあと思う。小説を読み、授業が始まり、授業を受けて、休み時間になって、小説を呼んで、授業を受けて、それを繰り返して、お昼ご飯を一人で食べて、また小説と授業を繰り返して、そうして学校が終わる。部活も何も所属していないので家に帰る。

下校する時はなるべく沢山の人に紛れて、一人で帰っている事に違和感を持たれない様にする。たまたま帰りの会が早く終わったりして、人が少ない時には真っ先に帰って誰にも見られない様にする。友達が居ないので、たった一人で帰る帰り道。特にこれといった用事も無いので、毎日真っ直ぐ家に帰る。時たまそれが寂しくなる。でもすぐにこう思う。それでも私はいじめられていないと。他のクラスではいじめがあるらしい。世の中にはいじめの話で溢れている。法子は自分が一つ間違えれば容易にいじめの対象になる事を自覚していた。それでもいじめられていない自分は、いじめられている人々に比べてまともなんだと法子はそう思う。

そうして自分に自信を付けていたのに、今日読んだ小説の主人公が学校で友達と仲良くしている場面を思い出して、少し落ち込んだ。小説の主人公にはあんなに沢山の友達が居るのに、私の周りに友達が居ない。毎日毎日、家で本を読んで、漫画を読んで、テレビを見て、ゲームをして、学校に行けば早く終わって欲しいと願ってじつと本を読んで授業を受けて、中学校に上がる際に何かと入り様だろ

うと買ってもらった携帯は全く使う機会が無くて。そんな事をつらつらと考えて、最後にやっぱり自分は駄目人間なんだと結論付けた。嫌になって思考を打ち切って、顔を上げた。

道端に犬が輪を作っていた。何だか唸り声を上げている。良い雰囲気じゃない。

犬同士の喧嘩か、あるいは他の生き物に群がっているのか。遠くで良く見えない。もしかしたら小さな子供が襲われているのかも。そう思うと急に寒気がした。見過ごして帰った後に実は子供が襲われていたのだと分かって、それで子供が死んだと分かったら。そんな事を考えると怖かった。

追い払わなくちゃ。そう思って犬達を見て、どの犬も凶暴そうな顔をしている事に怖気づいて、結局法子は出来るだけ離れて遠巻きにして素通りする事に決めた。出来ればただの犬同士のけんかである事を祈りながら。

法子が目を開じながら逃げ去ろうとしていると、犬が吠えた。法子は怯えて立ち止まる。ぎゅっと目を瞑った暗闇の中で、犬達が自分に向かってくる、そんな想像を抱いて怖くなった。逃げたいが体が硬直して動かない。

その時、スカートを引っ張られた。引っ張られてよろめいて、襲われたと驚いて目を開けると、犬が走り去っていくところだった。どうやらすれ違われただけらしい。犬達の居た場所を見ると、犬達は居なくなっていた。

そこに生き物が落ちていた。犬に隠れていた所為で見えなかった生き物。きつと犬にいじめられたのだろう。蹲って震えている。

法子は一瞬戸惑った。助けてあげたかったが、幾ら小さくても野良の生き物だ。襲われて怪我でもして変な病気になってしまつかもしれない。

やっぱりこのまま通り過ぎようかと歩き出して、しばらく歩いて、それからやっぱり見捨てる事が出来なくて駆け戻った。

蹲る生き物の傍で屈みこんで、その体に手を伸ばす。

ぐぐと地の底から響く様な低音がその生き物から発せられた。

「え？」

法子が思わず手を離すと、生き物はその小さな身を起こして法子を見上げた。

紫色の目をした犬の様な生き物。唸り声をあげ、歯を軋らせ、法子の事を睨みつけている。

魔物だ。

法子が慌てて立ち上がって身を引いた。魔物は人を襲う。そのほとんどは風の悪戯の様な些細な事しか出来ないけれど、偶に力を持っているのもいる。それこそ人を殺してしまえる様なのも現れると聞いていた。

魔物に出会ったらどうすれば良いのか。子供達は周囲の大人達に耳にタコが出来る程聞かされている。

逃げる。

逃げて大人の居る所へ行け。

法子は親から言われている通りに魔物から逃げる為に駆け出した。それが子供達に教えられる対処法。根本的な解決ではないけれど一定の効果を上げる教えだが、今はまるで役に立たなかった。

魔物の足は法子よりも早く、疾風の様に法子へ襲いかかり、その身を倒した。地面に倒された法子はいずれながら、後ろを振り向く。目の前に魔物の小さな体には酷く不似合いな、ゴムの様に伸びて大きくなった口が迫っていた。

殺される。震えながら、しりもちをついたまま後ずさるが、当然逃げられない。魔物はまるでいたぶる様に少しずつその口を近付けてくる。

殺される。再度そう思った時に、力が湧いた。勢いよく立ちあがって、魔物から少しでも離れる為に、駆け出そうとして——すぐさま魔物に飛び掛かれて、また倒れた。何とか逃げようとする法子の頭を足で押さえつけて、今度こそ魔物は牙を法子へと突き立てようとした。

法子は背面に違和感が走ったのを感じて死を覚悟した。更に背中に熱が行き渡る。噛まれたのだと思って、思わず振り返った。

そこには既に魔物が居なくなっていた。辺りを見回すと、離れた場所で魔物が横たわっていた。

法子は訳が分からずに呆然としてみると、目の前にふわりと軽やかに着地する者があった。丈の短いドレスの様な真白い衣装を着て、頭に奇妙な髪飾りを付け、肩に見た事も無い生き物を乗せた女の子が法子に向かって笑いかけてきた。

「怪我はない？」

法子が呆けていると、女の子は法子の体を見回して、

「ああ、ちよつと擦りむいてるね」

そう言つて、手に持っていたステッキを振った。たちまち法子は光に包まれて、一瞬後には傷全て消えていた。

「これで大丈夫」

女の子が魔物を見据えて、そうして親しげに笑う。

「君も怖かったんだよね。だからこんな事をしちゃったんだよね」
諭す様にそう言つてステッキを構えた。

「今帰してあげるから」

ステッキが振るわれると、魔物の足元に光の円が描かれた。もう一度ステッキを振ると円の周りから光の蔭が伸びて、一瞬の内に複雑な模様を描き始め、それは中空へと伸びあがり、複雑な模様を――それは良く見れば異形の者達が行進する絵だった――描きながら魔物を包みあげ、再び少女がステッキをふるうと、一瞬爆発的に輝いて、光が収まった時には魔法円も魔物も消え去っていた。

「ふう、何とか出来た」

女の子が胸に手を当てて大きく息を吐いた。

「あなたは誰？」

瞬く間に魔物を消し去った少女に、法子は思わずそう聞いていた。

「私？ 私――」

一瞬言葉が途切れ、

「名乗る程のものじゃございません！」

大きな声でそう言い切って、少女は跳躍して民家の屋根の向こうに消えていった。

すぐに世界はしんと静まって一瞬前の事が嘘の様に辺りは平穏な日常に戻っている。空は暮れに向けて少しずつ熟れ始めていた。法子はしばらく消えた先をぼんやりと見てから呟いた。

「魔法少女に助けられちゃった」

法子はゆっくりと立ち上がって、危なっかしい足取りですぐそばの小さな公園に向かった。そこは丁度生活圏の奥まった場所にあつて、人の通らない道に囲まれた余程何か無いと誰も来ない公園で、ある時偶然見つけてからお気に入りの場所になっていた。

今日もまた古びたブランコに腰かけて、ノートを開いた。心の中が興奮で荒れ狂っていた。魔物に襲われ命を失いそうだった事。初めて見た変身ヒーローになんと助けられた事。何だかファンタジーの世界が自分の身近に迫った気がしていた。

ノートを開いてそこに拙いイラストを書き入れる。魔法少女を見たのは一瞬の事で姿はほとんど覚えていない。だからほとんどを想像で補って、先程の魔法少女を紙の上に起こしていった。

イラストを書き入れ、その横に思いついた設定を加えて、ほっと一心地付いた。こんなところは誰にも見せられない。ノートの中身なんてそれこそ親にも見せられない。でもこの誰も居ない世界で自分だけの世界を作るのがとても幸せだった。

頭の中に次々と妄想が湧いてくる。魔法少女。変身ヒーロー。喝采。人々の尊崇の眼差し。想像の中で自分が魔法少女になって先程の魔法少女と共に強大な敵を倒した時、風が吹いて砂が舞った。舞った砂が目に入って、思わず目を閉じて瞬きをして、涙と共に流れ出したのを確認してから目を開くと、視線の先、公園の隅の生垣の下に何かが落ちている事に気が付いた。

刀——の様に見えた。

でもまさかと思って、近寄ってみると、それは紛う事無き日本刀

だった。初めて見た刀は思っていたよりずっと大きかった。

何でこんな所に刀が落ちているのか。疑問よりも先に期待と好奇心が湧いてきた。わくわくと心を浮き上がらせながら、法子はそれをじつくりと眺めて、辺りを見回して誰も居ない事を確認してから、そつとそれに触れてみた。

金属の冷たい感触が伝わって来た。

「君が私の主か」

「ひえ」

頭の中に突然声が流れてきて、法子は思わずしりもちをついて、辺りを見回した。だが辺りには誰も居ない。普通の人であれば奇妙がり、声を発した人が何処かに居るのかと、辺りをもっとよく探すところだが、法子は違った。今迄見てきたフィクションの知識からすぐさま声の正体は刀であると見当づけて、再び今度は勢いよく刀を掴んだ。

「どういう経緯で私を手に入れたのか知らないが、まずは自己紹介から始めよう。君は私の名を知っているかもしれないが、私は君の事をまるつきり知らないんだから」

再び頭の中に声が流れてくる。

「あなた刀なの？」

法子は試しにそう思い浮かべてみた。

「その通りだけれど、もしかして君は私の事を良く知らないのかな？」

「まるつきり」

刀が笑った——そんな印象が法子の頭の中に流れ込んで来た。

「まるつきり知らないのに、そんなに慣れた様子で私と話しているのか。はは、時代は変わったな。魔術が開陳されたとは聞いていたが、ここまで慣れ親しんでいるとは」

「多分、私が特殊なだけ。漫画とかであなたみたいな存在には慣れているから」

「ほう。良く分からないが、君は何か特殊な役職にでもついている

「という事かな？」

「そういう訳じゃないんだけど」

「そうなのか？　とにかく説明の手間が省けるのは助かる。では早速だ。誓いを交わそう」

先へ行こうとする刀に驚いて、法子は刀を強く握り、頭の中で必死に刀を押し止めた。

「待つて。私が知ってるのは、あなたみたいに無機物が頭の中に語りかけてくる可能性だけ。あなたがどんなものなのかは、さっき言った通り何にも知らないよ」

「なら説明しなくてはならない訳か？」

「是非」

「そうか。私はどうにもこの最初の邂逅が苦手なんだが」

何やら愚痴りつつ、刀は面倒そうに聞いてきた。

「何から話せばいいかな？」

そう聞かれて、法子は考える。こういう時漫画とかだと過去の話とかが入ったりする。あるいは突然魔物に襲われて分からないまま闘ったりもする。

とりあえず辺りを見回してみ、不穏な気配も人の姿も見えない事を確認してから、法子は頭の中で言った。

「それじゃあ、あなたの目的とあなたが私に何を求めているのかとそれに対して私が何をすればいいのかを教えて」

一体どんな事を要求してくるんだろう。何か無茶な事を言われるかもしれない。魂を差し出せと言われたらどうだろう。でも今の底なし沼にゆつくりと沈んでいく様な生活よりも刀の無茶な要求に身を破滅させた方が幸せかもしれない。不安半分、期待半分、でもどちらも絶望的な想像を抱きながら刀の返答を待つが中々返ってこない。どうしたのだろうと訝しんでいると、刀が驚いた様子で賞賛をあげた。

「素晴らしいな。こういう時、大抵の人間は混乱して面倒な事になるんだが、君はとても冷静に事態を把握しようとしている」

素直な賞賛に法子は何だか恥ずかしくなった。考えてみれば褒められたのは久しぶりだ。齒がゆかった。それに多分同じ様なフィクションに傾倒している者なら誰だって同じ様な反応をするに違いない。刀の前の持ち主がどれ位前の人なのかは分からないが、その頃よりは格段に世の中の不思議に対する寛容さは増している。だから決して自分が特別な訳じゃない。そう心に言い聞かせつつもやっぱり嬉しい事には変わりなかった。

法子はにやけながら、聞いた。

「そんな事より、私の質問に答えてよ」

「ああ、そうだったな」

刀の言葉が頭に流れてくる。

「目的は、何となくだな。君に求めているのは魔女になって貰う事だ。君は魔女になってくれればいい」

「魔女？」

「魔女だ。抵抗があるかね？ まあ、そうだろう。迫害される身だが本来魔女というのは人を救う身であるという事だけは知っていたほしい」

刀の言葉は法子の頭の中を素通りしていった。法子はまさかという期待で一杯になっていた。まさか。まさか。だが早とちりはいけない。そう、まだ分からない。まだ魔法少女になれるとは限らない。ちなみに魔女という言葉には、現在三つの意味がある。一つが人を誑かし、陥れる悪役としての魔女、そこから派生して不気味さや妖艶さや超越性を持った女性。もう一つが近世魔術の実践者として自ら名乗る魔女。だが、この二つの意味は実際に魔法が存在する様になった現在では急速に衰退している。現在最も使われているのは三つ目の意味、魔術に依って世界に多大な影響を与えた者に与えられる称号として魔女。未だ七名にしか授けられた事の無いその称号は、急速に発展を遂げる魔術界での一種のシンボルとなって燦々と輝いている。

閑話休題。

「魔女って言うのは、魔女？」

「何を良いたのか分からないが、そうだ。強大な魔力を持つ女性くらのイメージで良い」

「魔女になるって言うのは、もしかして悪魔と……そのエッチするの？」

「いや、そんな事はしない。どうも魔女はあの暗黒時代に作られたイメージが強くていけないな。魔女になるのはとても簡単さ。私を携えて、魔女になると願えばそれだけでなれる」

法子の心臓がはねた。これは。

「魔女になって何をさせたいの？」

「それは君の勝手だけれど、そうだな、人助けでもしてくれれば言う事は無い」

まさか。

「魔女って黒いローブを着た？」

「それは君のイメージに因る。もっと言えば、私の来歴と君の魔女に対する想像が混ざり合った形になる」

「変身するって言う事？」

「まあ、そうだね。そんな劇的な変化はしないけど。精々髪型や服装が変わる位だな。絶世の美女にはなれないから期待はし過ぎないでくれ」

何となく失礼な事を言われた気もするけれど、法子にとってはそんな事もうどうでも良かった。

「やっぱりだ！ やっぱり変身ヒーロー、魔女っ娘、魔法少女になれるんだ！」

「変身ヒーローか言い得て妙だな」

法子の感情を読み取って刀が答えた。確定だ。魔法少女になれる。その魔法少女というのは良く分からないな。今の時代は皆魔法が使えると聞いていたが」

「そついうんじゃないの。魔法少女は魔法少女なの。変身して人を助ける正義の味方なの！」

法子の興奮した思念に刀は当てられた様だった。しばらく黙り込んでから、ようやくと喋る声音は弱々しく辟易していた。

「まあ、良い。喜んでくれたのならね。どうだい？ その魔法少女とやらになる為にも、私と誓いを交わさないか？」

「交わす交わす！」

法子が大きく首を振ると、刀から笑う様な気配が伝わって来た。

「では誓ってもらおう」

「誓います！」

「早いよ。良いかい？ 魔女とは迫害される存在だ。それでも君は魔女となり魔女として生きる事を誓えるかい？」

何だそんな事が。刀は今の世の中をあまり知らない様なので勘違いしている。そう今の魔女は、魔法少女は皆から好かれ愛され望まれる人気者なのだ。全くもって迷う必要が無い。

法子はそう考えてにんまりとして答えた。

「勿論誓います」

「そうか」

刀がぽんという炭酸を抜いた様な音を立てて法子の指先に乗る位に小さくなった。

「私が大きいままだと何かと不便だろう。小さくなったから常に肌身離さず持つて置く様に」

法子は刀を握りしめて口を尖らせる。

「それより、どうしたら変身できるの？ 早く変身したい」

そう思念を伝えた時、

「なあ、そこで座り込んでる奴」

背後から声が掛かった。

慌てて振り向くと、そこに背の高い男子が居た。法子の見たところ、年頃は法子より少し上。整った顔立ちで、少し冷笑的な表情を浮かべている。

刀が何か言っているみたいだが法子には聞こえない。

法子の目は釘付けになっていた。男子が手に持つノートから目を

離せなくなっていた。絶望的な表情を浮かべてじっとノートに視線を注ぐ。

「これ、あんたの？」

男子から差し出された鞆とノートを受け取って、自分の体中から冷や汗が噴き出ているのを法子は感じた。

「もしかして中を見た？」

このノートの中には恥ずかしい設定やキャラや物語や絵や台詞や技名が詰めに詰め込まれている。それを置き忘れていたなんて。ちよつと気になった物を見に行くだけだったから置いておいたのがあだになった。それに人なんて来ないと思っていた。

まさか見ていないだろう。そうだ。きっと見つけてすぐに、近くに居た私を見つけて渡しに来てくれたに違いない。

そう願って願って願っていた。

男子は問いには答えずに背を向けて公園の出口へと向かって言った。

法子は安堵する。ああ、やっぱり見ていなかったのだろうか。それは次の瞬間に打ち砕かれた。

「ああ、一つ良いか？」

男子が振り返った。

「技の名前とかキャラの名前とか国の名前とか、それから説明とかとにかく全体的に名前が長いし、意味もちぐはぐなのが多いから、短く簡潔にした方が良いと思うぞ」

そう言って笑った。

法子は何も言えずに硬直して、再び男子が背を向けて公園の外へと出て行く様子を見送った。男子が消えて、その足音も聞こえなくなつてから、しばらくして法子はいそいそとノートを鞆に入れると、「にぎやあ！」

夕闇の中に悲鳴を木霊させながら家へと猛ダッシュした。

魔法少女の相棒は苦勞する

「さっきから何を転がっているんだ？」

「ノート見られたからに決まってるでしょ！」

心の中で怒鳴りながら法子はベッドの上を転がり続けた。その手には小さくなつた刀が握られている。幸いな事に刀に三半規管は無いので、目が回る事は無い。

「にぎやあ、ちくしょー」

「たかがノートを見られたくらいで、そんな車に轢かれたヒキガエルみたいな声を出さないでも」

「猫！ ヒキガエルは嫌！」

「まあ、猫でもヒキガエルでもどっちでも良いが。そんな事より君には多大な力が与えられたのだよ？ 君の言でいくと、魔法少女だったか？ それに対する喜びや慄きはないのかな？ ほら、変身できろぞ」

「今は、魔法少女なんかよりもあのノート」

ノートを指差してから、また法子は転がり始めた。転がる事によって思考は途絶し空白化し、まるで物事を忘れた様な気になってくる。疲れてくると止まる。止まると途端に思考が回復して、また忘れたい記憶がよみがえってくる。だからまた回る。それを繰り返している。

「なあ、一つ良いかな。そこまで恥ずかしがっているのを見ると、とてもノートの中が気になるんだが、どうだろう。私にも中を見せてくれないかな」

「嫌に決まってるでしょ！ 大体目も無いのにどうやって見るつもり？」

「目も鼻も口も耳も皮膚も無いが、ちゃんと知覚は備わっている。恥ずかしいなら、君が私に触れながら、見せても良い部分だけを君が見てくれ。君に触れられている間、私は君を感じた事しか感じら

れないから、上手く隠しながら読み進めば君が見られたくない箇所を見てしまう事も無い」

「絶対嫌！ 一字一句どれもこれも見られたら嫌！」

「それならどうしようも無いだろう」

「だから嫌だつて言ってるでしょ！」

法子はごろごろし始めて、刀がまたこれが続くのかとうんざりしている。突然法子の動きが止まった。ぴたりと止まって、呼吸も止まる。刀は動かなくなった法子を感じて、まさか恥ずかしさの所為か、転がり過ぎた所為で死んでしまったのではないかと心配になった。

「どうした？」

「今、私があなたに触れている間は私を感じる事を感じられるって言つたよね？」

生きていた事に刀は安堵する。いきなり主に死んでしまわれてはかなわない。

「ああ、言つたな」

「じゃあ、さつき私がトイレに入つた時も？」

「ああ、君の知覚は全て受け取つていた」

「にぎやあ！」

刀は投げ飛ばされて天井に当たり跳ね返つて床に着地した。フロアリングにぶつかつて硬質な音が響いた。それを追つて法子はベッドから跳ね起きて、床に落ちた刀を拾い上げる。

「あ、あんだ」

「何をするんだ一体。痛くはないが、良い気はしない」

「このエッチ！ 変態！ 馬鹿！ 死ね！」

矢継ぎ早に浴びせられた罵詈に刀は訳が分からずに混乱した。

「いきなり何を？ 酷く悪い意味に聞こえるが、もしかして最近はその謝罪の言葉になつたのか？」

「うるさい！ 馬鹿！ あんだ、ホントに最低」

法子の怒りは収まらない。だが刀にはその怒りが何に端を発した

ものか分からない。

「ちよつと待つてくれ。どうしたんだ急に」

「トイレ、覗いたでしょ？」

「は？」

「だからトイレ、私の体に移つて覗いたでしょ！」

刀はまずまず意味が分からずに混乱した。

「待つてくれ。一つに私は体に移るのではない。知覚が流れこんでくるといった表現が近い。二つに私は覗いたのではない。君の五感を借りて状況を感じていたのだ。恐らくではあるが、君は自分の体が私に乗つ取られてしまうのではないかと危惧したのだろう？」

なら大丈夫だ。主は君。従が私だ。だから」

そこで刀の言葉が途切れた。正確には尚も思念を伝えようとしたのだが、投げ飛ばされて体を離れた事で法子へと思念が伝わらなくなったのだ。床に落ちた刀を再び法子は拾い上げて問い質した。

「あんた、女？ 男？」

「え？ いや、私は刀だし、子を為す必要も無いし、性別は無いが」
「それでも精神的な性別があるでしょ？ どっち？」

目が据わっている。口調も出会った当初と比べれば酷く乱雑になっている。これは心して答えないと押し折られるなど覚悟して、刀は慎重に言葉を選びながら答えた。

「私はさつきも言った通り、性別は無いが」

ここで刀を持つ法子の指にぐつと力が込められた。

「と、とにかく私は精神的な性別という概念が分からない。それは生物、いや人間の考えた概念であらう。だから、男か女かは君が決めてくれ」

「私が？」

「そうだ。私には男と女を判断する基準が分からない。君は人間だから知っているのだろう？ だから君が決めてくれ」

沈黙が下りた。沈黙と言っても、外から見る限りさつきから二人は一言も発していないが、つまり思念のやり取りが一時的に途絶え

た訳である。

その時ドアの向こうから声が入って来た。

「なあ、姉ちゃん、さっきから死ぬほどうるさいんだけど」

「ああ、ごめん」

「どうせまた何か落ち込んだんだろ？　いつも言ってるけど気にしすぎだつて」

「うるさい。あっち行つて」

法子がドアに向かって冷やかな声を浴びせると、ドアの向こうの気配は何処かへと立ち去っていった。続いて隣の部屋のドアが音を立てた。

「で？」

弟が自室に戻った事を確認してから、法子は刀に聞いた。

「で、とは？」

「だからあなたの性別に関する事を聞かせてもらわないと判断できないでしょ？」

思念は少し柔らかくなっている。弟の横やりで一呼吸入った事で幾分怒りが収まったらしい。だが目は据わったままだ、

「そうは言っても、先程も言った様に、私に性別の事は分からない。性別に関する事と言ったって何を話せばいいのか」

法子はしばらく考えてから言った。

「じゃあ、あなたはどうかやって生まれたの？」

「おお、私の素性が」

それはこんな事にならなければ、刀が話したい事であった。ひいては何故法子が魔法少女となったのかにも繋がっている。

「では話させていただこう。だがそれにはまず私を作った魔女の話から始めなければならぬ」

そうして刀は流れる様な思念を送り込んできた。

ある所に魔女が居た。場所をあまり詳しく言ってもしょうがないのである所と言っておく。知りたい？　そうは言っても君はその地

名を知らないだろう。国だけでも？ 分かった。グレートブリテンに魔女が居た。グレートブリテンが分からない？ ちょっと世界地図持ってきて。日本は分かる？ よし、そこからずっと左に行ってそこ、そこで上へ。そこだ。そこがグレートブリテン。違う。イギリスではなく、グレートブリテンだ。私もかつて魔女に向かってグレートブリテンとはエグレスの事ですかと質問したが、近くの柳に向かって思いっきり投げられた。

でだ、魔女とは別に他者からそう呼ばれていた訳ではなく、自分でそう名乗っていた。魔女狩りが衰微していく時ではあったが、まだ魔女への弾圧は根強かった。それを承知の上で名乗っていたのだ。何らかの信念を持った名乗りであつたのだろうが、残念ながら私に教えてくれる事は無かった。

魔女は人助けを生きがいとしていた。例えば日本に滞在中、畑仕事を手伝う際に人助けの為ならえんやこらと歌っていた事からもそれは十二分に推し量れる。他にも例えば魔女は良く「私は本当に人助けが好きなのです」と言っていた。この事からも――何を言う。本人がそう言ったのだからそうに決まっているだろう。

まあ、とにかくだ。かつて魔女は人助けをせんと日々グレートブリテンのとあるど田舎で一所懸命に尽くしていた訳だが、ある時近隣集落の態度が一変する。人々は魔女を白い眼で見る様になった。教会が主導していた魔女狩りとは違うが、似た様な物だ。魔女に批判が集まった。お前が魔物を呼び寄せているんだろうとね。確かに魔物は魔力が多ければ多い程生み出されやすくなる。だが今迄尽くして来たのに、さっさと出て行けではあんまりだ。魔女は意地になつて梃子でも動かないと宣言した。

それが悲劇を生んだ。増大する魔物、それに抗して闘うも日々衰退していく集落。魔女がそろそろ出て行つた方が良いかしらと思ひ始めた時には何もかも手遅れになっていた。魔王が現れた。

魔王は分かるか？ 一応説明しておく、魔物が生まれる事で場が汚染されていき、魔導師が生まれる。魔導師が生まれる事で場

聖別されていき、魔王が顕現する。魔導師は魔物よりも強力で、魔王は魔導師よりも強力。魔王ともなれば弱くとも、当代一流の魔術師を片手間にひねりつぶす事が出来た。まあ、現代程魔術の発達していない時代の事だが、それでも強力な事は分かるだろう。

魔王に敵う等、ましてそれが田舎の村人達ともなれば敵としてすら認識されなかっただろう。辺りは一瞬の内に壊滅した。集落が殲滅されている時、魔女はその時夢まどろんで、集落の者から浴びていた過日の喝采を心地よく受けていた。つまりは眠って気付かなかった訳だ。だから目を覚まして外に出て驚いた。夢から覚めたら喝采どころか、集落の者まできれいさっぱり無くなっていたのだ。遠くで巨大な魔物達が辺りを踏み締めているのですぐに何が起こったのか分かった。

だが罪悪感に悲しむ暇も無い。魔王を倒さんと教会から派遣された戦士達が既にやって来ていた。勿論魔女などと公言している身だ。出来れば教会の連中には見つかりたくない。なので魔女はこっそりと抜け出して、国すらも抜け出して世界を巡る旅に出た。

目的はただ一つ。人々を助ける事。選んだ手段は変身。誰かが困っている人を救うんじゃない、困っている人が自分を救える世界が魔女の目標だ。

知っているとは思うが、変身というのは酷く難しい。存在の変質だからな。魔力を帯びていない無生物にすら難しいのに、魔力を帯びている生き物を変質させるなんてとても繊細で強力な魔術が必要だ。常人にはまず出来ない。

誰もが変身ヒーローになれる世界を作る為にはその強力な魔術を誰もが使える様にする必要がある。どうすれば良いか？

その強力な魔術を生み出して世界中の全ての人に広めるというのは、理論上は可能だろうが出来る訳が無い。社会が混乱する事は必至だし、何より魔術は個人の資質に多大な影響を受けるので、万人が使える魔術を作り出すという事が難しい。

その為に魔女は外部装置を造る事にした。それさえ持てば誰でも

変身できる様な、魔力の供給と魔術の実践を行う外部装置を造ろうとした。

後は話さなくても分かるだろう。試行錯誤の中で生み出された外部装置の一つが私だ。どうだ分かってくれたかな？

「え？ えつと、あ、うん。良く分からな、あ、いや、ちょっとは分かったかな？」

法子が呼んでいた漫画を閉じて慌てて答えた。

「っていうか、話が長いよ。もしも漫画だったら、今の回想まるまる流し読みだよ？」

「ぐ、聞いておいて、何が無礼な。そもそも漫画というのは何だ。前にもそんな事を言っていた気がするが」

「あなたっていつの時代の人？ いつまでの知識なら持ってるの？」

「生まれは寛政だな。知識は今の知識もいくらあるが、はつきりした知識は太平洋戦争の途中までだ」

「思ったよりも最近だね。じゃあ、漫画って言葉知ってるんじゃないの？」

「知らん」

「何で？ まあ、いいや。漫画っていうのは、これ」

そう言って、読んでいた漫画を開いて見せた。

「絵と文章で作られた物語」

「成程。読み物の一種という訳だな。……ちょっと待て。じゃあ、さっきの私の話を聞いている間中これを見ていたのは、私の話を聞き流していたという事か？」

「あ、うん」

「おい！」

「だって、長いし難しいんだもん」

刀が怒りの念を伝えてくるので、法子は矢継ぎ早に弁解した。

「それにさっきの話は魔女さんの話で、あなたの話じゃないでしょ？ 私は刀の話が聞きたかったのに」

一応、最後まで聞いていたらしい。すると刀から理解の思念が送られてきた。

「成程な。一理ある。では、続いて私の話を」

「手短にね」

「幾らなんでも失礼だろ！」

みしりと刀から軋む音が鳴った。法子が持つ指に力を加えた為だ。

「覗いた事、まだ怒ってるんだけど」

「ぐう。わ、分かった。手短に話すから」

法子の手が緩む。

「今までの持ち主はみんな大事にしてくれたのに」

一つ落ち込んでから、刀は気を取り直して朗々と過去を語り始めた。

魔女は日本に来て、剣士からこんな話を聞いた。

刀には魂が宿る。刀に己を乗り移らせて初めて剣を扱う事が出来る。

それを聞いて魔女は外部装置に刀を使う事を思いついた。魔女は幾多の試作の中で、外部装置に人格を宿らせる事で魔術を行わせる方法が最も簡単で強力だと実感していたからだ。

そうして私が作られた。魔女は製鉄から研磨まで全てを自分の手で行って、私を作って下さった。その為、言つては何だが不恰好だがそのお蔭で魔術的な素地は他の刀剣とは比べ物にならないと自負している。

さて魔女は私を作り、貴重な意見をくれた剣士に渡そうとした。だが剣士が理由あって断った為に、たまたま差し入れを持ってきた村の子供に渡される事になった。

清次郎と言つてな。それは美しい少年であつた。

「あ、そこから先は良いです」

「な！」

「よし！ 決めた！」

法子が勢いよくベッドを転がって、そのままベッドの外へと跳ね出て立ち上がった。

「何をだい？」

「タマちゃんは女！」

「誰？」

「なに言ってるの。あなたの事だよ、タマちゃん！」

「いや、は？ もしかして私の名前とか抜かす気じゃないだろうな？」

「あなたの名前だよ、タマちゃん！」

「やめろ、連呼するな」

「だって忘れそうで。タマちゃん」

「私は今迄無銘で通して来たんだ。名前だって要らん！」

「駄目！ 呼びにくいし、タマちゃんて決定」

刀は一步も引く気が無い法子に愕然として、しばらく黙り込んだ。そうして考えに考えあぐねた末、とりあえずこれから主従の関係を築いていく相手なのだから多少の譲歩は必要だろうと一歩位は譲ってやる事にした。

「分かった。良いだろう。受けて入れてやる。だが何でタマちゃんなんだ？」

「可愛いでしょ？ 魔女さんが製鉄から作ったって言うから、玉鋼のタマ」

「訳が分からない。嫌な予感がするんだが、ちゃんはまさか敬称のちゃんだとのたまう気じゃないだろうな？」

「その通りですよ？」

「嫌だあ！」

「何で可愛いのに」

「嫌だ、嫌だ。私はこれでも」

ぐつと法子の指に力が入り、再び刀、改めタマはみしりと鳴った。「はい、すみません。タマちゃんて結構です」

「そうこなくっちゃ」

法子が笑顔を浮かべた。タマはかつての持ち主たちの顔を思い出しながら、その幸せだった日々思いを馳せて現実逃避し始めた。

「おーい、聞いている？　ねえねえ」

「すまない。少し呆けていた」

「だから、これで問題も解決したし、変身させてよ」

問題？　とタマは今迄の経緯に思いを巡らせた。そもそも何でこんな話になったんだったか。しばらく考えて思い出す。

「ああ、私の性別がどうかという話か」

「そうそう。それも女だったし」

「そうなのか？　何を基準にそう判断した？」

「うん、考えてみたらね、私覗かれた訳だし、それが男だったら嫌でしょ？　女でもやだけど。だからタマちゃんも女」

呆れすぎたタマの思考に霞がかかった。人間であれば脱力のしすぎで崩れ落ちていただろう。そんな理由なら、最初から昔話などする必要が無い。何もかも無駄だったという事だ。

「ねえねえ、早く変身させてよ」

甘える様な法子の思念にタマは苛々としながら答えた。

「駄目だ。私の魔術は君の生命エネルギーを使うんだ。使いすぎれば寿命が縮む。無駄な時には使わない様にしなければならい」

「えー」

法子が不満げに呻いた。

「君は魔女になる事の意義が分かっているのか？」

「全く。そもそもさっきの話だと変身は魔女に限らないみたいだったけど、魔女に変身するの？　その魔女さんになるの？」

「違う。それは、まあ、私の願望だな。私を作ってくれた魔女の様に人々を救う存在であってほしいという願望だ」

「成程ね。大丈夫！　私、悪用なんてしないから。明日から魔物をバンバン倒して人助けをするよ！」

タマは大げさな溜息を法子へ伝える。この少女は分かっている。

敵を打ち倒す事と人助けの違いすらも分かっていない。だがそういうものかも知れない。初代である清次郎も最初は敵を倒す事に執心していた。子供というのはそういうものなのかもしれない。ならばそれを良い方向へ進めるのが私の役目だ。そう自分を納得させて、とりあえず甘い考えを矯正してやる事にした。

「君は分かっている。人々を救う為には強くなければならない。体も心もだ。それなのに、君の先程の醜態は何だ。たかだかノート位で」

「ぎにゃああ！」

法子がタマを頼り投げて、耳を塞いで唸りながら、またベッドの上を転がり始めた。隣からドアの開く音が聞こえて、法子の部屋にノックの音が響き、その向こうから

「ちよつと姉ちゃん、何時だと思ってるんだよ。好い加減にしろよ」
弟の怒りを含んだ声が聞こえてくる。

「うるさい！」

法子はそれに一喝してまた耳を塞いで唸りながらベッドの上を転がる。ドアの向こうで弟がうるさいのはそっちだと言い返して隣の部屋へと戻っていった。

唸り声だけが聞こえる部屋で、ごろごろとベッドの上を転がる法子。それを見て、今更ながらようやくタマは気が付いた。

今回の主はかなり厄介だ。

ご主人様は一人ぼっち

魔法少女はその正体を隠す。魔術は隠秘を旨とするから——という訳ではなく、多くは恥ずかしいからだとか、生活に支障をきたすからだとかの理由でその正体は隠されている。中には公言して憚らない者も居るが、その数は少ない。変身ヒーローのほとんどは正体不明である。

魔法少女は系譜を魔女に辿る為か、使い魔、あるいはそれに類するお供を連れている事が少なくない。一般人が使い魔を連れる事が技術上可能になったとはいえ、一般人で連れている者はほとんど居ない。未だに使い魔というのは、魔女の、あるいは魔法少女の連れるものだというイメージが強い。当然普段から使い魔を引き連れていれば正体はばれる。始めから常人に見えなければ良いが、そうでない使い魔も多い。その為、使い魔が居る事を隠す為に、ある者は使い魔を家に留め、ある者は使い魔をアクセサリーに変じさせ、ある者は人形の様な外観を活かして人形として押し通す。

使い魔は魔法少女に出会うまで長年封じられていた者も少なくない。その為、会話に飢えている者が多く、お喋りな事がある。その為、魔法少女が使い魔を大衆の居る場所へ連れて行く時には、喋ってはならないと厳命する事が多々ある。その約束が破られ一騒動起こる事もある。とかく魔法少女という者は自己の正体を秘密にする為に細心の注意を払う事が多い。

「分かった？」

「ああ、分かったよ。学校では」

「うん、私に喋りかけてきてね」

紐を通され簡易なブレスレットになったタマは、法子の髪を梳かす手の動きに合わせて揺れながら、疑惑の念を送っている。

「でもどうしてだい？ 普通正体を知られない為にも人前でのやり取りは禁じるものだろう？」

「だってタマちゃんと話すのに声に出したりしないでしょ？ ばれる訳無いもん」

「まあ、そうだが、何があるか分からないだろう？ 学校と言えば四六時中人と関わる場所だ。うっかりという事もある」

「大丈夫だから安心して」

妙に断定的な法子の言葉をタマはどうしても信じられなかったが、それでも、今迄会話に飢えていたので、話をして良いというのは嬉しかった。

法子が黒い髪を二つ縛りにする手の動きに合わせて、タマは揺れ動く。法子の目を通してセーラー服を眺めながら、先代の通っていた学校を思い出して、タマは何だかわくわくとした。

「無い！ 絶対に無い」

「ちよつと生々しいですね」

「えーそんな事無いって。やっぱり古来から伝わる伝統的な」

「おはよー、どうしたの？」

「あ、摩子さん、おはようございます。何だか嬉しそうですね」

「うん、昨日ちよつとね」

「その猫みたいなのストラップと関係が？」

「んー、まあね。でも秘密」

「摩子、そんな事より聞いてよ。こいつさ、キスの事を接吻とか言うんだよ」

「だから、キスなんていう外来語を使わないで、もっと美しい日本語を」

「だから、接吻は美しくないつつてんだろ」

「じゃあ、口吸いで」

「止める」

「摩子はどう思う？」

「日本語でって言うなら口づけで良いんじゃないの？」

「それだ！」

「ええ！ そんな単純で良いの？」

「いやあ、でも私はキスが良いと思うよ」

「そんな事無いって、絶対口づけ」

「どっちでも良いんじゃないかな？ 人それぞれだと思うよ？」

「違うんだよ、摩子。そう言う事じゃなくて、どれが一番男受けが良かったって話な訳だ」

「やっぱりキスが無難だと思うんだよね」

「だから男は大和撫子が良いの。だから日本語で言うべき」

「そんな訳で二人はさつきからずっと喧嘩しているのです。面倒なので早く結論付けてもらいたいのですが」

「うーん、しょうがないなあ。じゃあ——ちよつと！ 武ちゃん、武ちゃん！」

「あ？ 何だよ。武ちゃんて呼ぶな」

「良いじゃん、幼馴染なんだし。でさ、ちよつと男子の意見を聞きたいんだけど」

「何の？」

「キスと口づけ、どっちにときめく？」

「ぶっ」

「ねえ、どっち？」

「お前、何をいきなり」

「どっちが良い？」

「……口づけ」

「だってさ、みんな。あ、武ちゃん、もう行って良いよ」

「は？ 意味が」

「報われないね。武ちゃん」

「可哀そうだね、武ちゃん」

「お前等は武ちゃんて言うな！」

そんな騒がしい会話の近くの席で、法子は本を読んでいる。昨日は半分まで呼んだので、今日はその続きからだ。黙々と読書をする

法子にタマはおずおずと思念を掛けた。

「向こうで賑やかに話しているけど、君は会話に入らないのかい？」

「うん、だってあの友達友達じゃないし」

法子の顔はほとんど表情が抜け落ちている。昨夜タマを圧し折ろうとした顔よりも余程恐ろしい。朝の喧騒に包まれた教室は温かいのに、法子の周りだけは空気が違った様に冷え切っていて、何だか寂しかった。

「そうか……なら友達の所へ行ったらどうだね？ 本なんていつでも読める。今は交友を厚くすべきだろう」

「私、友達居ないから」

「友達が居ない？ そんな事は無いだろう」

学校と言えば同年代の子供達が沢山集まる場所だ。法子位の年齢であれば、学びの場としてだけでなく、仲間を見つかる場所でもあるはず。少なくともタマが今迄見てきた学び舎は全てそうであったし、タマの主人やその周りで友達が居ないという者は居なかった。

「普通居るものだ」

言ってからタマは気付いた。あくまでそれは普通の場合で合ったらの話だ。普通でなかった場合にはその限りではない。長年魔女という概念に振れていながら何故そんな事も思いつかなかったのか。友達が居ない。孤独である。それはとりもなおさず、法子が出生や身分等の理由で迫害を受けているという事だ。

「タマちゃん」

「な、なんだね、御主人」

タマが思わず改まった口調の思念を送ると、法子は冷徹に言った。

「私とあなたは繋がってるんだからね」

「分かっているさ。安心してくれ、私は君を見捨」

「だからあなたが伝えようとしなくても、はつきりとした言葉としてじゃなくても、なんとなくあなたの考えは伝わって来るんだからね」

「ん？ ああ、そうだよ。今更言われなくても」

「あのね、多分あなた、私が何か特殊な生まれで、その所為で無視されていると思ってるでしょ？　そう同情しているでしょ？」

「う……ああ、そうだ。確かに同情されるのは心外だろうが」

「全然見当外れだから」

「何？」

「あのね、私はふつつうの生まれで、別に何にもおかしい所は無く、周りの人達もわざと私の事を無視してるんじゃないから」

「どういう事だ？　なら何故君は周りと話そうとしない」

タマは本気で困惑していた。そんな事有り得るはずが無いと信じ込んでいた。人はすべからく他者と交流をするべきだと信仰している。話をするものだと思切っている。法子はちくしょうと思った。怒りや悲しみを始め、恥ずかしさや笑い等様々な感情が湧いたが、突き詰めればそれはただ一つの言葉、ちくしょうに収斂された。

「私が話せないから」

「何故？」

「何故も何も私が人と話すのが苦手だから」

その言葉は益々タマを困惑させる。

「私とはこうして話しているじゃないか。思念のやり取りだが」

「そうだね。自分でも何でこんなに普通に話せているのか良く分からない。あなたが人じゃないからなのかもね」

「しかし、話すのが苦手とは、分からない。見た所、礼儀は欠けていない。礼を失さなければ人と話すなど特段技術が要るものでもないだろう」

そんな言葉を言われたら、法子は自嘲するしかなかった。そんな普通の事さえ出来ないのが自分なのだと。

「何話していいのか分からない。話しても嫌われそうで怖い。上手く話せるかどうか分からない。だから話せないの！」

段々と法子の思念が荒くなっていく。

「そうは言ってもだな、友達との会話なんて話す内容はそれこそ話す内に作っていく物だろう。嫌われるなんてよっぽどの事だ。話の

得手不得手なんて人それぞれ、別に下手だからって恐れる事は無い。気にする人なんて居ないよ。案ずるより産むが易しだよ。話してみれば良いのさ」

「無理だよ！ だってもうみんなグループ作って固まってるもん。今更私が話しかけたって何こいつってなるに決まってるし」

「そんな事は無いだろう」

「なる！ 絶対なる！ タマちゃんは学校を知らないからそんな事が言えるんだよ！」

「確かに今の学校は知らないかもしれないが」

法子の息が荒くなる。それを近くで談笑している内の一人が気にして、法子へ視線を送って来た。それに気が付いて、法子は俯く。見られた。一人でせえぜえ息を荒くしている所を見られた。気持ち悪い奴だと思われた。法子は途端に恥ずかしくなって、興奮していた自分を戒めて、思念を沈ませる。

「それにさ、私、話が下手なだけじゃなくて、得意な事も無いし、皆が知ってる事も知らないし、流行なんて特に分からないし、むしろそういうのつまらないって感じるし、人と一緒に居るのが嫌だし、気持ち悪くなるし、むしろ私が気持ち悪いし、変な匂いがするし、肌も汚いし、油っぽい気がするし、体も曲がってるし、顔も体も貧相だし、運動とか出来ないし、卑屈だし、すぐ落ち込むし、心が汚くて人の悪い所ばかり見ちゃうし、本当に良いところないし」

どんどんと法子の自虐が重なっていく。その自虐の大部分が法子の頭の中で形作られ発酵した妄想に過ぎなかった。だが法子はそれを本気で信じている。タマはそんな自虐が出る度に、そんな事無いさと否定していくのだが、法子は聞いていないかのように自虐を続け、タマは聞いていて気が滅入ってきたので、それを止めた。

「分かった。分かったから止まってくれ」

「あ、ごめん。本当にさ、私話しててもこんなだし、いつつもこんな事考えてるし」

「分かった。君が自分をどう思っているのかは十分に分かった」

「本当にごめんね。嫌だよ、こんなのと四六時中に一緒にさ。そもそも何で私が選ばれたの？」

法子の質問にタマは答えあぐねた。法子はほとんど沈み込んでいる。恐らく学校でいつも感じている苦しみがタマと会話した事で爆発したのだろう。それを止める為に、何とか法子が駄目ではないと伝えたいのだが、今の質問の答えでは励ます事が出来ない。とはいえ嘘を吐いたところで思念が繋がっている以上ばれてしまうので論外だ。仕方なしに、タマは正直に答えた。

「理由は無いよ。君が僕を見つけた。運命が噛み合ったからさ」

「多分私よりももっとふさわしい人、居るよ。だから」

法子が続けようとした思念の上に、タマが思念を覆い被せる。

「私は君が気に入った。私は君を魔法少女にする。だから君から離れるつもりは無い」

「え、な……べ、別に勝手にすれば。でもきつと直ぐ嫌になるよ」

法子の思念は言葉上、未だに頑なな自己卑下であったが、ほんのりと嬉しそうな思念も伝わって来た。よしよしとタマも嬉しくなりとりあえず沈み込むのは止まったし、これで良しとしよう。これ以上、言葉を重ねると逆に心を閉ざしてしまう可能性もある。でもその前にどうしても言っておきたい事があった。

「君は自分の事を駄目だ駄目だと言っていたがな、私からすれば決してそんな事は無い。この世の何処にもいない完全な人間でも目指しているのかい？ 君は可愛いし、優しい。変な匂いだってしないし、体も曲がっていないし、肌も荒れていないし、油っぽくも無い。君は何処からどう見ても可憐な女の子だ」

「嘘ばかり」

言葉ではそう言っているが、やはり喜びの感情が流れてくる。タマはとりあえず言いたい事は言ったので思念を伝える事を止めた。法子から混乱した思念が流れ込んでくる。多分、褒め言葉をどう受け取って良いものか迷っているのだろう。やがて法子がおずおずと思念を伝えてきた。

「ありがとう」

「いや、事実を伝えたまでだ」

「タマちゃんが男の子だったら良いのに」

「性別は君が下らない理由で決めただ。今からでも男に換えたらどうかね？」

「ううん、無理。もう私の中でタマちゃんは完全に女の子だから」

「そうかい。まあいいけど。でも子は流石に余計な気がするな」

タマがぼやいていると、教師が入って来た。皆が一斉に自分の席へと戻り始める。やはりいつの時代も学び舎は統率がとれているなあ。タマは感心した。一方、法子は初めて楽しい朝の時間を過ごせたので満足していた。

その日は法子にとっていつになく早く時間が過ぎた。いつもであれば休み時間の間は早く時間が過ぎると祈り続けていたが、今日は違った。タマとの他愛の無い会話が楽しかった。いつもなら授業の時間が終わらない様に祈っていたが、今日は違った。早くタマと話したくて――授業中に話しかけるとちゃんと勉強しろと取り合ってくれないから――授業が終わるのを待ち遠しく思った。会話の話題は主に本の内容で、それはタマが気を使って法子の生活の話題を意図的に避けた為であった。法子もその気遣いは気になったが、それ以上に初めて自分の趣味に耳を傾けてくれる友人を持った為に、家族に話すよりも饒舌に語った。今日という日はあつという間に過ぎた。

帰り道、法子は相も変わらず本の内容を語っていたが、それをタマが遮った。

「ちよつといいかな」

というのも、流石に今の状況が続ける訳にはいかないとタマは思ったからだ。段々でも良いから、少しずつ法子と周囲を関わらせていきたい。やはり友達が一人も居ないと言うのは歪んでいる。

タマの見た所、今の法子は外から拒絶されているというよりは、外を拒絶している。それは外への恐れと外への無関心の二つに起因

している。だから少しずつでも外に目を向けさせて、興味を持ってもらえば治っていくはずだ。昨夜の話し合いで、法子が魔法少女の目標として人助けをする事に同意してくれたのだから、いずれ外への興味は増していくだろう。ただそれだと人助けの使命感が伴ってしまう。出来れば、普段の生活から外への興味を引き出していきかった。

だからタマは今日、別の学生の話聞き耳して得た情報を開示してみた。

「最近、この近くに大きな店の集まりが出来たそうだよ。アトランと言ったかな？ 何でもそこに国内最大の魔術専門店があるそうだ。出来れば後学の為に行ってみたいのだが」

何でもそこには人が沢山集まるらしいし、学校が終わった後は学生が多いそうだ。まずは人に慣れる所から始めた方が良さそう。そんな意図での提案だった。店に行くぐらいならきつと。そんな思いがあった。だが、

「嫌」

「何？ どうしてだい？」

「目的が透けて見える。その気持ちは嬉しいけどね。でも嫌。人ごみは苦手だし」

「そうか」

思念から迷いが読み取れた。脈無しという訳ではなさそうだ。ならばここで無理を言って拒否感を持たせてはいけない。そう思ってタマはあっさりと退いた。

「なら一先ず帰って魔法少女の訓練とするか」

「え？ ホントに！ 変身できる」

「ああ、勿論だ」

「うん！ じゃあ、早く帰ろう！」

法子が元気に走り出した。そんな姿を感じてタマは現金な主だなと苦笑する。

「それじゃあ、家まで駆け足だ。魔法少女は体力が無ければならな

い」

「う、もう無理。吐きそう」

少し走って法子は立ち止まり、息も絶え絶えにそう言った。ほとんど進んでいなかった。苦しそうな姿を感じてタマは、今回の主は本当に難儀しそうだかと嘆息した。

変身！ 魔法少女！

「それじゃあ、変身をしてもらおう」

「はい！」

鞆を投げ出してベッドの上に勢いよく座り込んだ法子はタマを目の前に捧げ持つて嬉しそうに笑った。

「それで、どうすれば良いの？」

「簡単に言えば、変身したいと願うだけだ。それが基本で奥儀でもある」

「でも、前に学校で習ったけど、頭の中だけで魔術をするのってとっても難しいんですよ？」

「その通り。出来れば一流どころか稀代の魔術師だ。でも安心して欲しい。私が補助するからそこまで難しい事は無いはずだ」

「うんうん、じゃあ早速」

法子が勢いよく立ち上がって、気合を入れた。だがそれをタマは押し止める。

「焦らない焦らない。良いかい。そうは言っても、君にはまだ出来そうにない。今日学校で拝聴した授業のレベルを考えるとね。君が学校で習う事よりも遥かに先を学んでいるのなら別だけれど」

法子が口を尖らせる。

「じゃあ、どうすれば良いの？」

「普通の魔術の様に精神統一の為の補助行為を重ねれば良い。魔法円や詠唱、踊り等々、道具を使っても良いし、とにかく変身しやすい状況を作るんだ」

「例えば掛け声とか？」

「ああ、そういうのだ。そんなに難しくなくて良いし、難しく考える必要も無い。君が変身できそうって思える様な事を何か」

「分かった」

法子は立ち上がって放り投げた鞆を拾い上げて中からノートを取

り出した。見知らぬ男子に見られて悶えたあのノートだ。

「えーつとね」

ページをめくりながらその中を改め吟味していく。

「ふむふむ、これが件のノートの中身か」

「ああ！ ちょっと」

「ふむ、別段おかしくは無いと思うが」

「そ、そう？」

法子が恐る恐る疑わしげに尋ねてくる。タマはそれが不思議でおかしかった。

「当たり前じゃないか。うん、やっぱり出会いは正しかった」

「何が？」

「君は英雄になりたかったんだろ？ そのノートに書かれた武器や人物を見れば分かる」

「う、うん、まあ、そんな感じ」

「だろう？ 力とはすなわち願望さ。君がそれだけ英雄になりたいと思っいてくれたなら、それだけ才能があるという事さ」

「そうなの……かな？」

「そうさ！ うん、先行きは明るいぞ」

タマが明るく言うので法子も釣られて笑った。

「それで変身はどうする？」

「え、えつとね、じゃあ、この、

闇は沈み、光は昇り、世界を落とし、我は浮かぶ。大逆の徒は浅はかに流れを鎖し、我は剣を持つて循環を創る。肉体を聖別し、心を開錠し、敵を殲滅し、勝利を獲得する。我は神域の生成者。今一度の覚悟を得て、我は害意を滅す太刀となる。

で、どう？」

「で、どうって言うのは、もしかしてこれを」

「うん、変身の呪文に。和風テイストで刀の入ったの選んでみたんだけど、どう」

承服しかねた。まず呪文が何かに裏打ちされた技術的なものでは

なく本当に雰囲気だけの何の効果も持たないものであったし、あくまで雰囲気作りの為と目を瞑っても、その呪文は幾らなんでも、「ちよつと長いんじゃないかな」

「そうかな？」

「ああ、咄嗟に変身する機会もあるだろうしね。出来れば一二動作、長くとも四五動作で終わってくれないと対応が出来ない」

「成程」

「とはいっても、あんまり簡単すぎると暴発する可能性もある。その意味で、先程の君の呪文は日常生活で絶対に口に出さないから良かったけれど」

「んー……もしかして馬鹿にしてる？」

「いや、そんな事は」

法子は怒った様子で目を瞑り、布団に勢いよく腰を下ろした。

「私はあなたと契約する」

「確かに契約と言えなくも無いね。そんな堅苦しい物には考えて欲しくないけど」

「そうじゃなくて、呪文。私はあなたと契約する！」

「え？」

「悪い？」

「いや、悪くは無いけれど」

渋るタマに苛立って法子は勢いよくノートを閉じた。

「とにかく、変身させて！」

「本当に後悔しないかい？」

「しない！」

タマはしばし悩み、

「まあ良いか。いつでも変えられるんだし」
吹っ切った。

「分かった。じゃあ、立ち上がって」

言われた通り法子は立ち上がる。

「深呼吸をしてみて」

法子が何度か息を吸って吐く。

「それじゃあ、呪文を唱えて」

「えーっと、私は」

途端に法子は何か不思議な体の中が渦を巻く様な感覚に襲われた。悲鳴を上げようとする法子をタマは叱責する。

「声を上げない！ 集中！ 続きを！」

「あなたと」

その後と共に法子は自分の体が溶け崩れた様な錯覚に陥った。自分の肌がどろどろに溶けていく。そんな気がした。でも後には引けない。

「契約する」

その瞬間、法子の髪が解かれ、色が根元から次第に金色へと変わっていった。制服の色が黒く変じて、その形も少しずつ変わっていく。法子の手に握られていたタマは元の刀へと戻る。黒い衣装の上に黒いローブを羽織って、法子は魔法少女になった。

「はい、終了」

「え？ 終わり？」

「ああ、無事に変身できたよ」

「ホントに何だか実感がわかないけど」

そう言いながら、法子は自分の体を見回して息を呑んだ。

「服が変わってる」

「服だけじゃないよ。鏡を覗いて見な」

言われるままに鏡を覗くと、二つ縛りの黒髪だった自分が金色のストレートな自分に変わっていた。

「おわう！」

奇妙な叫びを上げて後ずさり、また足を踏み出して今度はしげしげと自分の姿を眺めはじめた。

「本当に変身してる」

「そりゃあね」

「でも、顔とか体は変わっていないんだね」

その言の通り、鏡に映った法子は服や髪の色は変わっているものの、その幼い顔立ちと体つきは全く変わっていないかった。

「だから絶世の美女になる訳じゃないと言っただろう」

「そうだけど……でも他の人に見られて私が魔法少女って知られるのが恥ずかしいんだけど」

「安心しなよ。正体はバレない様になっているから」

「そうなんだ」

法子は変身した自分をしばらく眺めて、顔を赤らめた。

「どう？ 変身した感想は」

「うん、実際に着てみるとこういう衣装って恥ずかしいね」

「この期に及んでそんな感想？」

「だって」

恥ずかしそうに体を小さくする法子に、タマは呆れた溜息を送る。

「まあ、良いけどさ。じゃあ、行こうか」

その言葉に法子が慌ててタマを見た。

「何処に？」

「何処につて魔物の気配を察知したからそこにさ。君は変身したら魔物を倒して人々を救うと言っただろう？」

「そ、そうだけど」

「今更怖気づいたのかい？」

「そうじゃなくて、恥ずかしいんだよ！ ほら今日はもう変身できたんだし、魔物退治は明日からって事で」

「アホか！ さっさと行く！」

「えー」

「文句言わない！」

タマに促されて法子は渋々と部屋から出ようとして、廊下から弟の足音の如き音が聞こえたので、回れ右をして窓を開けて、夜の闇に躍り出た。

魔法少女となった法子が民家の屋根屋根を踏み締めながら飛び越

えていく。月明かりに照らされて仄かに見えるその表情はいつになく明るい。

「すっごいなあ。ノリで飛び出したのに、本当にこんな事出来るなんて」

「そりゃあ、身体強化されているからね。でもされていなくて生身だったら君、部屋の窓から落っこちていたよ？」

「うん、飛びだしてから気付いた」

法子はけたけたと笑って、屋根を跳び次いで行く。風切りの音がびょうびょうと耳に木霊する。夜の冷たい空気が気持ちいい。視野は何処までも遠くを見渡せた。何百メートルも先に猫みたいな生き物を肩に乗せた女の子の後姿が見える。

「それで、何処に行くの？」

「体の赴くままに進めば大丈夫」

「了解です！ それで何が居るの？」

「魔物だよ。伝わる魔力からすると大した事無い。練習にぴったりのはずだ」

「楽しみー！」

一際大きく跳ぶと、そんな気はまるで無いのに、そのまま法子は公園へ着地した。タマと出会ったあの公園だ。法子はどうやらここに魔物が居る様だと当たりを付けて、辺りを見回した。

少し離れたブランコの上に、綿毛の様なものが居た。猫の様な目がついている。可愛いんだか、気持ち悪いのだから分からない。途端に頭の中に情報が流れ込んで来た。

『ミスト

実体を持たない霧状の魔物。一時間周期にその外見を変える。

出来る悪事は目の前に現れて人を驚かせる事。

魔力：微弱

生命力：E

可愛らしさ：特殊』

突如として浮かんだデータに法子は驚いた。

「な、何これ！」

「ふむ、どうやら君の能力の一つは解析らしいね」
「能力？」

「そう。私の力で変身するとその者に合わせて幾つか特殊な能力が付与されるんだ。多分、変身とは別に元々の才能を引き出しているんだと思うけれど、正確な所は私にも分からない。それで君の能力の一つが解析な訳だ」

「へえ。何だかカッコ良い」

法子はうつとりと虚空を見つめた。

「他の能力は？」

「それは発言してみないと分からない」

「早く知りたいなあ」

「まあ、とにかく相手が弱い事は分かっただろう？ 練習にもってこいだ」

「オッケー。それでどうすれば良いの？」

法子は刀を構えた。何だか舞い上がっているのが自分でも分かる。はしゃぎたくてたまらない。

「基本は私を使って相手を斬れば良い。刀の使い方は分かるかい？」
「持った事も無い」

「大丈夫。触れれば斬れる。私を舐めないで貰いたい」

「おお！ 心強いよ、タマちゃん！」

嬉しそうに叫んだ法子は、刀を握る手に力を込めて、駆けた。一歩で距離を合わせ、二歩でミストの目前に迫り、右手を柄に添えてふわふわと浮いているミストに向けて見よう見まねで抜刀した。刃先はミストへ吸い込まれ、その身を切り裂く。

斬った。確信を持った法子は笑みを浮かべて、ミストの居た場所を見つめ、

「え？」

そこで相も変わらず何て事も無い様子で浮いているミストを見て呆然と呟いた。

そんなはずは無い。そう思って、法子は刀を振り上げ、ミストへと振り下ろす。刃は過たずミストを通り、確かに斬ったと確信するが、刃の通り抜けた後には変わりのないミストが浮いていた。

「何で？」

「いや、何でって霧状だからだろ」

「言われてみればその通りで、霧を斬れるはずが無い。」

「でもさっき触れれば斬れるって」

「斬れるよ。ただ魔力を込めなくちゃ」

「魔力を込める？」

「そう。刃先まで力を行き亘らせないと、魔力で出来た物は斬れないよ」

「そう言われても」

魔力を込める方法何て分からない。

「もしかして出来ない？」

「……だって習った事無いし」

「ま、まあ、大丈夫だよ。教えるから。難しい事じゃない」

タマは励ます様にそう伝えてきた。

「まずは目を瞑ろう」

言われた通りに法子は目を瞑った。

「次に自分の手の先に私が居る事を感じて」

柄をぎゅっと握る。

「君の延長に私が居る」

私の延長。

法子は自分の体の中にまた渦の様な感覚が立ち込めて来るのに気が付いた。

「それが君の魔力。それを私のところまで届かせて」

渦の先は意のままに動いた。腕を通り、手の先、刀へと流れ込んでいく。

「よし、目を開けて。それを維持」

目を開けると刀は鈍く光っていた。

「そのまま刀を魔物に！」

法子は刀を正眼に構えて、振り上げ、勢いよく振り下ろした。

「あ、駄目だ」

タマの声が響いたが、気にせず刀をミストへと振り下ろす。だがやはりミストは斬れなかった。刀の光は消えていた。

「むー。斬れない」

「力を込めた時に気を散らしたね」

「難しいんだけど」

「練習あるのみ」

その時、風切り音が鳴った。続いて土を噛む音がする。地面に映るミストの影に一本の矢が突き立っていた。何かと思う間もなく風切り音は数を重ね、ミストの影の周りに新たな矢が四本突き立った。矢は甲高い音を発して光り輝き、ミストの影は光りの中に消え、光が収まった後も、影は消えたままだった。慌ててミストの居た場所を見ると、ミストは消えていた。

「帰したか。法子、後ろ！ 上！」

「分かつてる」

ひしひしと背中に圧力を感じていた。振り返ると、遙か頭上、公園の隣にあるマンションの屋上に黒い人影があった。ひたすら黒い黒い鎧に黒いマント、口元だけが晒されて真一文字に引き結ばれていた。

「あれは」

「同業者、かな？」

黒い影は背を向けて飛び退り、マンションの向こうに消えた。

残された法子は街灯の薄暗い光に照らされた公園の真ん中で呆然と立ち尽くし、やがてぼつりと漏らした。

「何だか助けられたみたい」

「向こうはそのつもりだったんじゃないかな。苦戦しているみたいだから助けてくれたのかもね」

苦戦なんてしていなかった。次の一太刀で倒せたはずだ。

失敗した。折角魔法少女になったのに。早速失敗してしまった。
その上、赤の他人に助けられた。これじゃあ、いつもの自分と変わ
らない。

法子は悔しくなって大きく叫んだ。

「何なのよ！ もー！」

呼応して辺りの犬達も雄たけびを上げた。

謎の転校生、来襲

民家の屋根に飛び移る。金色の髪を月明かりに晒し、闇に夜色のロープをはためかせながら。その顔は行きの明るい笑顔とはまるで違った沈んだものだ。違った。

「まあ、そう落ち込むな。まだ始まったばかりじゃないか。これからだよ、これから」

「うん」

法子は黙り込んで屋根から屋根へと飛び移っていく。タマもそれ以上何も言わなかった。繋がる今、法子がその胸に様々な感情を抱いて折り合いを付けようとしているのが分かったから。自分から立ち上がるうとするのなら、タマが何かを言う必要は無い。

やがて法子は沈んだ調子ながらも力の籠った意識でこう言った。

「ねえ、私はどうすれば強くなれるの？」

強さ。法子は今日ミストに勝てなかった事を、他の誰かに獲物をとられた事を、無力さゆえだと考えている。更にひいて日常生活の孤独にもその無力さは伴って、自分がもつとしっかりとしていればと考えている。

それは確かに力があれば解決するかもしれない。勝てない事も取られた事も馴染めない事も力があれば確かに何とか出来るだろう。けれどそれは一つの方法でしかなくて、力が無ければいけない訳じゃない。問題を解決する方法は様々で何も力には限らない。タマに言わせれば法子に必要な者は意志だ。

強い意志。例えば何かに敗れた時にその者に追い縋り、今すぐにも強くなりたいと願う事。勿論、タマは法子にさっきの場面で黒衣の騎士を追いかけて欲しかった訳ではないけれど。

何にせよ、法子が悔しさを感じているらしい事はタマにとって良い兆候だ。法子の日常に対する接し方を見ると、悔しさを感じても押し殺してしまいそうな気がしたけれど、悔しいと感じてそれを打

破したいと思う、そんな気持ちがあるのならそれは良い事だ。出来れば打破をする手段を人に聞く前に自分で探すまでになって欲しいが、それはおいおいで良いだろう。

「そうだな。とにかく鍛える事だな」

「具体的には？ 魔術の授業をちゃんと受けるとか？」

「魔術もそうだが、体もだ。明日からは毎日走り込みだな」

「そっか。ちゃんと私自身が強くないといけないんだ」

「当たり前だよ。私の変身は持っている力を引き出すものだからね」
「分かった」

丁度家に着いた。器用に窓枠へ着地した法子は、そつと窓を開いて自室へと戻る。部屋の中に入った法子は一度鏡を見てその中の普段の自分とはかけ離れた自分を見て、タマに尋ねた。

「ねえ、元に戻るにはどうすれば良いの？」

「戻りたいと思えば良い。また呪文を設定しても良いけど、変身する事に比べれば大分簡単だから、戻りたいって思うだけでも戻れるんじゃないかな？」

法子が戻りたいと思うと、ローブは消え、服は制服に戻り、髪は黒く戻って二つ縛りになった。タマも掌に乗る大きさに戻る。

突然、法子の体が沈む。急激に身体に疲労が来て、体が思う様に動かせずに倒れ込んだ。

「何これ」

「そりゃあ、私の変身は君の魔力を使うからね。要は生命エネルギーの消耗だ。変身してるだけでも疲れるし、力を使えばもっと疲れる。特に今回は初めてだったし」

「あれ？ でも授業で自分に宿る魔力は使いすぎると危ないから使っちゃいけないって」

「まあ、使いすぎれば死ぬからね」

「な！」

法子が驚きに身をすくませた。逃げようとするが体は動かない。倒れたままで怯えながら手の中のタマを見つめた

タマが笑う。

「安心しなよ。普通は使ったって寝れば戻るから。それに命に関わる程の魔力は使おうとしても私が使わせないよ。そもそも寿命が縮む位使ったらこの星を滅ぼせるよ。そんなに使わないだろう？」

心臓が凍り付いた法子はしばらく頭の中を空白に吞まれていた。

やがて気を取り戻した法子は、とりあえず自分の取り越し苦労だった事を知り、その上でタマが幾分からかってきた事とそれに引っかけた事が悔しくて、一発タマにデコピンをしてから、何とか体を起き上がらせた。

「訓練を……」

「止めときなよ。今日はもう無理だ。訓練は明日から」

「そう？ でも……」

「無理したって良い事無いよ。ゆっくり寝る事も訓練の一つ。それにもう今日は十分に鍛えられたよ」

「本当？」

「本当。だから寝な。さあさ、ベッドはすぐそこだ」

「うん、分かった」

法子は筆筒を開けて、タオルとパジャマを取り出して、部屋のドアへと近付いた。

「ちよつと、何処へ行くんだい？ まさか外へ？ 本気でこれ以上自分を鍛えるなんて」

法子は左手で制服の首元を引っ張って、自分の鎖骨を反対の掌に乗ったタマに見せつける様にした。

「この汗まみれの体でお風呂にも入らずに寝る位なら、死んだ方がマシ」

その意味を計りかねてタマが考え込んでいる間に、法子は部屋を出て風呂場へと向かった。

翌朝、地響きの様な唸り声が部屋に満ちた。布団がゆっくりと動く。枕に掛かっていた黒い髪の毛がゆっくりと掛布団の中に引きこ

まれていく。そうしてしばらくもぞりもぞりと布団が波打って、布団の横から腕が現れ、頭が現れ、体が現れて、そのままベッドの端から落っこちた。床にへばり付いた法子が唸るように言った。

「体が重い」

法子は這ったまま枕元のタマを掴み揚げる。

「軽い筋肉痛だよ」

「全然軽くない」

頭の中にくすくすという笑いが響いてくる。それに苛立って法子は思いっきり立ち上がった。

「だっしやー!」

気合一閃。だが閃いた気合はすぐに立ち消え、法子はベッドの上に倒れ込んだ。

「無理。今日学校休む」

「ほら、さつさと用意する」

無慈悲なタマの言葉を法子は渋い顔で受け止めて、もぞもぞと動き始めた。

「ねえ、転校性来るって!」

「マジで? いつ?」

「今日! さつき居るの見た!」

「それは来たって言うんですよ」

「男? 女?」

「男子!」

「そんな嬉しそうな顔をしているって事は」

「そう、ものっそいカッコ良いの!」

「マジで!」

「転校生が来るってホントか?」

「あ、武志君。残念だったね」

「何だよ、残念で」

「転校生が女子じゃなかった事と、転校性がカッコ良かった事。き

つと摩子取られちゃうよ」

「取られるって何だよ、別に俺の物じゃねえし」

「でも好きなんでしょ？」

「は？ 別に好きじゃねえし」

「あ、噂をすれば登校してきた。摩子！」

「聞いてください。何でも転校性が来たとか」

「へえ」

「どうしたの？ 辛そうだけど」

「うん、ちよつと全身筋肉痛で」

「どんな運動したんだよ」

「ちよつとつてレベルじゃないでしょ」

「突っつかないで」

「大丈夫か、摩子」

「ああ、武ちよん。全くもって大丈夫じゃない」

仲が良さそうに話しているグループから摩子と呼ばれていた少女が抜けて自分の席、法子の丁度真ん前に座って、ぐったりといった様子で机にへばり付いた。同じ様にぐったりとした法子は目の前で同じ格好をしているクラスメイトを見つめながら、でも私の方が疲れてるしという無意味な対抗心を抱いた。

転校生か。法子は机に頬を付けながら、聞き耳を立てていた話に思いを馳せる。

季節外れの転校生は何か秘密を持っていると相場が決まっている。何かの組織の一員だったり、特殊な能力を持っていたり、あるいは前の学校で暴力沙汰を起こしたとか。一体どんな秘密を持っているんだろう。そんな風に楽しい空想にふける。けれどふと自分の方が余程秘密めいていると気が付いてにんまりと笑う。そう法子は人々がうらやむ魔法少女なのだ。

転校生か。話してみたい。法子はにやつきながらそう考えたが、すぐにその笑顔が引っ込んだ。話してみたいけれど、でもカッコ良

いと言っていた。そんな人が私と話す訳が無い。いやどんな人であっても私は話す事が出来ないか。

私が話せる人はどんな人だろう。そんな益体も無い事を考える。どんな人でも話しかける気が無ければ話す事は出来ないのに。そしてどんな人を前にしても、法子は積極的に話そうとしないのに。

話せる人。そう例えば同じ魔法少女だったら。他の人と違った秘密を抱える者同士話が合うんじゃないだろうか。あるいは私と同じ様にあんなノートを書いている人とか。いや、そんな人居る訳無いか。

法子は時々体の痛みに眉を顰めながら、ぼんやりと様々な空想に耽った。顎を支える腕の先ではブレスレットになったタマが黙りこくっていた。

教室の一角に人だかりが出来ていた。転校生に群がる人々だ。法子は振り返ってそれをちらりと見て、餌に群がる犬の様だと思った。転校生は盛大な歓迎と若干の妬みでもって迎えられた。鋭い目つき、高い背丈、最初に入って来た時はクラスの十中八九がとっつきにくそうな威圧感を覚えた。だがその表情には薄い笑みが漂っていて、自己紹介で朗らかに元氣よく挨拶を行った瞬間、ほぼ全ての後ろ向きな評価は覆され、後は好意と妬みだけが残った。

法子はと言うと、秘密を持っている（持っていなければならぬ）転校生よりも一等高い秘密を持った自分に酔いしれる心と人と話せない自分を情けなく思う気持ちと重い痛みに捻り潰されそうな思い、詰まる所、外の異変よりも内に対する心に惑っていた為に、外界の転校生などにはまるで興味を持てなかった。それどころか顔すら上げずに俯きながら、内に渦巻く三つの障り、中でも強烈な疲労感に苛まれ怠惰な脱力感を覚えて、顔を上げずに一切転校生を見ないどころか、耳すらもまともに働かせず、何とか得た転校生に関する情報の下の名前が将刀という事と、季節外れの転校の理由がありきたりな親の仕事の都という事だけだった。

今も人垣に囲まれてその向こうに居る転校生の姿は見えない。一瞬、人だかりに僅かの空隙が生まれ、法子はその向こうに転校生が見えた上に、目が合った気がしたが確証は無かった。見間違いだっただ様にも思う。人垣が重なって出来た斑な色合いに偶然人の顔の様な形を見出しただけかもしれない。顔を戻して机に突っ伏し、どうでもいいやと眠りに入る。だがどうしても耳は後方の人だかりに向いてしまう。

その時ふと嫌な言葉が耳に入った。

「あそこで寝ているのは？」
え？

途端に嫌な汗が全身ににじみ出た。まさか私の事かと法子は焦りつつ、必死で心を落ち着けようとする。

そうだ、目の前の何とかっていう子も寝ているんだ。だからそっちかもしれない。そりやそうだ、私になんて注目するはずが無い。

高鳴る心臓が嫌な予感を告げ続けている。

また声が聞こえてくる。

「ああ、摩子の事？」

誰かの言葉に転校生らしき声が答える。

「あのおさげの子」

法子の前に座る子の髪型は、ミディアムショートのアフターカットだ。つまりその子じゃない。法子は自分の髪型を改めて考えて、数秒思考を巡らせて、ようやくおさげだという事に気が付いた。

私おさげだ。

でも分からない。まだ私と決まった訳じゃない。他の子かも知れない。

他の子であります様にと法子は祈りながら耳を澄ませ続けた。

「ああ、あれは、えーっと名前なんだっけ？」

私じゃありません様に。私じゃありません様に。

「なんだっけ？ えーっとね、ちよっと待って、あー、えーっと、あ、法子だ。何とか法子」

私だー！

「十八娘とかいう変わった苗字の」

「いっつも本読んで誰とも話さない」

やめてー。

「何かいっつもこそそしてるよね」

「休み時間本読んでばっか」

「たまににやにや笑ってるし」

やめて。

「そっぴゃ話してる所見た事無いな」

「前に話した時ずっと俯いてて感じ悪かった」

本当に止めて。

法子はタマが自分の心を読める事を思い出して、出来るだけ後ろの人達に気付かれない様に、そっとブレスレットを取って、ポケットの中に仕舞った。

転校生の周りに集まっていた内の半数はクラスメイトに対するあからさまな悪口に眉を顰めてその場を離れていった。陰口を止めはしない。止めれば次に何かを言われるのは自分だ。

俯いて背を向けている法子にはその光景が見えなくて、あたかもクラス中が自分の事を馬鹿にして居る様な気がしていた。

「あの子、前に風呂敷持ってきた時あつたじゃん」

「あつたあつた。何かおばあちゃんが持ってたきそうな古い感じの。」

お弁当包みだっけ？

「そうそう。しかもそのお弁当の中身が煮物と梅干とごはん焼き魚だったの。婆じゃねえんだから」

「あれは笑ったね」

だって、丁度お母さんが入院してて、おばあちゃんに来てもらって、いつも通りじゃなかったんだもん。それにあのお弁当はおじいちゃん用のお弁当を私が間違って持ってきたからだし。そのお弁当だって忙しくて夕飯の残りをそのままお弁当にしたものだし。おばあちゃん上手だから料理はとっても美味しいし、あの日の私

と弟の為のお弁当はフレンチ風の豪華なので。

そんな言い訳を心に思い浮かべながら、法子は必死にじっとしていた。何か反応すれば、更に陰口を言われる事は目に見えていた。

「うちのクラス、みんな結構仲良いけどさ、あの子だけ何か浮いてるんだよね」

「ね。壁作ってるよね」

「しい。それ以上大きな声出すと聞こえるよ」

もう聞こえてる。

法子は俯きながら心の中で力の無いつつこみを入れた。

やっぱり私、みんなに嫌われてたんだ。

クラスに溶け込めていない事は法子自身分かっていたし、多分良い思いをされていないだろうとも覚悟していたけれど、実際に周囲の心を聞かされると覚悟なんて易々と貫いて、酷い悲しみが法子の中に突き抜けてきた。

鼻の奥が痛くなって思わず鼻根に指先を持っていく。当然、そんな事をして痛みが取れる訳が無い。鼻根に添えた指の先に目から流れてきた液体が触れて、法子はいたたまれなくなって更に顔を俯かせた。

「そういえばいつもノートに何か書いてるよね」

「前見たらへたつくそな絵が」

「なあ、そんな事は良いからさ」

転校生が話を遮った。

法子はようやく自分に対する陰口が終わった事に安堵しつつ、同時に転校生が自分に対して何の興味も持っていない事が分かって、嬉しい様な悲しい様な気持ちになった。悪目立ちするのは嫌だけれど、見られないのは寂しい。普通の人は簡単に両立して自分を主張しているのに、自分にはそれが出来ないと思うとやはり悲しみの方が大きくなった。

転校生が次の言葉を接ごうとした時に、丁度教師が入って来て、同時に予冷が鳴る。授業の始まりに当たって、クラスメイト達は各

々の席に戻り、法子は自分の席についたまま俯いて震え続けた。

その日一日、法子はずっと顔を俯かせて過ごした。顔を上げればまた泣いてしまう。そんな気がして顔を上げる事が出来なかった。時間はいつもの通り、時に遅く、時に早く進み、やがては下校時刻となつて、真つ先に教室を出た法子は俯いたまま、あの公園へと足を向けた。

誰も居ない公園。四方を囲むマンションが影を作りだして、その影によつて辺りが閉ざされる気がして、法子はほつと安堵した。このならば誰も来ない。ゆつくりと、昨日ミストが浮いていたブランコに歩み寄つて、勢いよく坐り、思いつきり漕ぎ始めた。筋肉痛の痛みすら、嫌な事を忘れる為の清涼剤に換えて、法子は漕ぎに漕ぐ。「なあ、パンツ見えるぞ」

「ぴぎゃ」

思いつきり地面に靴を突き立てて、何とか急停止し、恐る恐る後ろを振り向くと、そこには一昨日ノートの中身を見て失礼な事を言つた男子が居た。

「ああ！」

法子が叫びながらその男子を指した。指された男子は溜息を吐いた。

「なあ、あんた、十八娘法子だっけ？　もうちょつと周りを見て行動した方がよいよ」

余計な御世話だと沸騰しかけたのは一瞬で、すぐに相手が自分の名前を知っている事に引つかかつて何も言えなくなった。

何処で名前を知られたか思いを巡らせても一向に分からない。何処かで会つただろうか。美形、背が高い、プラス失礼。会つたら忘れそうにない相手だ。けれど一昨日会つた以外に覚えがない。まさか小さい頃遊んだとか？　それで結婚の約束をしていたり？　と段々脱線し始めた思考は、またも記憶の引っかかりが現れた事で躓いて止まつた。

この男子の声、何だか聞いた事のある声だ。一昨日じゃなく、もっと最近。法子の行動範囲は限られている。すぐに自分の関わった人々が頭の中に網羅され、そうしてすぐに思い当たった。

「あ、転校生」

「ああ、そうだけど」

変な事言っちゃった。法子は自分の口走った言葉を反省した。今日一日、ずっと俯いていた為に、転校生の顔すら見ていなかった。しかし転校生からすれば、あの時クラスに居た全員が自分の事を知ったと思っているに違いない。その期待を裏切ればどんな逆恨みをされるか分からない。

とりあえず、ここは何とか和やかなムードにして退散しなければならぬ。法子は必死に会話の方法論を頭の中に思い浮かべて言った。

「えーっと、将刀君」

相手の名前を呼ぶ事が仲良くなる第一歩。いきなり名前も失礼かと思ったので、苗字で呼ぼうと思ったが、残念ながら苗字を知らないで仕方が無い。

「ああ、野上将刀っていう。よろしく」

「よろしく」

とりあえずの挨拶を済ませ、法子は次の会話を考える。

だが既に万策は尽きていた。

話題も何も持たない法子に会話を接ぐ力はない。興味のほとんどをフィクションの世界に向ける法子にとっては、天気の話すらも困難だ。今日が雨だろうが何だろうがどうでも良い。だからそれに対する感想も言う事が出来ない。

会話が出来ずに、法子が心の中で右往左往していると、先に将刀が口を開いてくれた。

「学校、嫌いなもの？」

「え？」

「楽しそうにしてなかったから」

何で急にそんな話題を？ 今日来た転校生に言われる程、楽しそうではなかったのか。まあ、その通りではあるけれど。

法子は恥ずかしい気持ちで一杯になって、口すら満足に開けない。黙っている法子を見て将刀はふつと笑った。

「まあ、分からなくはないよ。俺もあんな陰口を言うクラスは嫌だ」「ち、違うよ！」

思わず法子は叫んでいた。

「あれは私が悪いだけだから」

そう、誰もがしている当たり前の事をまともに出来ない自分が悪いのだ。言われるだけの理由がある。自分がもつとちゃんとしていればあんな事は言われない。それなのにこの転校生はクラスの人達を悪く言うなんて。転校してきたばかりで何も知らないくせに。

そう考えるうちに、本当に自分は駄目な奴だなと嫌な気持ちになった。

きつとこの転校生は孤立した私に同情して気を使ってくれたのだ。それなのに、その優しさを不快に感じてしまった。もう私は他人の優しさすらまともに受ける事が出来ない。

どんどんと思考の泥沼にはまって、法子はいたたまれなくなって、その場を後にする事に決めた。

「とにかく違うから。悪いのは私だから」

ぼそぼそとそれだけ言つて、法子は背向け、公園の出口へと向かう。

その背後に向けて転校生が言い放つ。

「だったら笑って話せば良いだろ。そうすればあんな事は言われないし、あんだってそっちの方が幸せなはずだ」

それを聞いて、法子はもうその場に居られなくなって、走り出した。

そんな事は分かっている。そんな事は分かっているけれど、それが出来ないから苦しいんだ。それが出来れば苦労しない。それなのにあの転校生は無神経にもあんなことを言った。

走って走って。

ああ、分かっている。あの転校生にとってそれは当たり前的事で、至極簡単な事なんだ。だからそれが出来ない私がやっぱりおかしいんだ。

家の前まで来て、玄関を開けて、自室に飛び込んで、ベッドの上に転がって、ポケットからタマを取り出して、そうして強く握りしめた。

「今日は災難だったね。まあ、あまり思い詰めるなよ」

「良いから変身させて」

「は？ どうしたんだい？ 随分と焦っているね。今日の事なら」

「良いから変身させて。私はあなたと契約する」

タマはしばし沈黙していたが、やがて法子の服装が変わり、髪の色が変わり、法子は魔法少女になる。魔法少女になった法子は煮えたぎる様な薄気味の悪い悲しみの猛るままに、窓の外へと飛び出した。

ライバルを打ち倒せ！

「魔物は？ 居る？」

ひとときわ高く跳び上がり、夜の風に吹かれながら、法子は辺りを一望した。住宅地には仄かな温かみを持った光が灯っている。それがむかつく。太陽の様な輝きがあるでもなく、常世の様に暗い訳でも無い。もっと輝けるのに、人の為という名目でその力を抑えている。その実に中途半端な様が気に食わない。

遠く行く先には、爛々と照る輝きがある。ビルや繁華街の強烈な明かりが灯り、昼とまでは行かないが、文明を持つ身として精一杯に輝いている。その光に誘われる様に法子は跳んでいく。

「ああ、微弱だけれど感じる。行く先そのまま」

法子は頷いて見知らぬ屋根の上に着地して、また跳んだ。

「嫌な気分になっているのは分かるけれどね、八つ当たりは感心しない」

「うるさい」

法子は民家の屋根を跳び次ぎ跳び次ぎ、やがて駅を中心とした繁華街に辿り着いた。一際高く跳んでビルの屋上へと上り、縁に立つて駅前の広場を見下ろす。

人々はあちらへこちらへ勝手気ままに歩き回っている。遊び歩く姿、駅へと向かう姿、待ち合わせをしている姿、誰も彼もが我が物顔でのし歩いている。だが屋上に立つ法子には気が付いていない。

自分が立っている事を誰も知らないのだと思うと、法子には目の前の光景がどうにも愚かな気がして、とても嬉しくなった。

「それで魔物は？」

「視界の右端、五階建ての建物の五階」

言われるままに視線を右に滑らすと、五階建ての駐輪場があった。窓や隙間から見るに、一階から四階までは人の往来があるのに、五階にだけは人が居ない。

「何かあつたのかな？」

五階に人が居ないのと魔物の存在は関係があるのか。襲われて皆が下に非難したのか。あるいは五階に居た人々を丸々消し去ったか。だとしたら相当凶悪な魔物だ。

法子は屋上の縁を蹴り、そのまま駐輪場へと飛び降りた。一度、駐輪場の屋上へと降り立ち、無駄に後方宙返りをしながら再び宙に躍り出て、壁に沿って頭から落下し、大きく開かれた五階の窓枠に手を掛けて、五階へと滑り込んだ。

誰も居ない駐輪場、ずらりと並んだ自転車の合間に一匹の犬が見える。

犬、では無い。魔物だ。

『犬もどき』

犬っぽいけど犬じゃない。どちらかと言えば、いるかに近い。

マーキングした縄張りに、人は近づけなくなる。

魔力：微弱

耐水性：MAX

息継ぎ：ちよっぴり苦手

犬らしさ：秀

法子が見つめている前で、犬もどきは突然法子に吠えたてて、かと思うとお尻を向けて、その後唐突に振り返り、俄かにぐるると喉を鳴らし、いきなり跳びあがって自転車の影に隠れた。法子にはその行為の意味がまるで分からなかったが、歓迎されていない様だと思った。何て生意気なんだろう。

「さてと、憂さ晴らしに付き合ってもらいましょう」

法子は酷薄な笑みを浮かべて刀を抜き放った。殺す。そんな凶暴な思いが湧いた。殺す。学校での会話を思い出す。笑われ、馬鹿にされ、嫌われ。殺す。頭の中に浮かんだ嫌な映像を切り裂き、暴れだしたくなる気持ちを手に持った白刃に込めて、横一文字に構えた。辺りに気を配る。隠れた犬もどきはすぐに見つかった。いつの間にか背後に回っている。

即座に振り返る。犬もどきは自分の尾を追って回っている。法子は刀を両手で振り上げて、明確な殺意を持って切り下した。犬もどきの腹に切れ目が入る。悲痛な声を出して、犬もどきは自転車の影へと逃げ込んだ。

追う。追っている法子の胸に、後味の悪い後悔がわだかまり始めた。犬もどきが何をしたというのだろうか。ただ人を遠ざけただけ。確かに迷惑をこうむった者も居るだろう。だがそれが追われ、切られ、殺される程の罪だろうか。

そんな当たり前の疑問が法子の胸に湧いてしまった。だがもう後戻りは出来ない。全てへの反感が強く強くしこりとなって容易には取り除きようがない程膨らんでしまった。これをどうにかしなくては生きる事すらままならない。そう犬もどきを殺さなくちゃいけないんだ。心の中でそう叫ぶと、ふつふつと怒りが湧いた。犬もどきを殺そうとする自分は間違っている。そんな当たり前の感情に流され、後悔し、投げ出そうとする自分すら憎らしく、目の前が暗く赤く染まっていく。自分を含めた全てが気に食わない。

今日の学校での陰口、いつも一人で居る自分、暗澹として生きつづけている自分、そんな見たくも無い光景が頭に浮かぶ。これをどうにかするには斬るしかない。斬って殺すしか、私は生きられない。法子は犬もどきを見失って、跳びあがった。体を上下反転させて、天井に着地して、隅の方で震えている犬もどきを見つけて、足に力を込める。刀を鞘に納め、殺気を漲らせる。そして天井を蹴りだし、犬もどきへと跳んだ。

震えている犬もどきに迫る。法子は刀の柄に手を掛けて、刀身にありつたけの魔力を込めて、目前の犬もどきへと抜き放った。しかし止められた。

必殺の意志を込めた刀は、横合いから出された杖に当たって弾き飛ばしただけで終わり、犬もどきには届かなかった。

何が起こったのか。咄嗟に法子は判断できなかった。だが犬もどきを殺す。その凶暴な意志に支配された法子は、突発的な事象にま

るで関心を払わずに、杖に当たって軌道の逸れた刀を、上段に構え直して犬もどきへと振り下ろそうとした。

再びそれは失敗に終わる。

突然横合いから衝撃を受けて、法子はふっとばされて転がった。その体には少女が一人抱きついていて。

攻撃を受けたと思った法子は、全身総毛だつて、必死になって体に巻き付いた何かを引き剥がす。引き剥がした何かと目が合つて、良く見ればそれは先日助けてくれた魔法少女だった。丈の短いドレスの様な白い衣装を着たその魔法少女は、悲しげな顔をして法子の事を見つめていた。

「駄目だよ」

魔法少女が、そう諭す様に呟いた。法子にはどういう意味だか分からない。だが言葉に込められた切実な響きに何かしらを感じ取つて、法子は引き剥がす手を止めて魔法少女の話を聞く事にした。

「どういう事？ 私はあの魔物をやつつけようとしたのに、どうして邪魔したの？」

それは本心からの言葉だったが、一方で既に法子の中にはその疑問に対する漠然とした答えも持ち合わせていた。何故かつては自分の事を助けてくれた魔法少女が今は自分の事を邪魔しようとするのか。そうであつて欲しくないとはい思いつつも、法子には次に相手が吐き出す言葉が何となく分かつてしまった。

「駄目！ あの子は悪い子じゃないんだよ！ それを殺そうとしちゃ駄目！」

ああ、やつぱり。頭はとても冷静で、酷く乾燥した言葉が木霊した。だが体は相手の言葉を直に受けて、力が入らない。視線を逸らすと、犬もどきが震えている。

「でも、あれは魔物で」

「そんなの関係ないよ。あの子だって生きてるんだから。痛みも感じる普通の生き物なんだから」

あの魔物が何をした。殺されるだけの謂れがあつたのか。

そう問う魔法少女に法子は心の中で必死に反論した。

ある。魔物は悪だ。人を害する事しかない。放っておけばさらに強力な魔物を呼んで、放っておけば世界が滅びる。魔物は悪だ。だから、だから殺さなくっちゃいけないんだ。

法子は何度も何度も心の中でそう繰り返す。だが声には出さない。結局八つ当たりでしか無い事など自分でも分かっている事だったから。だが反論は出来ないものの、止めると言われておいそれと従える程、法子のやるせない感情は軽くない。魔法少女を引き剥がして起き上がり、自分を見つめる悲しげな眼を睨み返した。

法子が魔法少女へ抱いた感情を読んだのだろう。タマが慌てた様子を伝えてきた。

「法子、君は一体何をする気だ」

「決まってるでしょ」

法子の親指が刀の鍔を押し上げる。魔法少女を敵と見定める。

『白焰の魔法少女

純白の衣装を着た可憐な魔法少女。

その正体は、ある、ある、な。

生き物、心、は、理解、示す。

魔力：程々

美う：にほご

目銅：？』

「何これ？」

「妨害されたね。実力が同等かそれ以上なんだろう。ここは退こう。これ以上衝突すると戦いになる」

「戦いは望む所だよ」

「目的を忘れたのかい？ 君の目的は魔物を倒して人を救う事だろう？」

「その魔物を庇うなら、排除して目的を遂げるだけ」

「このままじゃ本当に殺す事に」

「だから何？」

完全に頭に血が上った法子には、タマの言葉も届かない。ただ魔物を殺す、邪魔者を排除する、二つの事にしか意識が向かない。

法子が唸る様に言った。

「魔物は悪だよ。痛みを感じようと、生きていようと、悪さをするなら排除するだけ」

そうして刀を構える。

魔法少女は驚いた様子で、一度振り返り、背後の震える犬もどきを見てから、再び法子を見て懇願する様に言った。

「それなら帰してあげれば良いでしょ？ 何も殺す事は」

その必死な姿に向けて法子は思いつき刀を抜き放った。だが刃が届く前に魔法少女はまるでバネに弾かれた様に後ろへと跳びあがり、犬もどきの前に着地した。

「どうしてもこの子を殺そうとするの？」

魔法少女が幾分冷めた口調でそう尋ねてきた。それに対して法子が怒鳴る。

「当たり前でしょ！ そいつは悪い奴なんだから！」

言い終えると同時に、法子は地面を蹴った。眼にもとまらぬ速さで、一気に距離を詰める。と、魔法少女は杖を掲げて応戦する気配を見せた。

もしも立ち向かってくるなら相手よりも早く斬る。もしも避ける様なら、そのまま素通りしてあの犬もどきを斬る。そんな単純な作戦を立てて法子は魔法少女へと突っ込んだ。

突然、目の前が爆発した。強烈な熱気に晒され、思わず立ち止まると、今度は辺りを覆う煙が襲ってきて、法子は咳き込んだ。

とにかく煙で辺りが見えない。何処からいつ攻撃されるかわからない。恐怖を感じながら、とにかく煙から脱出しようと、法子は焦って横に跳んだ。幸い煙の量は少なく、すぐに煙から抜け出せた。そうして辺りを見回すと、フロアの反対側に魔法少女が立っているのが見えた。その頭上に光で出来た人の頭大の魔法円が四つ並んでいた。

「魔法陣……あれは」

「とても基本的な魔術だね。確か100年位前に国際規格化していた。そういえば今日の授業でもやっていたな。ただ魔力を飛ばすだけのお手軽魔術。でも込められた魔力が強大だね」

「どうしよう」

「もう一度言うよ。退きな。これ以上続けても何も良い事が無い。

魔物はあの同業者に任せて、君はこの場から離れるんだ」

「嫌！ それだけは絶対に嫌！ それじゃあ、私の負けじゃない！」

絶叫して再び駆ける。折角魔法少女になれたのに、魔法少女の世界でも自分は駄目なのか。そんな思いを振り払いたくて、法子は必死に駆けた。

遙か先の魔法少女の頭上には今や四つの光球が現れて、ぎちぎちと辺りに嫌な音をまき散らしている。

「避けなきゃまずいよ」

もうタマの言葉には答えずに、法子は刀に手を添えてじつと光球を見つめ続けた。

光球が一つ飛んでくる。拍子抜けする程ゆっくりとした速度。法子はそれを横に跳んで回避した。そこに二つ目の光球が飛んでくる。今度は物凄い速さ。横に跳んだ瞬間の法子へと狙いを済ませた一撃だった。

迫って来る光球に驚いた法子は、宙に浮いた状態で無理矢理地面を蹴って何とか上へと逃げる。その際に避けきれず右の足に光球が当たった。激痛が走ったが、不思議な程動揺が無かった。痛みが顔を顰めつつ、体を反転させて、傷ついた右足で天井を蹴り、更に距離を詰める。

三つ目の光球が跳んでくる。避ければまた同じ事になる。そう判断して法子は刀を抜いて、光球を切った。魔力を込めた一撃で光球は霧散する。そこに四つ目が襲ってくる。無理な体勢から何とか刀を返して光球を切る。力はまるで入っていないが、魔力だけは込めた一撃で、触れた瞬間に光球は砕け散った。安堵して、着地し、更

に床を蹴る。

魔法少女はから空きだ。今度こそ切る。法子がそう思った瞬間、目の前にいきなり壁が出現した。止まり切れずに壁にぶつかり、全身に衝撃が走る。壁は砕け、突き破った法子は残骸と共に床に転がり、何とか立ち上がった時には既に魔法少女は遠くに退き、再びその頭上に四つの光球を作っていた。

忌々しい思いで胸が一杯になる。法子は歯ぎしりしながら再び魔法少女へ向かった。ゆっくりと一つ目の光球が。法子はそれを刀で切った。そこに二つ目の速い光球が。法子は何とか刀の先をその光球へ触れさせた。光球は砕けた。触れさえすれば防げる事に気が付いた法子は刀を前に構えて、そのまま駆けた。そこに三つ目の光球がやって来る。触れて壊れる。四つ目がやって来る。触れて壊れる。今だとばかりに力強く踏み出そうとして、足をもつれさせて転んだ。床に擦れて皮膚がそぎ取られるが、すぐに治っていく。気が付けば先程光球が当たった足から痛みが無くなっていた。体の傷が治っていく。そのくせ体は動かない。

「限界だね」

タマの声が伝わる。法子がそれを無視して弱々しく立ち上がると、魔法少女の頭上には既に四つの光球が用意されていた。

「初めての本格的な戦闘にしては良く動いていたよ」

一つ目が飛んでくる。法子は何とか刀を掲げて光球に触らせ打ち破る。

「でも疲労が極まった」

二つ目が飛んでくる。法子は刀を触れさせて、だが光球に変化はなく、そのまま突っ込んできて、法子は衝撃を食らって後ろに飛んだ。

「残念ながら君の負けだ」

三つ目は飛んで来ない。代わりに魔法少女が近付いてきて、腹這いになって何とか顔を上げる法子の鼻先に杖を突き付けた。魔法少女の目は驚く程冷たい。

殺される。咄嗟にそう思っで、法子は後ずさるうとした。だが動けない。手足を微かに動かしただけの惨めな姿をさらしたただけだ。

魔法少女の杖に光が灯る。魔力が込められていく。それが放たれれば、死ぬ。

殺される。再びそう思っで、法子は目と鼻から液体を流して、手足を少しずつ動かして逃げようとする。だがそれすらも次第に出来なくなっで、体は完全に床へ這いつくばり、顔も上げる事が出来ず、顔をくしゃくしゃに歪めながら法子は助けてと心で願ひ続けた。

落ち込んだ日の帰り道

法子が心の中で必死に助けてと繰り返していると、やがて頭上から優しい声がかけられた。

「どう？ 殺されそうになるのがどれだけ嫌な事か分かった」

その声音に、自分の命が救われる可能性を見出して、法子は顔を上げようとした。だが上げられない。体が言う事を聞かない。口から涎が垂れるだけ。

「ね？ もう二度と酷い事はしようとしなくて、約束して」

最後の言葉だけ妙に底冷えしていた。動かないはずの法子の体が動いて、何度も頷いた。

「分かってくれてありがとう。それじゃあ、ばいばい。あ、そうそう、あの子は大丈夫。私がちゃんと帰しておくから」

足音が離れていく。それから何か音が聞こえて、しばらくして止んだ。後には外からの喧騒が聞こえてくるだけだ。

魔法少女は居なくなった。命の危機が去って安堵した法子は、急に悔しくなった。流れていた涙が更に多くなる。何かにすがりたく、否定して欲しくて、法子はタマに尋ねた。

「ねえ、タマちゃん。私間違ってたの？」

「押し通せない正しさなんて存在しないよ。でも、私はあの同業者の言葉も間違っていると思うね」

「どういう事？」

「理由は二つ。」

一つ目は授業で習ったかもしれないけれど、魔物は向こうの世界の概念に守られているからそう簡単に死なない。首を切るうが真つ二つにしようが時間をかければ元の状態に戻る。だから君がさつき何をしようとかの犬もどきを殺す事は出来なかった訳だ。だからあの同業者が魔物を殺す罪で君を糾弾したのは間違っている。起こりえなかったんだからね

二つ目に、あらゆる魔力を有するものは魔術に対する抵抗が備わっている。だから魔物を向こうの世界に帰す送還の魔術にだって魔物の抵抗力が働いて上手くいかない。だから抵抗力を少なくしないといけない訳だけど、その一番簡単な方法が肉体を痛めつける事だ。あの同業者の力量を見るに君と同程度。それ位の力じゃ暴力以外の選択肢はほとんど無いと言って良い。つまりあの同業者だって抵抗力を落とすには結局暴力に頼る必要がある。君がやろうとした事と意識の差はあれ同じだ。

あの同業者が君の心を読んで、その上で送還の為に傷付ける自分と、憂さ晴らしの為に傷付ける君との、意識の差を説いたなら分かるけど、そうで無いなら、結局あの同業者は目の前で行われる残虐性のみに着目して、それを批判しようと訴えやすい別の理屈を付けただけだ。だから間違っている、と私は思う」

「そっか」

タマの長々しい説明は法子の頭にほとんど入って来なかった。けれどその言葉が間違いなく法子を励ますためのものである事は分かった。だからこそ、それに法子は感謝して、同時に悔しい思いが強くなった。

魔法少女になれば変われると信じていた。魔法少女になれば自分は何か豪い人間になれて、学校生活にだって変化があるって信じていた。でも現実はこのだ。学校では前にもまして居心地が悪くなり、外では自分勝手な八つ当たりで魔物を殺そうとして同じ魔法少女にそれを諷められ、更にその魔法少女に楯突いて完膚無きにまで叩きのめされた。

魔法少女になったから酷い目に遭ったんじゃないくて、魔法少女になっても変われなかった。それが悔しくて悲しかった。テレビでは日夜魔法少女の活躍が採り上げられその華々しい戦果を誇っている。一方で自分は地面にへばり付いて惨めに泣いている。その差が悔しかった。魔法少女になって変われる人間が居る一方で魔法少女になっても変わらない自分が居る事が悔しかった。

惨めな自分の中に縷々として残っていた最後の希望、魔法少女になれば自分も変われるという幻想が取り払われ、後にはいつも通りの無力に対する悔しさだけが滲んでいる。それが虚しかった。

法子はうつ伏せになったまま唇を噛んで、涙を袖で拭いた。だが涙は後から後から流れてくる。

「法子、君が悔しいと感じるのは分かるよ」

タマの優しい思念が法子の心に響いた。

「でもね、前にも言ったけれど、まだ始まったばかりだ。これから幾らだつて強くなれるし、これから幾らだつて豪くなれる。勿論、魔法少女だけじゃないさ。君はまだ子供だよ？　これから幾らだつて良い方向へ向かえるんだ」

優しい言葉が胸に沁みた。鼻の奥が痛くなって、とうとう法子は泣き声を上げ始めた。

それに対してタマが更に励まそうとした時、遠くで人の声が聞こえた。犬もどきが帰った事で人払いが解かれたのだ。

「人が来るみたいだ。もう体は回復している。辛いだろうけれど、立ち上がった。すぐにここから立ち去ろう」

法子は言われるままに立ち上がり、人目を忍ぶようにこそそと窓枠に足を掛けて、跳んだ。

屋根の上を伝いながらの帰り道。出来るだけ人に見られない様に帰る自分の姿がまたも惨めに思えて、法子は嫌になった。

「星が綺麗だよ」

唐突にタマがそんな事を言ってきた。

星空なんてどれも同じ、ただ暗い背景に白い点が散らばっているだけ。常々そんな事を思ってた取りたてて感動をした事が無かった法子は、今回もだからどうしたのだろうと投げ遣りな事を考えながらぼんやりと上を見上げて、そこにある星空の美しさに打ちのめされた。それは本当に初めての事で、法子はあまりの衝撃に跳び移る屋根を踏み外しそうになった。

法子はしばらく夜空の美しさに見惚れていたが、それも長くは続

かず、これは今日の惨めさの所為で心境が変化したからだろうと分かって、また涙が出てきた。けれどそれは悲しいばかりの涙では無かった。

「もう泣くのはお止しよ」

「うん」

法子は涙を拭う。

そして、でも、と思う。確かに魔法少女になっても私は何も変わらず惨めな思いをしたただだった。でも一つだけ変わった事がある。それはタマの存在だ。初めての友達。いつも一緒に居て落ち込んだら励ましてくれる友達。タマの方は私の事を友達だなんて思っていないのかもしれないけれど――

「友達だと思っっているよ」

モノローグに横やりが入って少し興が削がれたけれど、とにかくタマという友達が出来た。それだけは今日の惨めさを全部覆して余りある収穫だ。

法子はそう考えて、そこでふと気が付いた事があって、不安げにタマへと尋ねた。

「タマの目的は何なの？」

「だから何となくだよ。誰かを魔女にして世界を救うっていう使命が与えられているといえば、与えられているけれど強制ではないし。結局私が何となく人を変身させたいから……かな？」

「そうなんだ。それで、その」

「ずっと一緒に居るよ」

タマが法子の言いたい事を読み取って先に答えた。

「本当に？」

「ああ」

「見捨てたりしない？」

「君がどんな状況にあっても見捨てたりしない。ずっと一緒に居る。約束するよ」

その言葉で今日の苦労は全部消え去った。十分だ。私は幸せだ。

そう考えて法子は方向転換をして、一際大きく跳ねた。

あの公園へとやって来た法子にタマが尋ねた。

「どうしたんだい？ 帰るんじゃないかったのか？」

「ううん、ちよつと修行をしていこうかと思って」

「動ける位に回復したとはいえ、まだ疲労は強いだろう。帰った方が良いと思うけれどね」

「もう今日みたいな思いはしたくないから」

「そうか。なら何も言わないよ」

法子は空を見上げた。先程美しいと感じた星空はいつもの無機質な夜空に変わっていた。

さて修行をしようと気合を入れた時、背後に気配を感じた。続けて声が投げられる。

「何だ。魔物かと思ったら同業者か」

振り返ると、昨日の騎士が居た。全身を黒い鎧で覆い、黒い兜で顔を隠し、黒いマントをはためかせている。その口元には皮肉気な笑みが浮かんでいた。

「あなたは」

「あんたの同業者だよ。魔物が居ないなら」

そこで騎士の言葉が一瞬途切れる。

「あんたやけに傷ついているな。まさか魔物との戦いで消耗したのか？」

法子は自分の体を見回した。だが何処にも傷は見当たらない。もう治ったはずだけれど。

不思議そうにする法子にタマが言った。

「きつと魔力が減っているのを見てそう言っているんだよ」

成程、そういう事かと思って、騎士の問いに答えようとして、それが敗北という自分の恥部に当たる事だと気が付いて口を噤んだ。「どうした？ まさかまだ辺りに居るのか？」

騎士の声音が段々と真剣身を帯びたものになっていく。法子は慌

てて首を振った。

「違います。もう魔物は居ません」

「そうか、やっぱり魔物が居たんだな。それであんたが追い払ってくれたのか」

「いえ、別の人が」

騎士はしばらく黙って法子を見つめてから、やや声を落とした。

「あんた負けたのか」

痛いところを突かれて法子の顔が歪む。それが答えとなる。

騎士は少し申し訳ない気持ちになって（自分では）優しい（つもの）言葉を掛けた。

「みたところ、まだ変身出来る様になってから日が浅いんだろう？
一つの負け位で気にする必要は無い。闘っていれば嫌でも敗北は付きまとう」

そう言われても悔しいものは悔しいのだ。先程までの法子なら反発を抱いていたかもしれないが、タマとの絆を感じて穏やかな気持ちになっていた法子は、その言葉を素直に受け取る事にした。相手は親切で言ってくれているのだろう。目くじらを立ててもしょうがない。

とはいえ、やはり続けたい話題ではないので話を変えようと、法子は昨日自分を助けてくれた事について尋ねようとして、止めた。
相手は法子の事を憶えている様子は無い。昨日の事は本当にただ魔物を退治しようとしただけなんだろう。そう考えて、何故だか法子は残念な気持ちになった。

「敗因は？」

「え？」

唐突な騎士の言葉に法子は聞き返した。

「負けた理由」

何だか遠慮のない人だなと思ったが、不思議と不快感は湧かなかった。相手の方が同じ変身ヒーローとして遥かに格上の様子だからかもしれない。

「負けた理由と言われても、相手の方が強かったから？」

「それじゃあ、何にもならないだろう。自分がどうして負けたのかを冷静に分析しなくちゃ」

法子は駐輪場での戦いを思い出す。思い出しても圧倒された思い出しかない。力の差がありすぎたからとしか言いようがない。

そこにタマのつつこみが入った。

「いや違うだろう」

そう言われてもどうしてだか分からない。考えあぐねる法子に騎士は助け船を出した。

「なら、どんな戦いだったか教えてくれ。第三者の目から見れば分かる事もあるだろう」

そう言われても、負けた事を話すのは恥ずかしい。まして同じ魔法少女に負けた等とは言いたくなかった。でも負けた原因というのは確かに気になる。

どうしよう。

「話してみれば？」

何故だかちょっと怒っているタマの言葉に促されて、法子は迷った末に駐輪場での戦いを騎士に話した。ただし戦った相手は魔法少女ではなく、あくまで魔物という事にして。

法子が話し終わると騎士が一つ頷いた。

「成程な。どうやら相当強力な魔物だったみたいだな。あるいは魔導師か。聞けば初めての戦闘だったんだろう？ それにしては良く戦ったと俺は思う」

「えっと、ありがとうございます」

ちよっと上から目線ではあるけれど、褒められたのは確かで、何だか法子は気恥ずかしくなった。

「でだ。肝心の敗因だけど、それは接近戦にこだわった事だろうと思う」

「接近戦……」

「そう、不用意に近付いた結果、相手の魔術にしてやられた。遠く

から攻撃する手段があればもつと慎重に闘えていたはずだ」

騎士の発言にタマが法子の心の中で噛み付いた。

「そんな風に慎重に闘ったらずくに魔力が尽きただろうけれどね」

勿論騎士には聞こえない。法子にはどちらが正しいのか分からないので、おろおろとしながら成り行きを待った。

「どうやら遠方に届く攻撃は持つていない様だな」

騎士がそう言つて、離れた場所にある砂場を指差した。

「見ててくれ」

すると砂場から柱がせり上がってきた。それに対して騎士は剣を抜き、体を半身にして、剣を持った腕を巻き付かせるようにして一呼吸置く。構えた剣に魔力が蓄えられていく。そしてその貯めた力を、剣を振ると共に解放した。風切り音が鳴つて、再び静寂が訪れる。一拍遅れて、柱の中心が横一文字に砕け散り、弾けて、柱は真つ二つになった。

「おお」

法子の口から思わず感嘆の吐息が漏れる。

騎士は法子に向き直つて、口元を微笑させた。

「魔力を剣に込めて放つ。単純だけれど、その分使い勝手が良い。遠くにあるとはいえ、斬る事に違いは無いから意味づけもし易い。だから簡単に出来る」

法子はしきりに頷いた。その様子に騎士は笑みを強くした。

「そんな大した助言じゃない。ま、役に立つと良いな」

法子はまた頷いて、ふと首を傾げた。

「あの、教えてくれるのはありがたいんですけど、どうしてこんなに優しくしてくれるんですか？」

法子が疑問をぶつけると、騎士は背を向けて歩き始めた。

「ヒーローだからさ」

そう呟いて、騎士は剣を納める。

「それじゃあ、君に世界の祝福があらん事を」

騎士は何故か無駄にマントを翻して高く跳んだ。そしてすぐに夜

の闇にまぎれて消えた。

「何だかきざったらしい変な奴だったね」

注意を騎士の消えた闇夜に向けながら、タマは法子へそう思念を送った。

「カッコ良かったね」

法子がそれに対してぼーとした様子で答えた。

「は？」

「ヒーローか。私もあんな風になりたいなあ」

「いやいやいや。あんな気取ったのが良いの？」

タマの否定に耳を貸さずに法子はしばらく騎士の消えた方角をうつとりと眺めてから、やがて砂場に立つ柱に目を向けた。

「それでさ、タマちゃん」

「どうしたの？」

「さっき教えてもらった技、どう思う？」

法子としては直ぐにでも覚えて使いたかったが、タマが騎士に対して良い感情を抱いていなさそうだったので、遠慮してそう聞いた。それに対してタマはちよつと不機嫌そうに答えた。

「まああの騎士の言う事はほとんど尤もだと思うよ。戦術の幅が広がるし、覚えて損は無い」

「そっか！」

法子は早速刀を構える。

「それでどうすればいいの？」

「それぞれの感覚によるから何とも。とにかく対象を切りたいと思えば良い。あの騎士も言っていたけれど、とっても簡単だから、やってみればすぐに出来るんじゃないかな？」

「分かった」

法子は刀に魔力を込めた。そうして砂場の柱を見定め、体をゆつくりとねじって、思いつき解放して刀を振り回した。勢い回って一回転して倒れ込み、しりもちをつく。

目を回しながら砂場を見ると、柱に切り込みが入っていた。

「やった！ 出来た！」

「お見事。でも、あそこを狙ったの？」

切り込みが入っているのは端の方である。法子が狙ったのは柱の中央だ。

「ちよつと違うかも」

「百発百中で当たる様にしないとね」

「むっ」

法子は立ち上がって刀を構え、それから何度も刀を振った。柱の傷がどんどん増え、時に切れて柱がどんどん短くなっていく。

しばらく経って、ようやく狙いが真ん中に集まり始めた頃に、タマが言った。

「はい、そろそろ止め」

「ええ！ ちよつと待って。ようやく真ん中に当たる様になってきたんだから」

「気付いてないのかな？ また倒れるよ？ 間違いなく、明日は今日よりも体が重くなるからね」

「うっ」

「帰る為の力も残しておかなくちゃいけないし、今日はもう切り上げ」

「はい」

法子は渋々刀を納め、公園の時計を見上げた。

「あ、もうこんな時間！」

「どうしたの？」

「夕飯の時間だよ！ 早く帰らないと」

法子は急いで跳びあがり、屋根の上を渡りながら、家を目指した。その途中で法子が嬉しそうに言った。

「何とかあの技をちゃんと使える様にしたいなあ」

少し前の落ち込み様など無かったかの様な嬉しそうな声にタマは少し不思議に思う。どうしてこんなに元気になったのだろう。あの騎士の影響か、あるいは新しい技を身に付けたからか。良く分から

ない。何故だかもやもやとするが、とにかく主が元気になったのだから良しとしようと思理矢理自分を納得させた。

「やる気を出してくれたのは嬉しいけれどね。自分の体は大事にしてよ」

「分かってるよ。でもね」

「でも？」

「私はヒーローだから多少苦しいのは我慢するよ」

「そういうもの？」

「そういうもの。今はまだ未熟かもしれないけど、これから沢山の人を救って、みんなの笑顔を守る立派なヒーローになるから」

タマには法子の語る言葉が何処となく子供っぽく思える。実際に学生と言えば大人から見れば子供なのだし、当然と言えば当然かもしれない。

とはいえ、子供っぽいかもしれないが、法子の明るい言葉がタマには嬉しかった。傍に居る者が明るくなれば自然と嬉しくなるものだ。

休日だけ外に出る

「か、体が……動かな」

法子は立ち上がったから体を硬直させて今さっきまで寝ていた布団へと倒れ込んだ。

布団が浮き沈み、跳ね上げられて、それから仰向けになって大の字になる。

「だから今日はもう起き上がらない」

そう厳かに宣言した法子に対して、タマが呆れて呟いた。

「昨日もそんな事を言って、一日中寝ていたよね」

「うん、でも今日も無理」

「はあ、若いのが何て様」

「タマちゃん、おばさん臭いー」

法子は体を丸めて掛布団に絡みつくと、二度目の睡眠に入ろうとする。

そこへ外から声が掛かった。

「法子ー、起きてー。昨日も一日寝っぱなしだったんだから、今日はもう起きなさい！」

「う」

「法子ー、ちょっと頼みたい事があるんだけど」

母親の声が聞こえてくる。それは亡者を駆り出す狩人の声。聞けば抗う事は出来ない。

そうして面倒なお使いを頼まれる。

「おや、母君からだよ？」

「もう！」

法子は不満を込めて起き上がった。

「おや、今日は起き上がらないんじゃないのかい？」

「行くしかないでしょ」

法子が痛みに耐えるぎこちない動きで用意をしている姿に、タマ

は笑った。

「大変そうだね」

「本当に動きたくないのに。お母さんの馬鹿」

「私としては中に籠られるよりは外に出てもらった方が嬉しいけど」
苛立つ法子と笑うタマ。そこにまた母親の声が届いた。

「ねえ！ 法子ー！ 起きてるー？」

「今行く！」

法子は大きな声で答えてから、部屋の扉を開けて、体を引きずりながら下へと降りていった。

「全く、何で私があいつのお弁当を届けなきゃなんないの？」

「まあまあ。可愛い弟君の為だろう」

「全然可愛くない！」

「そうかねえ。良い弟君だと思うけれど」

休日の河川敷、法子は土手の上を歩きながら愚痴りつつ、下で行われているサッカーに目を向けた。

今日は河川敷でサッカー大会をやっている。幾つかあるコートに小学生、中学生、高校生、社会人と分かれて、大声を張り上げながらボールを追っている。法子の弟も小学生の部に参加しているはずだ。法子はサッカーにまるで興味が無かったので、どうでも良さそうにしばらくわらわらと動く選手やわやわやと野次っている観客を眺めてから、視線を逸らし、そして凄い勢いで視線を戻した。

見れば土手の下、座って観戦している人々の中に見知った顔があった。同じクラスの生徒だった。何人かで固まって時折はしゃぎながら、中学生のコートを眺めている。名前も分からないが確かにその顔を毎日の様に見ている。

見つかりたくなかった。元より学校の人と喋るのは怖い。もし取り囲まれたらどうしていいか分からない。一対一で話す事も無理なのに、複数人に話し掛けられたら、それこそ地獄を見る事になる。例えば、相手にいじめの意志が無く、端から見てもただ単に話しかけ

ているだけでも、それは法子にとってこの上ない苦痛になる。

まして昨日の事がある。いじめられる事は必然だ。そう考えて法子は出来るだけ見つかる事の無いようにこそとした滑稽な足取りで、コートに熱い視線を送るクラスの他人達の後ろを通り過ぎた。何とか声を掛けられる事も無くやり過ごしてほっと安堵していると、小学生達のトーナメントが行われている場所へとやって来た。法子よりも幼い子供達が掛け声を上げ、ボールを追っている。ボールが高く飛んだ。選手も観客もその行方を追うが、法子だけはコートを見回して弟の姿を探す。辺りから喚声上がる。点が入ったのか。法子にはコートを見ても良く分からない。俄かに色めきたった観客達の間に視線を這わせっていると、ようやく弟の姿を見つけた。

ようやく面倒なお使いから解放されると安堵して、法子は重たい体に鞭打って弟の所に向かおうとして、足が止まった。

弟が何だか楽しそうにはしゃいでいる。その隣にあの転校生が居た。サッカーボールを器用に操り、体の至る所でボールを跳ね上げ受け止めている。弟はそれを尊敬の眼差しで眺めている。

何であの転校生がこんな所に？ 疑問よりも先に、嫌だなと思った。会いたくない。喋る事になったらどうしよう。不安がどんどん膨らんで、その不安に押しつぶされそうになったから、法子は踵を返した。ここまで来た事は来た。渡せなかったけれど目的地までは来れたんだから上出来だ。そんな自分勝手な事を考えてその場を去るうとして、けれどそれは許されなかった。

「あ！ 姉ちゃん！」

法子の体が大きく震えた。続いて、湿っぽい汗が体中から吹き出し始めた。

「お姉さん？」

転校生の尋ねる声が聞こえる。益々汗が強まった。

「良かった、弁当持ってきてくれたんだ」

背を向けたまま固まる法子に、二人は近付いていく。

「悪い、姉ちゃん！」

そう言つて、弟が法子の前に回つて、お弁当を引つ手繰つた。

「そういや、将刀さんつて知ってる？ 姉ちゃんと同じ中学校に転校してきたみたいなんだけれど」

全力で首を横に振りたかつたが、後ろに本人が要るのでは出来ない。肯定も否定も出来ずに法子はただ固まつた。

「さつき偶然知り合つただけどさ。凄いんだぜ。部活とかクラブとかに入つてゐる訳じゃないのに、滅茶苦茶上手いの」

だからどうしたと法子は心の中で思った。弟の言葉なんて聞いていられない。今、法子の中はどうしたら当たり障りなくこの場を去れるかという方策を練るのに一杯だ。

「どうした？」

「いや、その、じゃあ、私帰るね」

「いや、姉ちゃん、ちよつと待つてつて」

一刻も早くこの場を去りたいという法子の願いは一向にかなえられない。むしろ弟の所為で更に深い泥沼にはまつていく。

「将刀さん、これ、うちの姉ちゃん」

「ああ、さつき聞いた」

「まあ、弟の俺が言うのもなんだけど、結構美人だと思うよ」

途中で吹き出しつつ弟が言つた。

ハードルを上げるなと叫びそうになる。それをぐつと堪えてこの場を立ち去る方法を探す。だが思いつかない。法子は恥ずかしさと怒りと、ついでに情けなさに苛まれながら、弟を殺して自分も死ぬと少しだけ真剣に考える。

「多分、将刀さんと同じ学年だと思ふんですけど」

「一緒だな。それに同じクラスだ。話もした」

「え？」

法子は振り向きざまに、弟と同時に間の抜けた声を出した。

弟の驚きは、将刀が姉を知っていた事に対する驚きが半分に、根暗な姉が他人と、しかもまだ出会つて間もないはずの転校生と、その上弟が持つ他人に対する評価基準、容姿とサッカーの技術に秀で

た将刀と話した事への驚きが半分。

法子は他人が自分に言及した事に対する驚きが半分に、将刀の言葉が法子に対する棘を含んでいなかった事への驚きが半分。

驚き呆けている二人の視線に晒されて、将刀は少しばつの悪そうな顔をした。

「えっと、法子さん」

将刀の口調が唐突に真面目くさったものに改まる。

「昨日は悪かった」

そう言つて、頭を下げた。

頭を下げられて法子は混乱に混乱を極めた。謝られる所以なんてまるで無い。昨日というと公園でのやりとりだろうが、あれは完全に自分が悪かった。何か悪い事があった場合、その原因はまず間違はなく自分なのだから。そもそも法子の中で昨日の出来事は既に消えかけている。覚えているのは、学校で嫌な思いをした事と公園で転校生と話して恥ずかしい思いをした事と魔法少女と闘って悔しい思いをした事とタマの励ましで嬉しい思いをした事だけ。詳しい事はほとんど思い出せない。日々の鬱屈とした思いを忘れる事に困って自己防衛してきた法子はいつもの通り昨日の事もほとんど忘れてしまっていた。それなのに謝られてはこちらの方が申し訳ない。

法子はどう返したものが分からなくて、つられて頭を下げた。

「こちらこそすみません。ごめんなさい」

こうなるともう訳が分らない。

将刀としては部外者のくせに下手に踏み込んだ事を言つて不快にさせてしまった事に対する謝罪した訳で、将刀は全面的に昨日の事は自分が悪いと信じている。しかも昨日のやり取りの中で法子から能動的な言動は受けていない。つまり謝られる様な事どころか、法子から何もされていない。だから何について謝られたのか分からない。将刀は少し考えて、世の中には反射的に謝ってしまう人種がいて、法子はその類なのだろうと、すぐさま見当付けたが、ではそれに対してどう返答したものかというのがまるで分らない。

一方、法子は法子で、謝った後になつて、さっきのタイミングで謝ったのは変だったし、謝罪した理由も理解してもらえなかっただろうと反省するものの、もう一度、今度は謝る理由も添えて謝るといふのは、どうにも気恥ずかしく、滑稽にしかならないだろうと二の足を踏んで、押し黙る。

弟はというと、これこそ完全に蚊帳の外で、ただでさえ姉が他人と交流を持った事に驚きを隠せなかったのに、それが突然謝られ、その上謝り返すという訳の分からない状況に、とにかく呆然としてやがて世の中つて不思議だなと良く分からない感銘を持つに至る。

三人ともが黙りこくり、端からは歓声。法子は形容しがたい和やかな居心地の悪さを感じて、何とか話題を継ごうとあれこれと頭を働かせるが話題は欠片も上つて来ない。

代わりに将刀が話題を転じた。

「お弁当持ってきたんだつたよな」

「は、はい」

「料理出来るんだ」

「え？」

出来ないとは言わないけれど、得意と断言する程の腕でも無い。ついでに持ってきたお弁当は全て母親が作った物だ。そんな意味の事をオブラートに包んで言おうと法子が頭を捻っていると、横から弟が口を出してきた。

「出来るよ！ 無茶苦茶上手い」

「ちよつと！」

「今日の弁当も全部姉ちゃんが作ったしね」

当然嘘だ。これ以上下手な事を言うのは止めると焦る反面、何で弟はこんなに馬鹿な事を言うのだろうと疑問に思った。からかうにしてもいつもはもう少し違った角度でからかってくるのに。端的に言えばあからさまに馬鹿にしてくるのに。

「へえ、凄いな」

弟が開いた弁当箱を覗き込んで、将刀を感じ入って呟いた。その

感嘆は法子に向いているが、当の法子は幾ら褒められても罪悪と羞恥しか感じない。

その時、危ないという声が聞こえた。良く分からないまま見上げると、ボールが見えた。法子達に向かつて近付いていた。

ぶつかりそうだなあと法子はぼんやりと考える。当たらないと思っている訳じゃない。ただ法子は危機に鈍いところがあつて、咄嗟の出来事を真剣に捉える事が出来ないだけだ。

どんどんとボールは向かつてきて、それにつれて法子の視界に映るサッカーボールの影も大きくなり、そろそろ当たるなと法子が思った時、突然視界一杯に影が射した。

将刀が法子の前に立ち塞がって、ボールを胸で受け止め、落ちるボールを器用に足で操って静かに地面へと下ろす。

試合に向いていた視線の内のいくつか、将刀に驚嘆の視線を向けた。

将刀はボールのやって来た方向へボールを蹴りながら向かつていった。

去っていく将刀を見送って、法子が息を吐いた。

「凄いんだね」

「何が？」

「ボール受け止めるの」

「あれくらいは普通だよ」

「あんた、出来るの？」

「守るのが姉ちゃんじゃなかったらね」

弟が憎まれ口を叩いて笑った。だが法子は反応せずに上の空。

「どうした？」

「今、守ってもらったから」

その法子の眩きは問い尋ねられたから答えただけの、何の感慨も籠っていない言葉であつたが、弟はその言葉の中に拙い恋心を読み取った。

「へえ、成程ねえ」

「何よ」

「いや、別に？」

弟は一頻り笑ってから、尚も笑顔で、

「まあ、安心してよ。ちゃんと応援するからさ」

「応援って？」

「姉ちゃんの恋に決まってるじゃん」

「恋って誰との？」

「将刀さんとの」

「はあ？」

法子は思わず、遠く、サッカーボールを少年達に手渡している将刀を見て、すぐに視線を逸らした。

「なんで私があいつと」

「だって、気になってるだろ？」

「そんな事無い」

そこで法子はまた将刀を微かに眺め、そしてまた視線を逸らした。法子の中に恋心と呼べる様な感情は無い。それは法子自身自覚していた。だが弟がはつきりと断言してくるので、まさかという思いが頭をかすめる。

「それに将刀さんも姉ちゃんの事、気に入ってるみたいだし」

「どこが？」

法子の目が三度将刀へと向く。将刀はこちらに戻ってくるところで、目が合いそうになって法子は目を逸らした。

「こっいつのは理屈じゃないんだよ」

「はあ？」

「あのさー、姉ちゃんと喋る男なんて稀少だよ？ 他に居るの？」

「居ない……けど」

「でしょ？ そんな姉ちゃんに話しかけるって事はそれはもう惚れてるんだよ」

「訳分かんない」

「だから理屈じゃないんだって。見た目も良いし、性格もよさそう

だし、運動も得意。悪いところないじゃん」

「だから？ こっちが幾ら思ったって所詮片思いでしょ？」

「だーかーらー、少なくとも無関心でも嫌ってる訳でも無いじゃん。つーことは、これから幾らでも好きになってももらえるって事でしょ？」

「意味分かんない」

「つまりやって見なくちゃ分からないって事だよ」

「私にはそういうの無理だよ」

「それで自分が好きで、その上自分を好きになってくれる人待ってる訳？」

図星なので、一瞬法子の言葉が詰まる。それを弟は嘲笑って、そしてふと真面目な顔になる。

「ま、そんな訳でさ、将刀さん、良いと思うよ、俺。マジで、姉ちゃんが頑張るって言うなら、俺も応援するし」

「何か心細いけど」

「おい」

「でも、何で？ 別に関係ないのに」

「将刀さん気に入った。将来、俺の兄になる男に申し分ない」

「いやいやいや。何にせよ、私はそんな気ないから」

「えー」

何故か弟と一緒にタマまで不満の声を上げる。

なんだか腹が立つて、さてどう叱ってやろうかと考えあぐねていると、将刀が帰ってきた。

法子は意識してしまって喋れない。顔が火照るのを感じてまさか本当に好きなのかと、自分の心にどぎまぎしてしまう。弟はそんな姉を見てほくそ笑みながら、どうやって二人をくっつけようかと思案する。将刀は戻ってきたばかりで、どう話をしようかと考える。

三者とも考え事をして誰一人喋らない。

しばらくして、三人が同時に口を開いた時、遠吠えが木霊した。会場中の視線が発生源へと向く。人よりも二回り大きい獅子の様

な獣が二つ足で立ち上がり、大きく凶暴な顔で辺りを睨みつけていた。

「あれ？ 法子さんじゃん」

「法子さん？」

「あんたの後ろの席の」

「ああ、法子さん」

「どうしたんだろう、こんな所に」

「私達と一緒にじゃないの？ サッカー部に好きな人でも居るんじゃない？」

「そんなキャラじゃないと思ってたけど」

「小学生達の方に行かれますね。ご家族でもいるんでしょうか？」

「きつとそうだよ」

「しかし一昨日のは胸糞悪かったな」

「一昨日の？」

「ほら転校生の……ああ、そういえば摩子はあの時、寝てたっけ」

「野上君だっけ？ それがどうかしたの？」

「いや、あの転校生は別に何も。ただその周りを囲んでた、江木さんとかがさ」

「どうしたの？」

「いや、なんつか、急に法子さんの悪口言い始めて」

「マジで冷めた」

「ね」

「へえ、そんな事があつたんだ」

「まあ、そんだけ。関係ないっちゃ無いけどさ」

「あんまり気にしてもしようがないです。今はこっちの事を……あ、抜きましたね」

「あ！ ああ！」

「ちよつと落ち着いて」

「攻めてるねえ」

「行け！ 行けえ！」

「あ、外した」

「あああ！」

「うるさいです」

「もうちよつと落ち着いて観戦しろよ」

「落ち着いてられないでしょ？ 三木君が！ 三木君の！」

「知らないよ。あたしの目当てじゃないし」

「摩子さんのお目当てさんはどうなんですか？」

「えー？ 私の？ 特にいないけど」

「ん？ だって、最近ずっと高橋君、高橋君で」

「そうなんだけどさー」

「ああ！ また外した！」

「うるさい。さっき見かけて近寄って見たら、すごい馬鹿っぽくてさ」

「ああ」

「やっぱり外だけ良くてもねえ」

「そりゃそうだ」

「いい加減決めてよ！」

「いい加減座れよ。何にせよ、じゃあ、ついでの武志君を応援して上げなよ」

「んー、そう思ったんだけど、さっきから全然活躍してないんだよね」

「武志君はディフェンスで、チームがずっと攻めているのですからしょうがないのです」

「でも折角応援しようと思ったのに……あれ？」

「どうしました？」

「なんだか向こうが騒がしい」

「ホントだ。どうしたんだろっ」

「あ、摩子、何処行くのぉ？」

目と目をつきあわせて考えよう

「へえ、あれが魔物かあ」

弟が背伸びをして遠くの魔物を眺めながら、酷く気楽な様子で呟いた。

獅子の頭に、人よりも二回り大きい筋肉質な肉体、両手両足には鋭く長い爪が生え、如何にも危険な様子を漂わせている。唸り声を張り上げながら、敵意を漲らせて、辺りを睨みまわしている。

魔物の周りには囲む様にして沢山の人が集っている。遠巻きにして眺めている。何処か不安そうに、されど楽しそうに、猛る魔物を囲み、ある者は語らい、ある者は感嘆し、ある者は写真を撮り、ある者はある者は笑っている。余裕に満ちた顔で不安げに楽しそうに魔物を眺めている。

彼等が魔物よりも強いなんて事はない。魔物が爪を掛ければ、それだけで命は掻き消されるだろう。それなのに彼等が逃げ惑う事は無い。

それは偏に魔物の非現実性に起因している。魔法が世界の常識となり、魔術が単なる技術に成り下がり、溢れる魔力に因って魔物の出現頻度が以前とは比べ物にならない程上昇した現在でも、実際に魔物を見た者は少ない。あくまで一般の人々にとって魔物は物珍しげなニュースでしかなく、しかもその大半はヒーローに倒されて終わる痛快な劇である。

彼等が魔物の危険を知らない訳ではない。実際に彼等は思考の片隅で、人を殺す魔物の恐怖を思い、胸を弾ませている。ただ彼等は出来ないだけなのだ。被害者が自分になる可能性をひたすら想像出来ないだけなのだ。

そんな群衆を見ながら法子は呟いた。

「あいつ等、馬鹿じゃない。危ないのに」

それは孤独な法子が良くやる、何の気兼ねも無い、誰に聞かれる

ともない呟きだったが、悲しい事に今日は久しぶりに家族以外の人間が近くにいた。

言ってから数瞬経って、初めて自分が暴言を吐いた事に気が付いて法子は身を固くする。法子の目が恐る恐る将刀に向くと、それを待っていたかのように将刀が笑った。

「じゃあ、弟を連れてあんたも逃げれば良いんじゃないか？」

その皮肉な言葉に苛立って苛立って法子は顔を背けた。先程ちよつと良いなと思ったらこれだ。侮蔑の籠った言葉は法子にとって馴染みの言葉である。けれどいつまで経っても慣れる事は無い。恥ずかしさと悔しさの混じり合ったひたすら不快な思いが胸に湧く。やっぱり私は人と関わるのは嫌いだ。そう思って不満げな顔で俯いた。

一方、将刀はほんの軽い気持ちの言葉が何だか法子を気落ちさせてしまった事に気が付いて当惑した。

二人が押し黙る。傍から見えていた弟は、空気の悪くなった二人の間を取り持とうとして、明るい声を掛けた。

「なあ、もっと近くであの魔物を見ようよ」

その途端に二人は顔を険しくさせて諷めの言葉を吐く。

「駄目！ 危ないって言ったでしょ」

「駄目だ。危険すぎる」

息の合う二人を前に、弟は微笑して、尚も明るい調子で言った。

「そんな事言ってもここだって十分危ないよ。そんな事言うなら早く逃げようぜ」

弟としては二人を連れだして、後は自分かはぐれるなり何なりして、二人つきりにしてしまおうという作戦だったのだが、

「え？ …… っと」

法子は気乗りがしない様で言い淀む。弟は残ったそうにしている法子を不思議に思った。

法子が残りたいと思うのは当然で、出現した魔物と闘いたくて仕方が無かったからだ。逃げてしまっただけでは闘う事が出来ない。

「ねえ、タマちゃんどうしよう」

タマに頼って尋ねると、タマは少し考える気配を見せてから、答えた。

「はぐれば良いんじゃない？」

「はぐれる？」

「だから一緒に逃げるふりをして途中で抜け出せば良いんじゃないかな？」

「そっか。それもそうだね。流石タマちゃん！」

「ちよつとは自分で考えなさいな」

頭の中で会議を終えた法子は、途端に笑顔を二人に向ける。

「分かった。じゃあ逃げよう」

気乗りのしない様子だった法子が突然笑顔になった事で、二人は不審がり、特に弟の方は久方ぶりに見た姉のあまりにも晴れやかな表情に気持ち悪さを感じた。硬直している二人を置いて、法子は早速土手の上へと上がる。遅れる二人は一瞬顔を見合わせてから、不思議そうな表情で見つめ合い、それから法子の後を追った。

土手の上にも沢山の観客が居た。こちらの観客達は、魔物から離れているし、暴れ出してもまず殺されるのは土手の下で魔物を遠巻いている人々だから安全だと信じて、あからさまに余裕の表情を浮かべている。

法子は何となくそれらの顔が鼻についたが、それよりもはぐれる事の方が大事だと、機を見計らう為に集中し始めた。

一方で弟の方は法子と将刀のちよつと後ろを歩きながら、自分のはぐれる事で法子と将刀を二人つきりにする機会を窺っていた。それは直ぐにやって来て、人口密度の高い場所に差し掛かった拍子に、弟は勢いよく別方向へと駆け出した。人にぶつかるのも構わずに駆け抜けて、しばらく経ってから振り返る。二人が一緒に歩いている所を見たかったのだが、視線の先には乱雑に立ち並ぶ人だけだ。で、姉と兄予定の姿は見えなかった。

「ま、いっか。上手くやってくれよ、姉ちゃん」

弟がそう呟いた時、全く別の場所で法子もまたはぐれていた。

「もう無理。もう走れない」

「うん、もう止まって大丈夫」

タマの言葉を合図に立ち止まった法子は、肩で荒く息をしながら、上手くいった事にほくそ笑む。丁度、人だかりの多い場所に差し掛かったのは運が良かった。弟の事が少し気になるが、将刀がきつと家まで送り届けてくれるだろう。そんな事を考えて、安堵すると、まだ息も整わぬうちに、タマへと尋ねかけた。

「それじゃあ、早速変身しよう」

「それは良いけど。良いのかい？」

タマが尋ね返してきた。法子にはその意味が分からない。

「何が？」

「辺りに結構な数の人が居るけど、魔法少女だってばれて良いのかい？」

「あ」

法子が辺りを見回すと、確かに多くの群衆が居る。そのほとんどが魔物を見つめて、眼を逸らす様子は無いが、中には別の場所を向いている者も居るし、いつなんどき注目されるか分からない。

「どうしよう」

「自分で考えなって」

「でも」

法子はまた辺りを見たが、人目を阻めそうな、変身に適した場所はない。

「どうしよう。人に見られない場所なんて無いよ」

「いやいや、あそこに丁度良い建物があるだろう」

タマの意志に促されてそちらを見ると、確かに小さな建物がある。だが法子はその建物をあえて無視していた。

「やだよ、あれトイレだもん」

「ああ、そうなのか。でも別に良いじゃないか」

「いやー。汚い！」

「そんなに汚く見えないよ。うん、大丈夫」

「トイレで変身する魔法少女なんて嫌！」

「そんな事を言っただって他に無いだろう。減るものでもないし大丈夫」

「プライドが減る！」

「文句があるなら代案を出してくれ」

「うう。で、でもさ、例えば私がトイレに入って、その後に変身した私が出てきたら、それを見ていた人にばれちゃうかもよ？」

「その点は安心してくれよ。前にも言っただけ、変身さえすればばれる事は無い。もっと言えば、変身する所さえ見られなければ、例えどんなに怪しい状況だろうと変身前と変身後が結び付けられる事は無い」

「むう」

遂に退路は極まって、法子は渋々と言った様子でトイレへと歩み始めた。

「魔法少女がトイレ……か」

「嫌なら魔法少女を止めるかい？」

「やだ。続ける」

法子がトイレに入って十数秒、トイレの中から魔法少女が現れた。突然の魔法少女の出現に人々は好奇と期待の視線をその魔法少女へと注ぐ。沢山の視線に晒された魔法少女の表情は晴れやかな笑顔だったが、少しだけ悲しげだった。

法子が恰好を付けて跳び上がり、人々の頭を越えて再び魔物の居るコートへ戻ると、事態は全く変化していなかった。

相変わらず魔物は唸り声を上げるだけ。観客達は楽しそうにそれを取り巻き、写真を撮っている。凄惨な様子はまるで無い。

「何だかほのぼのしているんだけど」

「そうだね」

「襲ったりとかしいの？ あの魔物」

「まあ、魔物の考えは一つじゃないからね。あいつは別に人を襲おうと考えている訳じゃないんじゃないかな？」

法子の表情に微かに困惑が浮かぶ。

「じゃあ、良い奴なの？」

「良いも悪いも無いけれど。何にせよ、魔物は追い返さなくちゃいけない。前にも言っただろ？ 魔物って言うのは居るだけで場を汚染する。それが魔導師を呼び出して、魔導師が場を聖別して、最後に魔王が出現する。とにかく居るだけで悪い影響を及ぼすんだ」

「そういえば言ってたね」

「これ位、魔術に携わる者なら知ってて当然だと思うんだがね」

「だって学校で習ってないもん」

溜息を吐いたタマを無視して、法子は剣を抜いた。周囲からおおという歓声上がる。

ちよつと気分を良くした法子をタマがたしなめる。

「気を付けるよ法子。あれは魔導師だ。どうやらこの辺りは大分汚染が進んでいたらしい」

「魔導師って強いのか？」

「少なくとも普通の魔物よりは。周囲の汚染された魔力を吸い上げるから、魔力の量は桁違い。それにほとんどが固有の力を持っている」

「成程ね。一筋縄じゃないんだ」

「とりあえず君の力で解析してみたらどうか？ それで大体分かるだろう」

促されて法子は魔物を見た。敵として認識する事で、解析が始まる。

『ウォークキヤット

魔界のキュートな子猫。今流行のレトロなガールースタイルは女の子必見。

ちよつと長いこの爪で遠くの彼を引き裂いちゃいます。

Style: ガーリー&キュート

性格：おちゃめ

彼氏：遠距離恋愛中

基本：正統派女の子』

解析が終わった法子は呆然とした。

「何これ？」

「いや、そう言われても」

「意味は分かるけど、意味わかんないよ。っていうか、女の子なの？ あれ」

「それはそうだろ。どう見ても。法子は異種族の性別はあまり分からないのか？」

「分かんないけど。それより今のは何？ また妨害されたの？」

「とりあえず意味は分かるんだろ？」

「分かる事は分かるけど。でも今のは絶対に変わった」

「なら中途半端に妨害されたんだろう。前の魔法少女みたいに滅茶苦茶な情報にならなかったって事は、恐らく君よりやや格下位の實力なんだろうな」

その言葉で法子の顔が輝いた。

「じゃあ、あいつ私より弱いのか？」

「ああ」

「よっし！ そうと決まれば」

法子は剣を腰に据えてウォークキャットへと向かう。

「あ、おい、ちょっと待て」

諫めようとするタマの言葉も聞かずに法子は走る。

ウォークキャットは腕をだらりと下げて、尚も雄叫びを上げている。法子を見る様子すら無い。

行ける。と確信した法子は剣を力強く握り、ウォークキャットの目前で力強く大地を踏み締め、その刃に魔力を通し、
「防げ！」

タマの思念に反応して法子は咄嗟に刀を止めた。刹那、巨大な衝撃を受けて法子は跳ね飛ばされた。宙を飛ばされながら、法子がウォ

「クキヤットへ視線を走らせると、腕を高々と掲げていた。

着地した法子はようやく理解する。目前に迫った瞬間に、ウォークキヤットが垂れ下げていた腕を振り上げて法子を跳ね飛ばしたのだ。刀が先に当たったお蔭で飛ばされるだけで済んだが、そうで無ければ爪によって切り裂かれていた。

「大丈夫か？」

タマの言葉に法子は頷いた。

周囲から喝采が湧いた。どうやら法子とウォークキヤットの戦いを面白がっているらしい。法子は自分に注目が集まる事を嬉しく思う反面、危険な戦いなのに楽しむ観客を忌々しく思った。

法子が苛々していると、頭の中にタマの小言が響いた。

「あのな、幾ら相手の力量が下だからって、攻撃してこない訳でも攻撃をくらわない訳でも無いんだ」

「分かってるよ、そんな事」

苛々とする法子はタマの換言に不機嫌な調子で答える。

「分かっているなら良いんだけどね。それでどうするんだい？」

「どうすれば良いの？」

法子が更に不機嫌な調子になって尋ね返した。

「は？」

流石にタマも啞然とする。

「私は戦いの事なんて分からないもん。タマちゃんの方が詳しいでしょ？ どうすれば良いの？」

「いや、もつと自分で考えてくれよ」

「分かんないよ。良いから教えてよ。どうすれば良いの？」

タマは一度溜息を吐いて、

「甘やかしすぎたかな」「うるさい」

沈んだ調子で答えた。

「良いかい？ 今度だけだよ」

「はいはい」

「まあ、見た所、相手は接近戦が得意みたいだ」

タマがそう言った途端、ウォークキヤットが腕を振り上げた。嫌な予感がして、タマの思考が止まる。

続いて、ウォークキヤットは腕を振り下ろした。タマの中の嫌な予感が加速する。

「とにかくこの場から離れろ！」

タマの叫び声が法子の頭に届いた後、一拍遅れて法子はその場から飛びのいた。法子が一瞬前に居た場所がひずんだ。何も無い空間に爪痕状のひびが入り、まるでガラスでも割れるみたいにはじけ割れた。

「何？ 今の」

「おそらくあの魔物の能力、というか技だろうね。離れた空間に自分の爪を届かせるんだ」

ウォークキヤットがまた腕を振り上げた。法子は狙いを定めさせない様に動き回りながら反撃の機会を窺う。

「それで？ 向こうは接近戦だけじゃなかったみたいだけど」

「ああ、そうみたいだね」

「どうすれば良いの」

「はあ、ホントちょっとは自分で考えてくれないかな」

「良いから」

「君さ、昨日覚えた事も忘れたの？」

「昨日？ あ」

昨日教わった遠距離まで届く剣撃。確かにあれを使えば近寄る事無く相手を切り裂ける。

「でも相手も同じ様な事やって来るけど勝てるかな」

「実力は君の方が上なんだ。同じ事をすれば勝てる」

「そっか」

法子は笑って刀身に魔力を込め始めた。昨日覚えたての新しい技。新技のお披露目だ。出来れば派手に、カッコ良く決めたい。そう、漫画で良くある様に見開きの太ゴマを使う位の派手さで。

「良いかい？ 狙いは正確に。辺りには人が居る。絶対に当てちゃ

いけない」

「分かつてる。昨日たくさん練習したもん。はずさないよ」

法子は尚も笑って魔力を込め続ける。だがほんの僅かに緊張がよぎった。当てる自信はある。はずすとは思えない。けれど失敗してはいけないと思うと、何だか薄ら寒い気持ちになった。

法子は走り回り、跳び回りながら機を窺う。しばらくして狙いをつけ損ねたウォークキャットの腕が止まった。好機とばかりに法子が込めた魔力を斬撃に換えて、ウォークキャットへと打ち放った。

「馬鹿！」

斬撃は過たずウォークキャットを切り裂いて、法子はほつと安堵する。ウォークキャットは完全に切り裂かれ、胸と腹が分かれた、体の右端が辛うじて繋がっているだけとなった。

安堵した法子の視線の先で、ウォークキャットが傷を押さえてゆつくりと倒れていく。

「やった！」

「良い訳あるか！」

「な、何で？」

困惑する法子の視線の先で、ウォークキャットはゆつくりと倒れ伏す。倒れた瞬間に土埃が舞い。すぐに風に運ばれていく。土埃が消えた向こう、血を噴き出して倒れるウォークキャットの向こうに、観客が居る。

「強く打ち過ぎだ、馬鹿者」

観客の中に子供が居る。血を流して倒れている子供が居る。

「あ」

倒れた子供の血だまりはどんどん広がっていく。泣き声が聞こえる。母親らしき人物が泣きながら子供の傍らに座って何かを叫んでいる。周りの人々が子供の元へ集まってくる。

法子は立っていられなくなって、崩れ落ち、跪いた。だが誰もそんな法子の事など気にも留めない。胴体を切り裂かれた魔物にももはや興味は向けられていない。魔物を取り囲んでいた観客達の注目

は一心に傷ついた子供へと向けられている。

やがて子供は担架に乘せられた。緊張した空気の中、群衆が割れて、子供は輪の外へと運ばれていく。まだ救急車は来ていない。どこかで応急処置をするのだろう。生死の境は時間に依って区切られている。

運ばれていく子供の傍を母親が泣きながらついていく。そのまま子供と共に群衆の向こうに消えるのかと思いきや、ふと母親が顔を上げて法子の事を見た。燃える様な目付きだった。怒りと悲しみと悔しさと恨みの籠った母親の痛々しい視線に晒されて法子は思わず目を逸らした。

逸らした先の観客達もじっと法子の事を見つめていた。

視線を逸らす、その先にもまた目が。目が。目が。目が。沢山の目が法子の事をじっと見つめていた。

そして誰もいなくなる

人通りの無い道に法子は着地した。そこで力尽き変身を解く。闇夜に溶ける様な衣装は、私服となる。法子は汚れる事も構わずに道の上で跪き無念そうに項垂れた。

結局あの後、子供を斬った法子は再び戦う気力を湧かせる事が出来ず、魔物の方もまた深手に動く事が出来ず、膠着したまま、ただ周囲だけがざわついていた。そこにあの法子を負かした魔法少女がやって来て、魔物を送還して喝采を浴びながら帰っていった。

法子は、魔物と魔法少女が消えてからしばらくの間動けずに呆然と何処でもない何処かを見つめ続けていたが、タマの言葉に促されて立ち上がり、取り囲む群衆の頭を越えてその場を離れた。

離れる際に、悪罵の声が響いたが、心あらずの法子にはその言葉は聞こえず、されど悪罵は法子の耳に届いて確かに心を抉った。

そうして帰る途中、精神と魔力をすり減らし切った法子は遂に力尽きて変身を解いた。誰も居ない闇夜の中で、街灯の頼りない硬質な光に照らされて、法子は呆けた調子から立ち直れずにぼんやりと呟いた。

「何でこうなっちゃうんだろう」

誰にともなく吐き出した呟きは風に紛れて消えていったが、タマだけは聞いていた。けれどタマは答えない。法子が何に対して悲観しているのか掴み兼ねた上に、何を悲しんでいようと今は傍観に徹し、法子に成長してもらおうと考えていたからだ。自分で答えを見つけて自分で先に進む。法子はまずその当たり前の事が出来る様にならなければいけない。タマはそう考えていた。

今迄タマが変身させてきた者達は皆耐え難い情動を変身の核に据えていた。ある者は復讐の為に、ある者は友を助ける為に、ある者は一族を再興する為に。だからこそその目的の為に皆必死になって変身し目的に邁進した。一方法子の情動はと言えば、きつい言い方

をすれば子供の気まぐれの延長である。その理由が悪い訳ではないが、必死になれないのであれば、やはり問題がある。

このままいけば、法子はタマが支えていなければ歩けない人形になっってしまう。

「結構さ、頑張ったんだよ。私にしてはかもしれないけどさ。魔法少女になれて嬉しかった。だから一所懸命頑張ってたさ、でも全然上手くないんだもん。なんでだろうね」

法子が引きつった笑いを浮かべる。タマはそれに何も答えない。

「今日なんてあの子を」

一瞬言葉が途切れた。法子の目から涙が零れ落ちる。

「どうしよう、人斬っちゃったよ」

法子が必死に目を擦る。泣きじゃくる。

「死んじゃったらどうしよう」

法子は自分の手を見つめた。直接斬った訳ではない。それでも何故だかその手には斬った時の感触が残っていた。生温い柔らかい物を斬る感触。それは単に料理の際に包丁で鶏肉を斬った感触を思い出したものでしかなかったが、今だけは確かに子供を斬った感触でそれを感じ続けている内に、自分の頭が狂っていく様な気がした。法子は思わず頭を振って、手の感触を払いのけようとする。

タマは何も言わない。法子が人を殺したとしてもどうこう思わない。今迄の契約者の中にも人殺しは幾人か居た。法子がどんな事をして、どんな法律を破り、どんな倫理観を蹴り飛ばしても、タマは何も思わない。

「ねえ、タマちゃん、私どうすれば良い？」

ただこれだけはやめろと思う。法子はどうしてこんなにも自分を頼ろうとするのだろう。今迄一人ぼっちだったから、それを埋めた自分に殊更依存するのだろうか。それなら下手に励まそうとしてきた事は失敗だったのか。

悶々としつつ、タマは答えた。

「さあね。それは君の問題だろ？」

「冷たい」

法子の沈んだ言葉に苛々してタマは怒鳴った。

「勝手にしろよ！」

法子の呼吸が止まる。

「何でそうなんでもかんでも私を頼ろうとするんだ！」

言い切ってからタマは言っちゃったなあと思った。多分法子は傷ついただろう。それでも自分の欠点に気が付いてくれれば。そう期待してタマが法子の言葉を待っていると、やがて法子が言った。

「……ごめん」

そう謝った。まだ何か言いたそうにしている。タマはもうしばらく待つ。これから頼りつきりにならない。もっと自分の頭で考える。そう言ってくれるだけで良い。そんな言葉を待っている。

けれど法子の言葉はタマが期待したものとまるつきり違うものだった。

「……私、魔法少女辞める」

「は？」

「だって、私、何やっても上手くいかないし、これ以上続けても良くなるなんて思えないし、自分で考えてなんて出来ないし、それに……それに人……斬っちゃって、何だかやになっちゃった」

タマは絶句した。本気か？ 一瞬、何か魔術に齟齬があつて、意志の伝達に不具合でもあるんじゃないかと疑う位に、信じられなかった。

「だから魔法少女辞めたい。……あ、勿論、ずっとつて訳じゃないと思うけど、多分またやりたくなるだろうし。でも……しばらくの間は魔法少女……辞めたい」

法子が遠慮がちに伝えてくる。その思念を受けて、タマは駄目だと思った。

こいつは駄目だ。

「ね？ だからしばらくの間だけ」
「分かった」

「ホントに？」

「ああ。君との契約は打ち切ろう」

「うん！　ありがとう」

嬉しそうに言った法子へ、タマは溜息を伝える。

「やっぱり甘やかしすぎた」

申し訳なさに身を縮こまらせる法子へ、タマは尚も伝える。

「あんまり甘やかすのは良くないみたいだね。次の参考にさせてもらうよ」

「う、うん。きっとまたすぐに元気になると思うから、その時に、ね」

タマが不思議そうに尋ねた。

「その時？」

「え？」

「どうして君は次があると思っっているんだい？」

「だって……タマちゃんが次の参考につて」

「私の次つて言うのは次の契約者つて意味だと思わないのかい？」
法子の思考が止まる。

「何か勘違いしてないかな？」

「勘違いつて……」

「私は人を変身させる使命を持っているんだ。変身しない人間の傍に居続けるなんてあると思う？」

法子が手に握るタマを驚愕の目で見つめた。

「で、でもタマちゃん」

「君が私の事を友達だろうと何だろうと思うのは勝手さ。私だつてそういった関係になる事にやぶさかではないよ。けれどね、いの一
番はまず契約なんだ。一緒に居る者は契約者じゃなきゃ意味が無い
んだよ」

「タマちゃん待つて」

「それで君が私との契約を止めると言うのなら」

「違ふよ。ほんの少しの間だけで」

「同じ事だよ。君は契約者じゃなくなるんだから」

「タマちゃん、分かった。私が間違ってた。魔法少女辞めないから、だから」

必死に縋る法子をタマは冷徹に振り払う。

「君はヒーローになる事を望んでいたね。けれど今の君の姿はヒーローから掛け離れすぎている」

「ごめん、タマちゃん、ごめん」

「君の言葉にも一理あるよ」

皮肉な笑いを伝えながら、止めの言葉を放つ。

「これ以上続けても良くなるなんて思えない。全くその通りだ」

タマと法子の繋がりが途切れた。意志伝達の魔術が途絶え、今迄伝わって来ていた相手の精神が伝わらなくなつて、法子は狂わんばかりに剣の形をしたアクセサリーに縋る。

「ごめん。ごめんタマちゃん。待ってよ。嫌だよ」

その時、忍び笑いが聞こえてきた。

振り返ると、二人の女性が法子を横切る所だった。いつのまにか現れた通行人は法子の奇態を見て不気味さ半分おかしさ半分で、気味の悪い物を見る様な目をして笑っていた。目だ。また目が法子の事を見つめている。

法子は恐ろしさに駆られて、その場を逃げ出した。

しばらく走って公園に着いた。あの四方を取り囲まれた誰も来ないはずの公園だ。まさしく、今その公園には誰も居なかった。

ブランコに座って、法子はまた剣の形をしたアクセサリーに目を落とす。

許して欲しい。また話して欲しい。けれど幾ら謝っても答ええてくれない。タマちゃんは完全に怒ってしまった。ならどうすれば良い？ タマとの最後のやり取りを思い出す。タマちゃんが望んでいたのは、私がヒーローになる事だ。私がヒーローになればきっとタマちゃんは許してくれる。

一瞬湧きかけた希望は、すぐさま、けれど、と沈められた。けれ

ど私はヒーローになれなかった。強くなろうと頑張った。人を助けようと頑張った。けれどそれをした結果が、今なんだ。ヒーローになろうとしてもなれなかったんだ。ならどうすれば良い？ どうすればヒーローになれる？

「分かんないよー」

法子が情けない言葉を吐きだして、ブランコをこぎ始めた。

出来れば誰かに教えて欲しい。けれどいつも教えてくれたタマちゃんはまだもう居ない。相談出来そうな友達だっていない。

ふと最近話しかけてくれた人の事を思い出した。そうしてどうして自分がこの公園に来たのか何となく悟った。いつもこの公園にやって来る転校生。けれどその転校生も来る気配は無い。

思い出してみれば、あの将刀という転校生はいつも憎まれ口ばかり叩いてくる。今日だって私の事を軽蔑していた。そう考えると話しかけてくれては来たけれど、きつと本当の所は私の事を嫌いなんだろう。当たり前だ。私に好意を持つ人なんている訳が無い。

後は家族。けれど家族だって、もし家族じゃなければきつと私の事を相手にはしないだろう。特に弟なんて私の事を特に嫌いそうだし私と家族は、家族という繋がりでしか繋がっていない。いや、もしかしたら、辛うじて繋がってはいるものの、いつも私の事を邪魔だと思っているのかもしれない。

そう考えていくと、誰も居なくなった。法子が相談できる相手は居なくなった。

法子はブランコを強く漕いで、流れる涙を風で堰き止めようとした。勿論、そんな事で涙が止まる訳が無く、後から後から流れてくる。

一人ぼっちなのはずっとだった。だからいつもの日常に戻っただけなのだ。今迄だって一人ぼっちを寂しいとは思いつつも、嫌だと思いつつも、それでも何処か慣れた自分が居て、一人ぼっちでも平気だと思いつつも自分が居た。

だからおかしかったんだ。私に話し相手がいるなんて。タマと出

会ったこの数日間だけが異常だったんだ。また元に戻るだけなんだ。昔と同じになるだけなんだ。けれど、それでも、その異常な数日間が——この上の無い幸福感を感じた数日間が、確かに法子を変えていて、一人ぼっちな自分を思うと死にたくなるくらいに、嫌になった。

誰も見えない孤独な日常

朝起きて、いつもの通り用意をして、剣の形をしたアクセサリーを手に取って、アクセサリーから流れて来るはずの精神が感じ取れなくて、そこでようやくはつきりと覚醒した。昨日の事を思い出して、朝の清々しい気持ちから急転直下、鬱々しくなる。

アクセサリーに幾ら話しかけても答えてくれない。何度謝ってもうんともすんとも言ってくれない。悲しくなっていて目に涙が浮かんだ。昨日、あの公園からどう帰ったのかあまり覚えていない。泣きながらブランコを漕いでいたところまでは憶えているのだが、それ以降は曖昧だ。多分放心しすぎて、無意識の内に帰ってきたに違いない。

結局、タマは法子と繋がってくれなかった。タマはただのアクセサリーになった。

憂鬱な気分を強くして外を見ると、晴れ晴れとした青空が広がっていた。外はあんなにも明るいのに、自分の心はなぜこれほどに暗いのか。

溜息を吐いて、昨日の事に思いを巡らせて、子供を斬った事を思い出して、吐き気がした。近くのビニール袋を急いでとって、その中に大きく開いた口を突き出す。幸いにも涎が少し垂れただけで、吐瀉する事は無かったが、何だか酸っぱい味が口の中に広がって、気持ち悪くなった。

斬った。人を斬ってしまった。大きく広がった血だまりが思い出される。慌ただしく運ばれていく子供が思い出される。自分に向けられた恨みがましい目が思い出される。

殺してしまった。人を殺してしまった。そう思うと更に気持ち悪くなった。涙は出ない。ただ吐き気が酷い。頭が痛い。壁にぶつかりたくなった。体を傷つけたくたしょうがなくなった。我慢できなくなつて、思いつきり頭を後ろに引いて壁にぶつける。ぶつけると

後頭部に最初は生暖かい張り締める様な感覚。それがやがて鈍い痛みに変わっていった。けれどそれで何が変わる訳でもない。心も全く晴れない。

虚しいだけだった。

部屋を出て一階に下りる。この期に及んで日常生活を送ろうとする自分が浅ましく感じられた。制服を着た自分が何だか許せない。けれど日常生活を捨てる勇氣は、法子に無かった。

リビングに入ると、弟は既に朝ごはんを食べ終わっていた。

「おはよう、姉ちゃん。昨日はどうだった？」

弟の質問は姉が将刀と上手くやれたか気になつての言葉だったが、法子には人を斬った記憶が喚起された。顔を俯かせる。答える氣力は無い。

弟はそんな姉を見て、どうやら将刀と上手くいかなかったらしいと早とちりして、話頭を転じる事にした。笑顔に向けて、楽しそうに語る。

「そついや、あの魔物騒ぎ大変だったみたいだよ」

だが法子の反応は無い。その事に焦って、弟は更に朗らかに言った。

「何だか、怪我人も出たらしくてさ。幸い生きてるみたいだけど、やっぱり姉ちゃんの言った通り、危ないんだな。姉ちゃんが止めてくれて助かったぜ」

そこでようやく法子はのろのろと顔を上げた。

「生きてるんだ」

「え？ うん、危ない状態だったけど生きてるって、さっきニュースで言ってたよ。意識も取り戻したとか何とか。もしかしてその場面、姉ちゃん見てたの？」

「うん、ちよつとね」

法子が元氣無さそうに答えるので、弟はそれ以上話題にするのを止めた。きつと姉はその誰かが怪我をしたところを見てショックを受けているのだらうと思ひ、無神経な話題を反省した。

「じゃ、俺もう行くから」

弟は気まづくなって、法子の脇を通り抜け、出て行った。残された法子はほっと安堵した。どうやら一命は取り留めていたようだ。人殺しにならなくて済んだ。応急処置を施した人や病院の人達に感謝する。

だがすぐに自分を戒めた。斬った事には変わりない。命が助かったとはいえ、傷付けたのは確かなのだ。罪が軽減される事は全く無い。一歩間違えれば死んでしまっていた以上、人殺しの称号が晴れる事は無い。

法子はともすれば嬉しくなる心を押さえつけながら、朝ごはんを食べて学校へと向かった。

「いやー昨日は怖かったな」

「ねー」

「そういや、あの斬られた子、どうなったんだろう？」

「命は助かったみたいですよ」

「そうなんだ。良かったな」

「おっす」

「お、武志、おはよー、残念だったね。試合中止になって」

「別に大した大会じゃなかったから。楽勝過ぎてつまなかった。それよりお前等は大丈夫だったのか？」

「ああ、あたし達はね。近付かなかったし。摩子なんて真っ先にどっか行っちゃうし」

「だって怖かったんだもん」

「友達のあたし達を置いていくなんてねえ」

「薄情ですねー」

「だからさつきから謝ってるでしょ。もう」

「分かってるよ。あたしもむっちゃ怖かったしね」

「私も腰が抜けてなかったら逃げてたよ」

「そっかお前等が無事だったなら。良かったよ」

「武ちゃん、もしかして心配してくれてたの？」

「当たり前だろ……特にお前は一応幼馴染だしな」

「愛だねー」

「愛だねー」

「愛ですねー」

「うっせえ」

「ありがとね、武ちゃん」

「え、いや、別に。じゃあ、俺行くから」

「愛だねー」

「愛だねー」

「愛ですねー」

「だからお前等うっさい」

「行っちゃった」

「ホント可愛い奴だな、あいつは」

「あ、そういえば」

「どうした？」

「昨日法子さんも居たけど、大丈夫だったかな？」

「あー、そういえば、丁度魔物が現れた小学生の部に向かってたからなあ」

「でも、重傷を負った子以外、特に怪我人は居ないみたいですし、大丈夫だったんじゃないですか？」

「うん。でもまだ学校来てないし」

「いやに気にするね」

「思い出してみれば、法子さんていつも一人だったでしょ？」

「それが？」

「何だか寂しそうにしてるし」

「まあね」

「きつとグループが固まっちゃってるから溶け込みづらいんじゃないかなと。ほら、女の子って一度グループ作ると入れ変わり辛いでしょ？」

「そうかもしれないけど。それがどうしたんですか？」

「うん、だからさ、私達の中に入れてあげられたらなって」

「お節介な気がするけど」

「入れてあげるっていうのも、何だか上からですし」

「そうかもしれないけど、でも」

「まあ、良いんじゃない？　とりあえず話しかけてみたら？　嫌そうなら、それつきりにすれば良いし、嬉しそうにしてくれたら、その時は仲良くなれば良いんじゃない？」

「そうですね。友達になれたらそれは良い事です。いつも本を読んでいるし、何だか私と話が合う気がします」

「だよ、だよ！」

「まあ、摩子がしたいなら、したいようにすれば良いんじゃない。あたしは別にどっちでも良いし」

「うん、じゃあ、早速話しかけてみるよ！」

「お、噂をすれば」

「とりあえず無事だったみたいですね」

「ほら行ってきな」

「うんじゃあ、行って……」

「あ、待つて。何だかすげえ落ち込んでるな」

「そうですね」

「もしかして昨日怪我したのって法子さんの知り合いなんじゃ」

「そうなのかも」

「あれは話しかけちゃまずいよね」

「知らないけど、少なくともあたしなら話しかけない」

「だよ。今は止めとくか」

法子が酷く沈んだ様子で入って来た時、その様子にクラス中のみんなが注目した。法子が落ち込んでいる。あれはきつと一昨日の悪口を本当は聞いていたからに違いない。悪口を実際に言っていた者達は何も感じず無遠慮な視線を投げかけたが、それ以外の者達は何

だか申し訳なく思つて、すぐに目を逸らした。

法子はそんな形で注目を浴びている事なんて全く気が付かずに、ひたすら下を向きながら自分の席についた。すぐに教師がやって来て、学校が始まる。

法子はいつもの様に俯きながら学校生活をやり過ごす。だがかつての諦念と羞恥の入り混じった無心に近い心ではいられなかった。タマという話し相手が居たという事実は決して心から離れる事は無く、本を読んでも頭に入らず、寝ようとして周りの音が大きく聞こえる。孤独が酷く浮き上がって、法子は涙が出そうな位に悲しくなった。

話したい。話し相手が欲しい。タマちゃんに戻つて来て欲しい。そう考え続けているのだけれど、そんな切なる願いももまた自分が一人ぼっちだと実感する為の材料にしかならず、法子はひたすらタマが戻つてくる事と今日という日が過ぎる事を祈りながら、俯いて学校生活を送り続けた。

その願いは半分だけ通じて、時は進み帰りの時間にさしかかり、最後の関門ホームルームが始まった。それも教師のちょっとした話が終われば解放される。そう考えて、法子は早く帰りたいと思ひ続けたが、事はそう上手くいかなかった。

「あ、そうだ、学園祭ももう一週間前だ。お前等そろそろ準備しとけよ」

教師がぶっきらぼうな調子で語りかけてくる。

法子は嫌なイベントが迫つて来たなとやさぐれた気持ちになった。今の最低に沈んだ気持ちで孤独な学園祭を迎えたら死んでしまうのではないだろうか。

「出し物は前に決めたよな。えーっと……何だったかな？」

教師の恍けた発言に、周囲が一斉にカフェだと突っ込む。法子にはその予定調和なやり取りがうつとうしくてたまらない。

やさぐれている法子を余所に、学園祭の話がどんどん纏まっていく。中にはめんどくさそうな人も居るけれど、その人も含めてク

ラス全体は楽しそうに、学園祭に向けてはしゃいでいる。

ただ一人自分だけが何も喋らずに一人ぼっちで俯いている。本当は周りと同じ様に楽しくやりたいのに。本当は周りの人達と親しくしたいのに。

いつもクラス一丸となる様なこういったイベントは嫌で嫌で仕方が無かったが、今日は何だかいつもより色々と考えてしまう。どんどんと嫌になる。その原因であるタマの失踪を思うと、更に嫌になった。

法子は文化祭に向けたやり取りを聞きながら胸の奥に何か重い者が詰まっていくな心地がしていた。

きつと私がこんな風にみんなで楽しくする事なんて一生ないんだろっな。

英雄になりたくて

時は早いもので、ついこの間、一週間前に迫ったと謳われていた文化祭がもう明日に控えていた。法子のクラスの準備は着々と進み、既にほとんど出来上がっている。先程最後の看板を作り終えて、後は片づけをしつつ、残りのこまごまとしたところを飾り付けているところだ。

この一週間前、法子の心境も様々に変化した。法子の様子は以下の通りとなる。

初めの二日はひたすら落ち込むだけだった。初日はあのホームルームが終わった後、ずっと暗澹とした想像をしながら、自分の駄目さ加減を呪って、家に帰り、何もする気が起きずにそのまま寝た。二日目、ほぼ初日と一緒だが、ホームルームが終わった後に学園祭の準備があつた。ほとんどクラスとの繋がりが無い法子はまともに立ち動く事も出来ず、ほとんど役に立つ事が出来ず、その辺りをうろろししながら、手持無沙汰に仕事をしているふりをしていた。クラスの見解は、この前の陰口で傷ついたから仕方が無い、やっぱりあいつは役に立たないクラスのゴミという二つに分かれた。それらの評価を法子はほとんど聞かなかったが、最後の最後、丁度帰ろうとした時に、あいつ本当に使えないな、そんな言葉が聞こえて法子は思わず振り返ってしまった。意地の悪そうな顔達が法子を見て笑っていた。法子は逃げる様に走って帰った。何もする気が起きずそのまま寝た。

三日目、タマを失って沈む気持ちに加えて、更に学校に行きたくないという憂鬱までが混じって、朝からどん底に陥っていった。だがそんな強い気持ちを持ち続ける事は出来ず、底まで来たのなら後は上るだけで、登校している内に法子の心境に明確な変化が表れる。前日まではタマの事を考えても、ひたすらタマが居ない事に沈むだけだったが、その日はどうすればタマは戻って来てくれるだろうと

考える様になった。必死に頭を働かせてタマとの会話を思い出しながら、タマが戻って来てくれる為の方法を考えて、学校に着く頃になってとりあえず自分の欠点を直していこうと結論付けた。欠点とは何か。それこそ数えきれない位にあるのだが、法子はその中で一番気にしている事、非社交性を治そうと考えた。そうだ、クラスの人と話してみよう。私が他の人と喋れる様な位にまともになったらタマちゃんは戻って来てくれるかもしれない。そんな風に心を弾ませて法子は教室へと向かった。まずは挨拶を。心に久しぶりの火を灯らせて、教室のドアを開き、そうして大きく息を吸って、大きな声で朝の挨拶を言い放とうとして――結局声を出せずに自分の席へと座った。駄目だった。話そう話そうと強く思うのだが、実際に行動に起こす事がまるで出来ない。結局、何度も話そうとしては諦めて、放課後まで誰とも話せなかった。学園祭の準備では相も変わらず積極的な参加は出来ないが、せめて少し位は役に立とうと、前日よりは大分働いた。だが頑張ったところで、端から見れば結局少し役に立った位であり、ついでに手伝いの中で相手から話しかけられても法子は喋る事が出来ずに黙っていた為に、クラスの評価は前日より更に明確に分かれた。辛い事があったのに頑張ってくれている。今更何やる気出してんだよ。同情と嫌悪の割合は全く変わらないうが、前日より法子に注目する人数が増えて、票かは両極端になった。教室から向けられる二種類の視線。法子がもしその視線に氣付いたらいつもの如く後ろ向きに捉えて落ち込んでいたであろう。だが幸いにも法子はその視線には氣が付かず、ついでに心にはほんの僅かながらも達成感が湧いた。今日は頑張った。これならもしかしたらタマちゃんも。そんな期待をして家に帰るのだが、結局タマは反応をみせてくれず、がっかりしてまた沈んだ気持ちになり、そうして前日と同じで何もする氣が起きずにそのまま寝た。

四日目、ヒーローが氣になった。別れる際にタマは法子がヒーローになれないと失望していなくなった。ならヒーローになればまた戻って来てくれるんじゃないだろうか。そう考えると、それが答え

の様な気がした。どうしてこんな簡単な事に気が付かなかったんだろう。答えを見つけたつもりは法子は何処か嬉しい気持ちで学校へと向かった。学校での様子は前日と変わらない。文化祭の準備もほぼ同じ。今日は加えてヒーローについて考えた。ヒーローにはどうすればなれるのだろうか。帰り道の途中、ヒーローの条件とは強さと優しさではないだろうかと思いついた。誰にも負けない強さと人を助ける優しさ。そうだ、そうに違いないと勇んで、法子は人助けをしようと辺りを見回しながら家に帰る。だが特に困っている人は見つからず、最終的に家の前に落ちているポイ捨ての空き缶を拾っただけで終わった。優しさが駄目なら強くなろうと、腕立て伏せを開始し、三回目で力尽きて、疲れ切った法子はそのまま寝た。

そうして今日、五日目、クラスの人々はほとんど帰り始めて、残りは有志達だけが残っている。法子もこそそとした様子で家路についた。帰り際に、ホントキモいよな、あいつ、という声が聞こえたが、今日は振り返らなかった。顔が熱るのを感じながら、急いで教室から離れた。結局この一週間、タマは反応してくれなかった。もしかしたら今持っているのは既に何でもないプレスレットに過ぎずタマはもう別の所に行ってしまったのではないか。そんな不安が心をよぎる。だがそれを考えても仕方が無い。今はとにかく自分が出来る事をするだけだ。

どうすればタマは戻って来る？ 再び頭を巡らせて、ふと思いつく。アトランという巨大なショッピングセンターがある。最近出来たその商業施設には国内最大の魔術専門店がある。そこにタマは行きたがっていたのではなかったか。もしかしたらそこへ行けばタマが興味を持って戻って来てくれるかもしれない。

はつきり言つて、人通りの多い所に行きたくは無かったが、タマが戻って来る為になら仕方が無い。法子は意を決して道を変えた。

しばらく歩いただけで、法子は死にそうになりながらそのらの石堀に手を掛けた。まだ着かない。一体何処にあるのだろうか。情報に疎い法子はショッピングセンターがどの位離れているのか知らなか

った。近いとだけ聞いていたが、それは専用のバスや車で行く場合の話であって徒歩で行く距離ではない事を知らなかった。荒い息を吐きながら、そもそも道順すら知らない事を思い出して絶望的な気持ちになった。

ふと近くから人ごみ特有のざわつきが聞こえてきた。その賑やかさに思わず踵を返したくなったが、踏みとどまる。ショッピングセンターに行けないまでも人通りの多い所に近付いてみよう。そんな決意が心に湧いた。そうすれば何かが変わる気がした。

一歩踏み出そうとした時、

「あ、お前」

傍から聞こえてきた呼びかけの所為で足が止まった。聞き覚えのある声だ。見れば、そこに転校生の野上将刀が居た。

将刀を見た瞬間、法子は苦手だなと思った。思った瞬間、その思いは爆発的に広がって、法子の中で将刀に対する明確な苦手意識が育ち上がった。

「……野上君」

辛うじて法子は言葉を発する。法子が名前を呼んだのは決して話し合いの為の緩衝剤ではない。それは相手に主導権を持たせまいとする、拙い隔意だ。相手に一方的に喋らせればどんどん相手の会話は調子上がり、それに比例して自分の苦痛が増えていく事を法子は知っていた。けれど法子の隔意は何の効力も無く、将刀は気安い応答と受け取って、朗らかに笑った。

「どうしてこんな所に？」

友達が居なくなつて寂しくて、だなんて言える訳が無い。しかし咄嗟の嘘も思いつかずに、法子は顔を伏せた。

「そっちこそ、どうして？」

「俺、は……まあ、何となく」

将刀が齒切れ悪く答える。

「じゃあ、私も何となく」

法子も不愛想に答えた。

沈黙が下りる。

思いのほかに弾まない会話に戸惑いつつ、将刀は気まづくなった
雰囲気を変える為に話題を転じた。

「そういえば、文化祭の明日だな」

将刀は無難な話題をだしたつもりだったが、法子が文化祭に感じる印象は苦痛と無関心しかない。法子は笑顔で文化祭の話題を出した将刀に怒りすら感じて、押し黙った。

将刀は法子が話題に食いついてこない事を訝しみつつも、まさか怒っているとは思わず、何とか法子の琴線に触れる話題を手繰り寄せようとする。やはり笑顔のまま将刀は言った。

「そっぴゃ、文化祭の準備頑張ってたな」

将刀は法子の振る舞いを頑張りと見ていた方で、単純な励ましのつもりだったのだが、後ろ向きな法子には将刀の言葉が皮肉にしか聞こえない。瞬間、沸騰した感情のままに叫ぶ。

「分かってるよ！ あたしが役に立ってないってのは！ みんなに嫌われてるのも分かってるから！ いちいち言わなくても分かってるよ！」

「な！ そんな事言ってないだろ！」

「うっさい！ 自分でも分かってるよ、こんなんじゃ駄目だって！ でもしょうがないでしょ！ どんなに頑張ったって人並みに出来ないんだから！」

急な剣幕に圧されて何も言えずにいる将刀へ、法子は尚も言い募る。

「良いよね、野上君はさ！ 楽しいんでしょ？ 生きてて！ 明日の文化祭だって楽しみなんだよね？ でもね、世の中にはあんた等みたいな恵まれた人間ばかりじゃないの！ 何をしたら、皆に嫌われる人が居るの！ 明日の文化祭だって、生きてる事だって辛くて仕方が無い人が居るんだって分かってよ！」

ぶちまけられた一方的な物言いに今度は将刀が逆上する。

「お前な！」

そこで感情が高ぶり過ぎて一瞬将刀の声が詰まる。突然の将刀の大声とほんの一時の悲しげな間に法子は虚を突かれた。そこに将刀の言葉が突き刺さる。

「そんだけ後ろ向きに考えてれば、誰だってうつとういと思うに決まってるんだろ！ こっちが楽しくしようとしてるのに、そっちがそれをぶち壊して、しかもそれを他人の所為にして不満に思ってるって言うなら、どうして物事を前向きに捉える努力をしないんだよ！ 頑張ってるよ！」

それはまさしく法子が日頃から自分に対して感じている評価その物だった。法子は何も言い返せずに、目に涙を浮かべて顔を俯けた。法子の頭の中に言葉の衝撃が鳴り響いている。視界がゆっくりと揺れて安定しない。首筋から悪寒と熱が奇妙に縋い交ぜになりながら這い上がって、息が荒くなる。法子はよろめいて、後ずさった。もう将刀の声は聞こえていない。

「あんたはみんなに嫌われているって言っているけれど、そんな事は——あ、おい！」

法子はその場に居られなくなつて、背を向けて人通りの多い道へ走り出た。将刀の言葉など聞いていられる余裕は無く、法子は涙をこぼしながら、後ろ向きな自分を責め、それを指摘した将刀を責め、自分の周囲を責め続けて、人通りの多い道を駆け抜けた。先程の将刀の言葉に、自分という存在と今迄の生き方とこの一週間の頑張りを否定された気になつて、法子は心を瓦解させながらひたすら頭の中で呟き続ける。

嫌だ、もう全部嫌だ。

直ぐに息が切れて走れなくなり、丁度良く在った時計台を囲むベンチに腰かけて、ふさぎ込んだ。

嫌だ、嫌だ。

段々と思ひは曖昧になり、もう何が嫌なのか明確に思ひ浮かべぬまま、むしろ明確な思考に結びつかぬ様に頭の中を塗り潰すそうと

嫌だ嫌だと思い続けた。

そこに声がかけられた。

「ねえ、一人？」

見上げるとスーツを着た中年男性がにやにやと笑いながら法子の事を見下ろしていた。脂ぎった毛深い手が法子の肩を掴む。

「ちよつと見ててよ」

そう言つて、中年男性はもう片方の手で懷から銃を取り出して、己のこめかみに当て、引き金を引いた。音も無く中年男性の頭が破裂して消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687x/>

孤独な魔法少女は英雄になれるか？

2011年11月14日03時21分発行